HIMAL CHULI

7,893m

'86. 9. 8~10. 28

日本大学ヒマルチュリ登山隊 1986

NIHON UNIVERSITY HIMAL CHULI EXPEDITION 1986

日本大学山岳部

桜門山岳会

HIMAL CHULI

7,893m

'86. 9. 8~10. 28

日本大学ヒマルチュリ登山隊 1986

NIHON UNIVERSITY HIMAL CHULI EXPEDITION 1986

日本大学山岳部

桜門山岳会

ヒマルチュリ南西面全景

HIMAL CHULI

7,893m

1986 AUTUMN

残照のヒマルチュリ南西壁

3

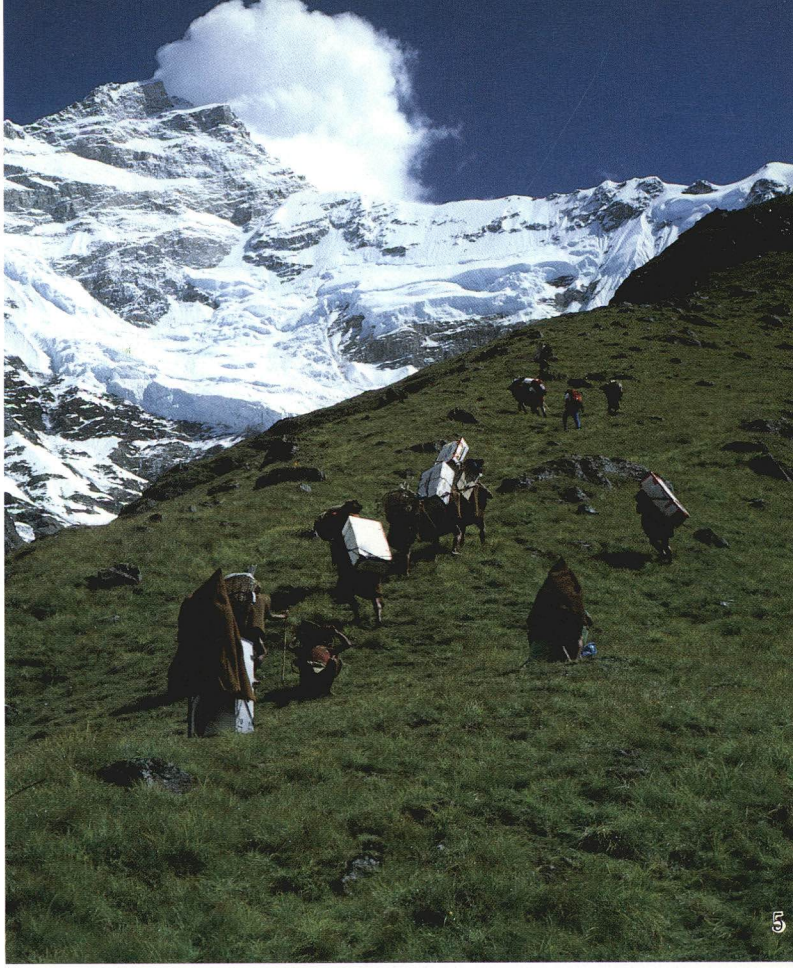
4

3．ドルディ・コーラ下流の田園地帯

4．デュムレの渡渉

5．休養キャンプからＢＣへの荷上げ

6．キャラバン風景――休養キャンプも間近



7．8．9．11．C1～C2間の岩壁部
10．スーパークーロワールを登る

10

11

ナイフリッジ C2〜C3間　1

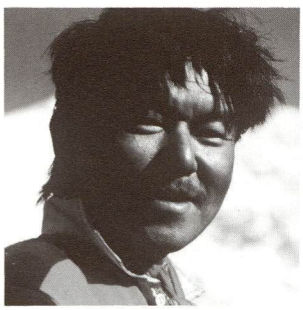
13. 最終岩壁7,800m付近のルート工作　　14. 最終岩壁7,800m付近 チューリン氷河を眼下に見下ろす

15. 16. 10月26日　13:00 南西壁を抜け、古野(上)、ニマ・ドルジェ(下)が頂上に到達する。同日、17:20 中村、井本がヒマルチュリの頂きを踏んだ

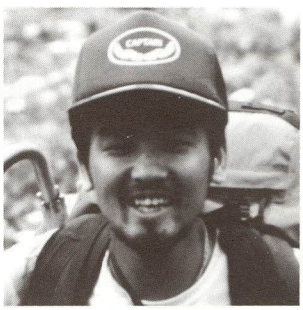
上空よりヒマルチュリの大岩壁（神崎撮影）

Ｃ４よりヒマルチュリ南稜

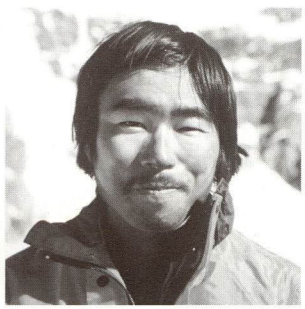
隊　員



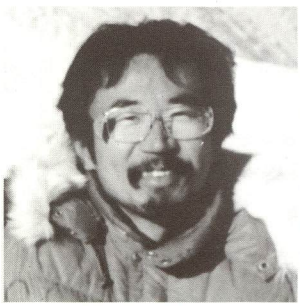
隊長　岡田　貞夫
Sadao Okada



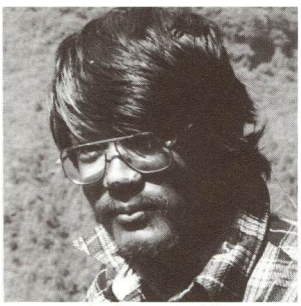
中村　日出
Hizuru Nakamura



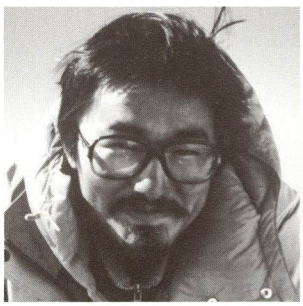
村口　徳行
Noriyuki Muraguchi



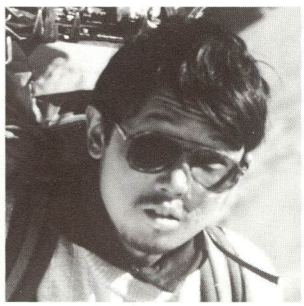
鈴木　弘之
Hiroyuki Suzuki



古野　淳
Kiyoshi Furuno



井本　重喜
Shigeki Imoto



石川　一郎
Ichiro Ishikawa

ニマ・テンバ（サーダー）
Nima Temba

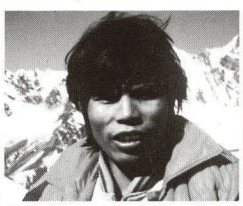
ダワ・ギャルツェン（ハイポーター）
Dawa Galtsen

アン・ドルジェ（ハイポーター）
Ang Dorje

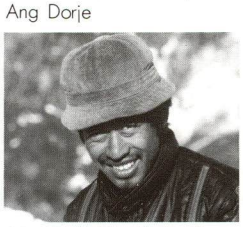
ニマ・ドルジェ（ハイポーター）
Nima Dorje

チンジ・ドルジェ（ハイポーター）
Thingy Dorje

アン・ノルブ（コック）
Ang Norbu



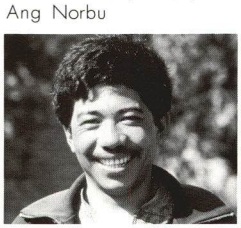
ビヘンドラ・ラマ（キッチンボーイ）
Bihendra Lama



テク・バードル（キッチンボーイ）
Tek Bahdur

チョンバ（メールランナー）
Chongba

ダワ・テンジン（メールランナー）
Dawa Tenzing



ドルジェ・タマン（キッチンヘルパー）
Dorje Tamang

ゴンブ・シェルパ（キッチンヘルパー）
Gonbu Sherpa

テージ・ナト・ポーデル（連絡官）
Tage Nath Poudel

Ｃ３にて

ＢＣにて

序

日本大学山岳部部長　沼　尻　正　隆

ネパールヒマラヤ山系中、特に残された難ルートであるヒマルチュリ南稜からの登頂は、わが日本大学山岳部並びに桜門山岳会にとって、多年念願していたものであった。

先に1981年には、7,600 mまで達しながら厳しい自然現象に阻まれて、あと僅かに293 mを残してついに登頂を断念せざるを得なかったのである。当時それは「勇気ある撤退」として称讃されたが、誰もがいつかは我々日大の手によって初登攀を成功すべく深い思いを抱いていたのである。そしてそれが多くの人々の温かい支援によって86年夏、登攀計画が実現し、8月に岡田貞夫隊長をはじめ、中村日出・村口徳行・鈴木弘之・古野淳・井本重喜・石川一郎の7名の諸君を送り出すことができたのである。そして遂に10月26日、中村・古野・井本の3隊員とシェルパ1名のアタック隊が南稜からの初登攀に成功した。それは輝かしい多年の宿願の達成であり、日本ばかりでなく世界の山岳史上に大きな足跡を印したことであった。ただ残念なことは、その栄誉ある登頂者の一人である中村日出君をその帰途に遭難によって失ったことである。このことは何としても追悔される痛恨事であった。特に登山隊として同行した諸君にとって登頂成功のうちにも岳友を失った悲痛の思いはいかばかりであるか同情にたえない。

この度ヒマルチュリ登山隊の詳細な報告書が刊行されることになった。この報告書は多年ヒマルチュリ登頂にかけた我が山岳部並びに桜門山岳会の不滅の成果として、今後ヒマルチュリを目指す世界の登攀者への貴重な導きの資料であると共に、ヒマルチュリ登頂に全てをかけて逝った中村日出君の不滅の記録としての鎮魂録でもある。中村君のご冥福を心から祈ってやまない。

HIMAL CHULI 1986

目　次

序 …… 沼尻　正隆

第Ⅰ部　―登攀記録―

南稜を経て頂上へ …… 岡田　貞夫

先発記録 …… 古野　淳

ベースキャンプへ …… 鈴木　弘之・古野　淳

ヒマルチュリへ　頂きへ …… 村口　徳行

帰　路 …… 村口　徳行・鈴木　弘之

行動表・個別行動表 ……

―記録・報告・学術―

装　備 …… 井本　重喜

食　糧 …… 石川　一郎

酸　素 …… 古野　淳

医　療 …… 大城　泰・鈴木　弘之

トレーニング …… 村口　徳行

高所順応トレーニングの経緯 …… 浅野　勝己

学術・ネパールの教育事情 …… 鈴木　弘之

ヒマルチュリを終えて …… 石川　一郎・井本　重喜

鈴木　弘之・古野　淳・村口　徳行

第Ⅱ部　ー事故報告ー

中村君の御冥福をお祈りします …… 戸村　貞男

1. 登頂及び事故発生までの経過 ……

2. 検討と反省 …… 岡田　貞夫

3. 第二次捜索報告 …… 神崎　忠男

ー追　　悼ー

追　悼 …… 岡田　貞夫

日出さんへ …… 鈴木　弘之

忘れえぬ日 …… 松野　　豊

ー捜索協力のお願いー ……

＊

日本大学ヒマルチュリ登山隊 1986 日誌 ……

会計報告 ……

A Summary of the Himal Chuli ……

協力者名簿 ……

おわりに …… 岡田　貞夫

編集後記 ……

第Ⅰ部　登攀記録

南稜を経て頂上へ

計画と準備

岡田　貞夫

私達の目指したヒマルチュリ（7893m）は、ネパールヒマラヤのほぼ中央に位置し、首都カトマンズからヒマラヤ山脈を見渡す時、ヒマルチュリは菱形の大岩壁を抱きひときわ大きく空を突いている。西はアンナプルナ山群、北にはチベット高原が広がり、東はガネッシュヒマールの山々に囲まれており、マナスル・P29に続きマナスル三山の南端に聳えている。1960年秋、慶応大学隊が、西面ムシ・コーラより初登頂を果し、その後数々の隊が東面・南西面と挑んだものの、18年後1978年になって雪と岩の会が南西面ドルディ・コーラより南西稜を経て第2登を成しとげた。1981年の日本大学隊は、許可取得にあたり、ヒマルチュリの未踏のルートを検討した。オールラウンドな力を必要とし、最短距離とも思える南稜からドルディ・コーラに落ちる南稜支稜を経て頂上へ向かう計画となった。水平距離にして約8Kmのこの尾根は、起伏の激しい岩稜・岩壁・ナイフリッジで形成されており、持参したロープ6000mは、不足する結果となった。我々の想像をはるかに越えた厳しいルートで登山日数ギリギリまで粘ったものの頂上まで約300mを残し、7600mにて断念した。

ヒマルチュリ南稜上7200mから上部は、700mにも及ぶ大岩壁帯で形成されており、頂上へ続くルートは各国数隊が試みたが、いずれの隊も成功には至らなかった。

私達は1981年の登山の中から、さまざまなことを学び、再び訪れるに足る価値と魅力を、そして、頂上岩壁に限りない可能性を感じていた。その後、“南稜からヒマルチュリへ”という夢は、私達の間でゆっくりと、しかし確実に息を吹き返し、日大山岳部の中で再び大きな話題となっていった。

集会を重ねるうちに、桜門山岳会の内部では、いろいろな意見が出された。高度経験者が少ないこのチームの構成で7000m以上でのむづかしい岩壁登攀ができるのか、あるいはルートを変えて、確実に登れるルートにしたらどうか。頂上を目的とせず、人的財産をつくる事に重点をおいた登山隊にすべきだ、などという意見も出た。

高峰登山の基本は、体力増強であり、たとえヒマラヤ登山の経験が少なくとも、高所順化がスムーズにでき、高所への適応が充分に達成できれば現段階での私達の力でも登頂の可能性はあると結論を出し、徹底的に走り込むことを重視し、全員がフルマラソンを完走した。

また隊員がベストの状態で山に向えるコンディションを造り上げるのに大切なことは、大学山岳部の組織に身を置く私達にとって、準備の他に、会の運営にも携わっており、繁雑さの中で仕事の効率化を進め、それぞれの異なる社会状況下の整理をうまく終了させることが、精神衛生上、特に必要なことだと考え、必要以上な集会や合宿は極力避けるよう考えた。

我々が特に大切にしなければならなかった事は、おしつけや、レールのひかれた上での山登りではなく、自らが考え、造り出す山登りをヒマルチュリだからこそ強くやらねばならなかった。

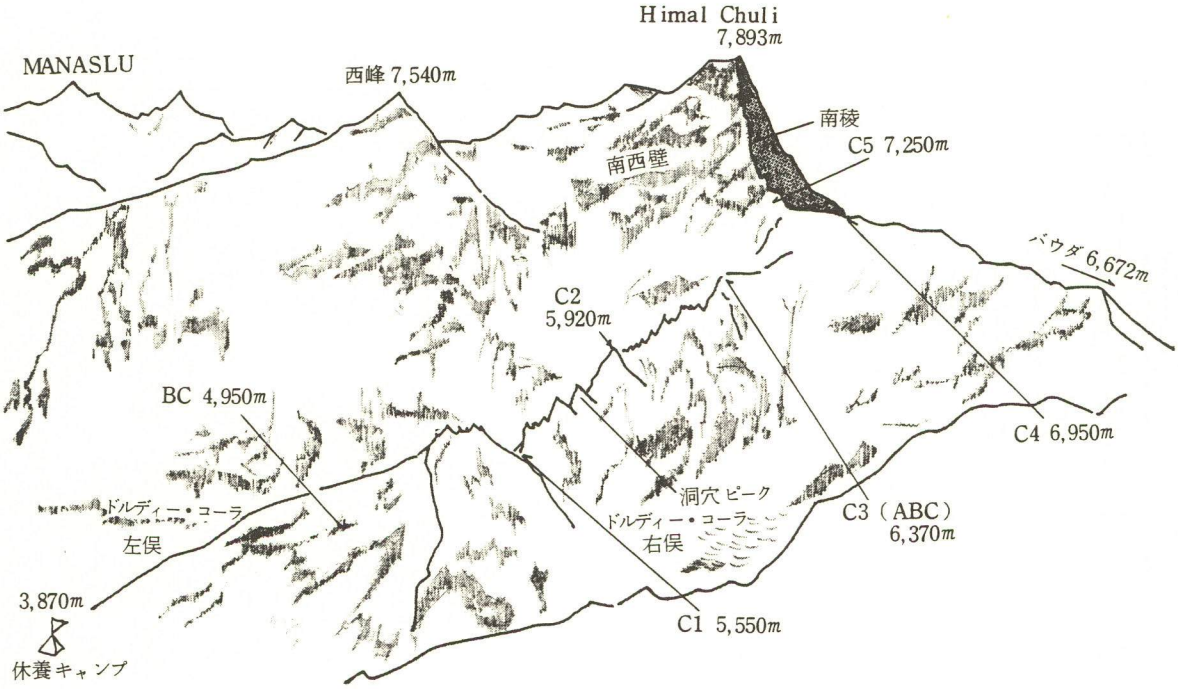
今もなお未踏のルートとして残り、あらゆる変化に富んだおもしろい山登りができるルートから可能性を求めて頂上へ到達しようとする計画に、今回7名の人間が集まった。登れる人間が集まったのではなく、本当にヒマルチュリに登りたい人間が集まったのだ。1981年の経験を受け継ぐ計画として、再びヒマルチュリに向けて活動が開始されていった。

出発の2ヶ月前になると心配していた資金面でも、日本大学、桜門山岳会より多大な御援助をあおぐ事もでき、忙しくも充実した日々の中で、準備作業も先発隊出発の2週間前には完了した。

今回の登山はこうした中で多くの人々の暖かい支援により実現に至り、60日間に渡り粘り強くルートを伸ばした結果、10月26日、中村日出・古野淳・井本重喜の3名とシェルパのニマ・ドルジェが頂上に到達し、南稜からの初登攀、及び1958年以来の我が部の宿願であったヒマルチュリの登頂を果たすことができたが、中村日出君の遭難という余りに大きな代償を払う結果となってしまった。

我々は十分な反省と検討をくり返し、次なるヒマルチュリに向け前進していかなければならない。

Himal chuli 登攀ルート全体図



≪隊　の　構　成≫

隊　長	岡田　貞夫	36才	
登攀隊員	中村　日出	31才	会計・庶務
〃	村口　徳行	30才	梱包・渉外
〃	鈴木　弘之	29才	医療・学術
〃	古野　　淳	25才	輸送・渉外
〃	井本　重喜	23才	装備
〃	石川　一郎	24才	食糧

サーダー	ニマ・テンバ	30才
高所シェルパ	ダワ・ギャルツェン	40才
〃	ニマ・ドルジェ	31才
〃	アン・ドルジェ	36才
〃	チンジ・ドルジェ	21才
コック	アン・ノルブ	31才
キッチンボーイ	ビヘンドラ・ラマ	28才
〃	テク・バードル	24才
メイルランナー	ダワ・テンジン	24才
〃	チョンバ	25才
キッチンヘルパー	ドルジェ・タマン	26才
〃	ゴンブ・シェルパ	14才
リエゾン・オフィサー	テージ・ナト・ポーデル	27才

ヒマルチュリ　7,893m　登攀史

年	季節	隊（国）名	隊長名	人数	ルート及び成果
1950		イギリス（偵察）	Harold W. Tilman	6	南西稜末端メメ・ポカリから偵察
1955	春	ケニヤ山岳会	Arthur Firmin	6	南西稜6,100mで断念、隊長負傷後死亡
1958	秋	日本山岳会（偵察）	金坂　一郎	2	東面を偵察、東稜6,400mまで試登
1959	春	日本山岳会	村木潤次郎	8	東稜7,400mで断念
〃	秋	慶応大学（偵察）	加藤喜一郎	4	西面を偵察
1960	春	慶応大学	山田　二郎	10	西面ムシ・コーラから初登頂に成功、4名が頂上に立つ
1974	春	イタリア	Annibalo Bonicelli	−	東稜、1名負傷、7,460mで断念
〃	秋	青山学院大学	栗山　一路	16	東稜7,050mで断念
1975	春	専修大学	小味　秀純	8	南面ドルディ・コーラから南西稜を目指すが7,050mで断念
1977	春	明治大学	菅沢　豊蔵	14	東稜、最後の壁を突破したが7,800mで断念、1名死亡
1978	春	雪と岩の会	尾形　好雄	10	南面ドルディ・コーラから南西稜を経て第2登、3名頂上に立つ。西峰初登
〃	秋	イギリス・ポーランド	John Cleaze	8	東稜6,600mで断念
1979	秋	アメリカ	Skip Horner	7	南面ドルディ・コーラから南稜を目指すが6,100mで断念
1981	春	学習院大学	錦織　英夫	11	東面チューリン氷河から南稜を目指すが6,900mで断念
〃	秋	日本大学	橋本　　健	9	南面ドルディ・コーラから南稜を目指すが7,600mで断念
1983	春	ポーランド	Tadeusz Piotrowski	14	南面ドルディ・コーラから南稜を目指すが7,650mで断念
〃	秋	香川県労山	高林　久蔵	9	南面ドルディ・コーラ6,300mで2名転落死、断念
1984	秋	アメリカ	Michael Yagar	5	南面ドルディ・コーラ雪と岩の会ルートより第3登、3名が頂上に立つ
1985	春	ハンガリー	Pal Orban	12	南西稜より第4登、3名が頂上に立つ
〃	秋	山形クライミング・クラフト	武田　信行	5	南面ドルディ・コーラ雪と岩の会ルートより第5登、3名が頂上に立つ
1986	秋	日本大学	岡田　貞夫	7	南面ドルディ・コーラから南稜を経て4名が頂上に立つ、1名行方不明

先発記録

古野　淳

8月2日、村口・鈴木・古野の3名は、インド航空AI−315便にて午後5時、成田空港を出発した。翌日午後3時50分発のネパール航空は、バンコクを約2時間遅れて飛びたち、カトマンズに着いたのは、夜の8時過ぎであった。空港には、ミセス・アズマの出迎えを受け、カトマンズでの我々の基地となるエクスプレス・ハウスへ向かう。今回の遠征では、ミセス・アズマにシェルパの手配などで大変お世話になった。

4日、ホテル・アンナプルナの喫茶店でサーダーのニマ・テンバとコックのアン・ノルブをミセス・アズマより紹介していただく。この2人は、1984年のJACカンチェンジュンガ隊に参加しており、村口・古野は2度目の対面であった。装備、食糧などの買出しや、今後のスケジュール、これから向かうヒマルチュリのルートなどざっくばらんに話をする。村口は、プロパンボンベの件で、挨拶を兼ね、コスモトレックの大津氏を訪ねる。鈴木・古野は不足装備などの情報を得るため、バザールへ偵察に行く。午後から、エクスプレス・ハウスの倉庫を整理にかかる。今回、群馬県山岳連盟の八木原氏のご好意により、装備の一部をお貸りする許可を得て、幕営・炊事道具などBC用の装備の大部分をまかなうことができて、とてもたすかった。

5日、銀行にて換金する。ハンドリング・エージェントであるトランス・ヒマラヤン・トレッキング（THT）にて今後のミーティングを行なう。午後からシェルパ達と倉庫の整理をする。

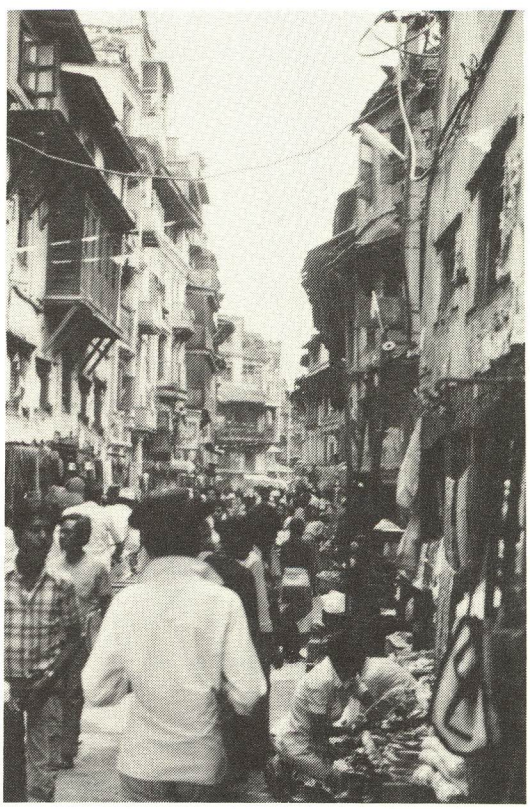
6日、村口は、ニマ・テンバと群馬岳連からお借りしたプロパンボンベ及び、コスモトレックに置かせていただいている日大のボンベをピックアップしてバラジュの工場へ充塡に向かう。鈴木は、アン・ノルブ、ビヘンドラと共に食糧の買い出しに向かい山ほどの買い物をしてくる。古野はTHTにて、トランシーバー申請書類を作ったり、シェルパの保険などについての打合せなどを行なう。

7日、今日も三つに分かれ、梱包や買出しを行なう。パッキングリストの提出など、書類関係の手続きを済ませる。

8日、キャラバン、BCの荷作りは、ほとんどの作業を終え、あとは日本から別送した荷物の一部を再梱包するだけとなった。

10日、本隊の岡田・中村・井本・石川の4名が、元気にカトマンズに到着した。

11日、岡田・中村・古野は、日本大使館・観光省などへ挨拶に行き、その後シェルパと簡単な打



カトマンズ市街

ドッコの買い出し

合せを行なう。本隊が到着するまでに隊荷の通関手続きを行なう予定であったが、隊荷がまだバンコクで止っていてカトマンズに運ばれてこない。東京とバンコクへ電話とテレックスで連絡を入れ、プッシュをかける。

12日、ロンドンから輸入した酸素12本もいまだカトマンズに到着せず、ロンドンへテレックスを入れ状況の確認とプッシュをかける。午後から、登山局と通信局へ行き、隊荷のインポートライセンス取得とトランシーバー使用許可申請をする。隊荷の48カートンは、2つのグループに分かれ、カトマンズ空港に到着することがわかり、インポートライセンスは2回取得することになってしまった。

13日、約半分の隊荷が空港に届くが、全部そろった段階で通関するため、残りの荷物を待つことにする。

15日、カトマンズ在住の宮原氏にネパール航空へ同行していただき、マネージャーからバンコクのネパール航空へテレックスを入れていただく。

17日、ロンドンから酸素12本が到着する。いままでなかなか返事をもらえなかったリエゾン・オフィサーが決定し、隊長と顔合わせをする。

18日、隊荷の全部がいつ揃うかわからないため、キャラバンを二隊に分けることにして、既に届いている荷物を受けとる。ここ数日間暇な日が多かったため、隊員はそれぞれの体調を整えるため、毎日ジョギングをしたり、サイクリングをしたりしてトレーニングを行なう。また郊外の寺院や、バザールをブラブラしたりしてノンビリとすごした。

19、20日はナショナル・ホリデーのため、すべてが休み。キャラバンを二隊にわけるため、食糧、装備などの再梱包をしなおし、打合せを行なう。

21日、岡田・村口・鈴木・石川・井本の5名が、キャラバンスタートする。翌日、残りの荷物すべてを受けとり、23日には、中村・古野の後発キャラバンも無事スタートすることができた。

隊荷の積み込み

ベース・キャンプへ

隊荷の到着が遅れ、予定より1週間遅れてのキャラバンスタート。カトマンズの空港には、発送した荷物が半分しか届いておらず、やむなく隊を二つに分け、8月21日、岡田・村口・鈴木・井本・石川の5名が、約120個の荷物と共に早朝カトマンズを出発した。2日後の8月23日、中村・古野の後発隊は残りの荷物約50個と共にカトマンズを後にした。毎日雨に降られてのぬかるみの行進が続く。8月31日には標高3820mの休養キャンプに全員が集結した。ベース・キャンプ(4950m)に全員が順化して入ったのは9月6日。ポーターによる荷上げも完了し隊荷の全てがBCに集結した。

＊

本　隊（第1キャラバン隊）――――――――――――――――（鈴　木）

8月21日　晴　カトマンズ→デュムレ　457m

トラックへの積み込みを終え、7時15分、トランス・ヒマラヤンのバスでいよいよカトマンズを出発する。1時過ぎにデュムレに到着。亜熱帯の暑さである。ポーターが40人しか集まらず、河畔にキャンプする。菩提樹が茂り、気持ちの良い所だが、ひどく暑い。夜になるとたくさんの蛍が舞った。

8月22日　晴　CS→トゥリトレ　526m

5時30分起床、起きてすぐミルクティー、1時間後に朝食である。猛烈な暑さの中を歩く。車の通ることのない道は東海道五十三次の雰囲気がある。草屋根の家、牛やヤギ、鶏などの動物達がいる。マルシャンディコーラにかかる吊橋を渡って今日の天幕地へ着く。飛行場ということだが、牧場として使われていた。無数のトンボが陽の光を浴びて飛んでいる。

8月23日　雨　CS→ボテオラ　747m

雨の中をただひたすら歩きつづけた。道の両側には水田が延々と続いている。4時30分ようやくボテオラの学校に着いた。腹は減るし体も疲れた。

8月24日　雨　CS→プトリケット　1010m

学校は10時からなので、登校中の生徒を見ながら歩くことになる。私服だし、カバンはビニール袋だったりするので自由を感じる。足だってサンダルもいるし、バラバラである。マルシャンディ街道を離れ、ドルディコーラに入る。道の様相は一変し、畔道が多く、泥の中を歩いているようである。橋を2本渡り、少し登ったところから眺める水田風景が美しい。日本よりずっと美しいように感じる。この水田の中をカートンを背負ったポーターが行く風景は圧巻である。安藤広重の世界を連想してしまう。わらぶき屋根のバッティに寄り、土間に座ってロキシーを飲む。刻々と風景が変わっていくキャラバンは楽しい。

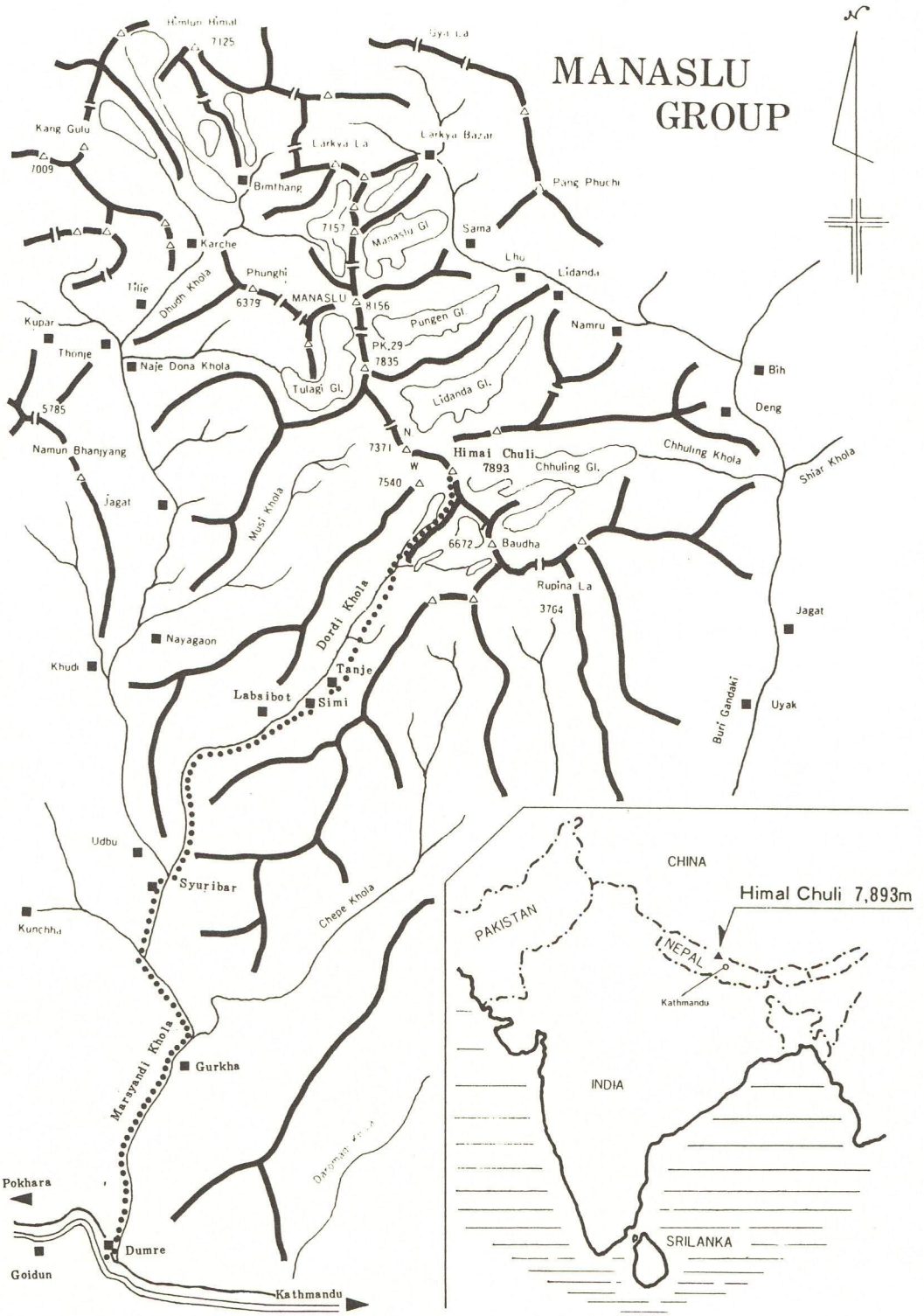
8月25日　晴　CS→キルティプル　1270m

泥の道が多く、ズガの散発的な攻撃にあう。あんなものに血を吸われるのはごめんだ。2ピッチ程まじめに歩いたところに気持ちの良い河原があり、水浴びと洗濯をする。本流と違って支流は、水がきれいである。今日は実質3時間の歩行で天幕地に着いてしまった。水田の中の一軒屋でせまいところだ。はるか上の方に村がある。

8月26日　晴～雨　CS→タジェ　1870m

水田の中を進むとやがて急な登りになる。このあたりからマカイ(トウモロコシ)の畑が多くなる。急登が終るとトラバースだ。山の斜面のずっと上までよく畑を作ってあるものだ。やがてシミの村、わらや板葺きの家が並んでいて、自然の中によく溶け込んでいる。マカイの畑の中を歩き、

キャラバンルート図


MANASLU GROUP
Himlung Himal
7125
Kang Gulu
7009
Larkya La
Larkya Bazar
Bimthang
Pang Phuchi
7157
Manaslu Gl
Sama
Karche
Lho
Lidanda
Milie
Dhudh Khola
Phunghi
6379
MANASLU
8156
Pungen Gl
Namru
Kupar
Thonje
PK.29
7835
Naje Dona Khola
Tulagi Gl.
Lidanda Gl.
Bih
Deng
5785
N
7371
W
7540
Himai Chuli
7893
Chhuling Gl.
Chhuling Khola
Shiar Khola
Namun Bhanjyang
Jagat
Musi Khola
6672
Baudha
Rupina La
3764
Jagat
Nayagaon
Dordi Khola
Khudi
Tanje
Labsibot
Simi
Buri Gandaki
Uyak
Udbu
Syuribar
Chepe Khola
Kunchha
Marsyandi Khola
Gurkha
Darondi Khola
Pokhara
Dumre
Goidun
Kathmandu
CHINA
Himal Chuli 7,893m
PAKISTAN
NEPAL
Kathmandu
INDIA
SRILANKA

一度ガクッと下ってからタジェまで登っていく。激しい雨が降りだした。雨が降り出すとズガが一斉に活動を始める。岡田さんと私は大騒ぎでかけ登って行ったが後で靴をぬいでみると10匹程入っていた。やがてチョルテンが現われタジェの小学校に着いた。12時25分、授業を中止し、我々が泊まれるように教室を開けてくれた。学校の先生に感謝の気持ちをもったが、こんなにあっさりやめてしまっていいのかと思った。鉛筆とボールペンを学校に寄付するがノートがほとんどないので無駄になるかもしれない。教材らしいものはなく、日本のネパール教育協力会から送られた絵本が光っていた。

8月27日　曇〜雨　タジェ停滞

ポーター集めのため停滞である。早朝はじめてヒマルチュリを見ることができた。朝日に輝く白く美しい山である。村の人々がやって来て我々の一挙手一投足をじっと見つめるのには閉口した。動物園のパンダだ。教室の中で一日過す。学校といっても机や椅子は不十分だし，窓もないので穴蔵の中にいるようなひどいものである。もちろん電気・ガス・水道、そういったものは一切ない。よくこんなところで勉強ができるものだ。

8月28日　晴〜雨　CS→ジョルダカルカ　3050m

板葺屋根のタジェの村を抜けるとしばらくマカイの畑がつづく。やがて樹林の中に入り、1200mもの登り道となる。緑の濃い森林は奥秩父の雰囲気である。10時の交信で後発パーティーがタジェに着いたことを知る。重い荷物をかついでゆくポーター達はなんと力強いことだろう。実に強く、たくましい。

8月29日　晴〜曇　CS→キューダカルカ　3550m

昨晩は冷え込んだ。3000m以上となるとシュラフカバーだけではきつい。ゆるい登りがつづく。二ヶ所放牧地があり、ヒマルチュリがよく見えた。美しい山だとつくづく思う。我々のルートが圧倒的な迫力でせまってくる。峠を越え樹林帯を20分も下るとキューダカルカだ。

デュムレにて――キャラバン、スタート

8月30日　晴　CS→ウクンダカルカ　3550m

斜面をトラバース気味に登り2ピッチで3850mの峠を越える。ドルディコーラ二俣まで一気に下る。やがてウクンダカルカという放牧地に着いた。枯木、樹林、牛、放牧小屋、ちょっとした湿原、小川、かわいい花…天国みたいなところだ。ここから眺めるヒマルチュリは天を突くような高さだ。

8月31日　曇　CS→休養キャンプ　3820m

村口とアン・ドルジェはBCへのルート工作のため先行した。1時間程で5年前のBCに着く。さらに上に行こうとすると、ポーター達の反対の声が強く、けっこうな騒ぎになる。どうなるかと見守っていると、一人二人と登り始めて、結局みんな動いてくれた。休養キャンプはモレーンの中で草花が咲き乱れいいところだ。まもなく後発のパーティーが合流し、全員が揃う。みんな元気だ。

＊

後発隊（第2キャラバン隊）――――――――――――――――（古　野）

8月23日　雨　カトマンズ→デュムレ

インド人のトラックを2000ルピーでチャーター。隊荷30カートン及び食糧等を積んで出発する。ターバンを巻き、髭面の風貌はシーク族らしい。小雨の降る道を約6時間程でデュムレに着く。ボテオラまでトラックで行けるよう交渉する。雨が降っていなければ行くとのことだが3000ルピーと聞いて腹が立つ。

8月24日　雨　CS→トゥリトレ

朝から雨模様のため、トラックはあきらめ、ポーターと共に出発する。いきなり渡渉である。バッティで雨やどりしながらトゥリトレのロッジに泊まる。

8月25日　雨　CS→ボテオラ

雨が降ったりやんだりだが、雲の切れ間に出る陽射しはたいへん強い。ポーター達は30分おきぐ

キャラバンするポーター　ヒマルチュリも間近

60kgの荷を背負うポーター

らいに巨大なピーパル（菩提樹）の木陰で休憩する。ボテオラまでのバッティにはジュースやビール、ビスケットなどがある。マルシャンディに沿ってさらに溯れば、トロンパスを経てムクチナート、デュムソンへとつづく道である。中村さんは子供を見つけるたびに何か話をしてとても楽しそうに遊んでいる。

ボテオラの小学校でキャンプ。先生に本隊の情報や学校の勉強の事などを聞く。校庭の芝生の上で中村さんとレスリングの実演をひろうする。5分ともたずフォール負け。「僕の腹の上に誰か乗ってくれないか」といってさかんにブリッジをしている。ポーターの管理はギャルツェンに一任である。我々は、緑のジュータンの中をまだ見ぬヒマルチュリに胸をときめかせ、楽しいキャラバンを続ける。

8月26日　晴　CS→プトリケット

早朝一瞬ヒマルチュリをはじめとするマナスル連山を見るが、すぐに厚い雲に覆われてしまった。マルシャンディの吊橋を渡り、ドルディコーラに沿って歩く。登校中の子供達や先生がしきりに話かけてくる。この道はトレッキングでは歩けない道で，外国人はたいへん珍しいのである。

8月27日　曇　CS→シミ

この辺から村人の顔がチベット系の顔になってきた。彫りの深いネワール系とチベット系が半々といったところだ。シェルパに聞いたところ、タマン族が多いとのことだ。シミの小学校でテントを張っていると夜、村人達が集まってくる。ロキシーを飲んでみんなで歌ったり踊ったりした。

8月28日　晴　シミ→タジェ

シミからタジェへはとても近い。山腹のトラバース道を歩いて半日とかからない。本隊はタジェで二泊しているとトランシーバー交信で知る。タジェに着くと教師がいろいろと話かけてくる。日本隊からもらった絵本や日記帳を見せてくれたが薬をくれと何度も言ってくる。歯痛の村人がたくさんいるようで鎮痛剤を数袋あげたが、きりがないので断った。また先生の話によると、村人のほとんどが腹に虫がいるそうで、虫下しの薬を欲しがったが、そんなもの持っているはずがない。この辺の子供は発育が遅いらしい。年齢を聞くと驚いてしまう。小さな子供は腹がプクンと膨れていて栄養失調の子が多い。この村は最奥の村だけあってネワール系の顔つきのものはいない。人柄はいたって素朴で人懐っこい。校庭で遊んでいる子供達を見ると、その遊びの種類は私が子供の頃遊んだ遊びとさして変わりはない。

8月29日　晴　CS→ジョルダカルカ

もう人家はない。タジェを過ぎてしばらく行くと、トウモロコシも粟畑もなくなり、放牧地となる。突然、お花畑があらわれたり、牛やヤギがあらわれたりとても楽しいキャラバンだ。しかし、ズガだけは悩みのたねだ。

8月30日　晴　CS→キューダカルカ

8月31日　曇　CS→休養キャンプ

峠を越え、ドルディコーラを渡り、ウクンダカルカへ。トランシーバーで今日、本隊に追いつき休養キャンプへ入れる事を知り、とてもうれしい。ウクンダカルカは最奥の放牧地で、主人はライフルを持っていた。放牧の牛やヤギ、それにマウンテンシープが対岸の山腹にたくさんいるのだそうだ。休養キャンプで本隊と合流、とてもにぎやかになった。

＊

ベース・キャンプへ ――――――――――――――――――――――――（村　口）

8月31日　曇

村口、アン・ドルジェはBCまでのルート工作のため、早朝ウクンダカルカを出発する。81年のBCを通り、第1モレーン帯の草付きを登る。小さな岩場がでてくる4500m付近で1ヶ所10m程のフィックスを残し、上部へ向う。赤旗や、黄色のポリヒモ、ケルンなどをルートの目印として残してゆく。視界の無いモレーンの中を行くうちに、やがて、記憶に残るBC予定地に到達する。

9月1日　晴～曇

鈴木・古野はBCへの順化トレーニング。村口、石川は4500m付近まで往復。他のメンバーは休養。BCまでの荷上げのため、ポーターを30人ほど残し、シェルパ・キッチンスタッフと共に荷上げ。

9月2日　晴～雨

全員で4950mのBCまで順化トレーニング。それぞれが荷上げをしたり、早く登ったりして負荷を加えながら積極的なトレーニングをする。目印の赤旗やポリヒモは、ことごとくポーターにより回収されてしまった。複雑な気持ちである。

9月3日　晴～雨

今日も全員でBCへの順化。午前中は、抜けるような青空が広がり、草原には花が咲き乱れ、最高に楽しいのだが、帰りは必ず雨に降られるパターンがつづく。シェルパ・ポーター達による荷上げで、ほとんどの荷物がBCにあがった。

9月4日　曇〜雨

岡田・中村・井本・石川はBCへの順化、あとのメンバーは休養。今日は朝から雨の降りそうな天気で、一日中降ったり止んだりの寒い一日だ。シェルパ4名とキッチン1名がBC入りする。

9月5日　雨

村口・鈴木・古野は雨の中BC入りをする。他のメンバーは休養。昨日BC入りしたシェルパは平らな石を幾重にも積んでキッチン作りに精を出している。我々も整地をして天幕を張ったり、キッチン作りを手伝ったりしてBC建設に備える。

9月6日　雨

今日も雨降り。全員がBC入り、そしてすべての物資がBCに集結した。初期の順化としては、みんなうまくいったようだ。誰一人として不調を訴える者はいない。素晴らしいキッチンが完成し、テントの数もふえて、我々の待望のBCが完成した。

＊

キャラバン総括 ――――――――――――――――――――――――――――（岡　田）

隊荷の到着が遅れたため、カトマンズでは、時間的な余裕もできて皆のんびりした。そのために東京での準備作業の疲れも無くなり、現地の空気にも慣れたためにかえってプラスの面が多かったようだ。

本隊8月21日、後発隊23日にカトマンズをスタートする。デュムレでは、韓国隊と一緒になり、120名雇用予定のポーター数の固定ができず、毎朝、人数不足による出発の遅れや、それにともなう入れ変えで、賃金の支払いなどけっこう忙がしい毎日だった。しかし5年ぶりの道はなつかしく、まただいぶ奥のバッティーでもコーラが飲めるようになったのには時の流れを感じた。

朝からドシャ降りの日が多かったが、健康を害する者もなく順調にBCに入った。後発隊の、中村・古野はキャラバンが始めての経験にもかかわらずよく頑張り、トラブルも無く8月31日、本隊と同じ日にレストキャンプに到着した。どの顔も希望に満ちあふれており、1週間の遅れなど気にしておらず、BCへの順化トレーニングは、好調な内に第一歩を踏み出した。荷物も予想外に早くBCに上がり、隊員の順化もまずまずといったところで、順調なBC入りであった。

マルシャンディー街道で出会った子供たち

休養キャンプ（3,870m）は1981年のＢＣ付近に建設された

山のポーターたち　カメラを向けたとたんナイケの顔が強張った

ヒマルチュリへ……頂きへ

村口徳行

―――≪ＡＢＣ建設まで≫―――

9月7日 ●

朝からみぞれ混じりの雨模様である。これからの登山の安全と成功を祈り、ＢＣ開きを行う。チョルテンを囲み、ダワ・ギャルツェンの読経が始まると、それまで雲に覆われていたヒマルチュリがいきなり我々の頭上に高く聳え、眩しく輝いた。感動的な一瞬だ。装備・食糧などの整理にあたる。ロープだけでも6,500 m 以上あり、あらためて登攀のスケールが大きいことを感じる。

9月8日 ①～●

早朝、村口・古野はルート短縮を求めてスーパークーロワールへ直接登るルートの偵察に向かう。写真で見る限りでは可能性のあるルートだが、実際には落石と雪崩の危険性が高く、ルンゼと平行してせり上がる急峻な岩壁混じりの雪稜を登り、『トリプル』と『洞穴のコル』へ突き上げた。

みぞれ混じりの雪が降って寒いので、早々に10数ピッチの懸垂下降を交えてＢＣに戻る。岡田・中村・鈴木・石川は偵察と順化を兼ねて1981年のオリジナルルートを登り、話し合いの結果、つまらない近道をしないでオリジナルルートを採ることに決定した。

9月9日 ●

村口・古野とシェルパ２名は工作、他のメンバーは順化と荷上げ及びＢＣ～Ｃ１間の部分的なフィックス工作。

Ｃ１から先のルートは当然ドルディー左俣側を行くつもりでいたが、「右俣側に良いルートがある」とシェルパが言う。「本当だろうか？」と疑いながらも、甘い言葉に騙されてルートを採ると、案の定行き詰まった。強い意志を持たないとルートは伸ばせない。

ルートはよく知っているので、目をつぶっても行けると思っていたが、ガスに包まれて視界を失

ベースキャンプ

ＢＣよりルートを臨む

うと、自分が何処にいるのかさっぱり判らない。1981年のロープやピトンの類は何一つ残っておらず、工作には結構気を使う。

稜線は鋸刃のピークが連なり、雪は殆ど付いていない。どうやら、雪が少ないようだ。風化した壁を左上気味に複雑なトラバースを続け、崩れそうな岩は蹴落として整備しながらロープを張る。3本目のルンゼ迄行くと、視界を完全に失い、みぞれが冷たいので帰る。

9月10日　●

昨日に引き続き、村口は、ニマ・テンバ、ニマ・ドルジェと工作に向かう。トリプルピークを左から巻き、一昨日偵察で登ったコルに到達する。みぞれ混じりの雨が降り、視界が利かない。洞穴ピークのドルディー左俣側をトラバースし、ルンゼを直登するが、シェルパがさっきから「もう、遅いから帰ろう」とうるさいので、ピークまで1ピッチを残して下降する。

井本はC1まで順化、他のメンバーは休養する。

9月11日　①～●

岡田・鈴木は洞穴ピーク迄ルートを伸ばす。今回の計画では、C1を洞穴ピーク周辺に予定したが、スペースに問題がある為、少し近いがC1を81年のC2跡に作り、トリプルとのコルにデポジットスペースを作ることにする。

中村・井本・石川は順化を兼ねて荷上げ。

9月12日
9月13日　雪のため、停滞
9月14日

9月15日　①

三日間降り続いた雪は予想外に深く積もり、先行した岡田・中村・井本・石川はラッセルに苦しめられ、氷河の対岸まで行って引き返す。村口・鈴木・古野は予定していたC1入りを中止する。

9月16日　①～⊗

1981年のC2跡に、今回のC1を建設する。村口隊がC1入りし、岡田隊及びシェルパは天幕を建設後ＢＣへ戻る。

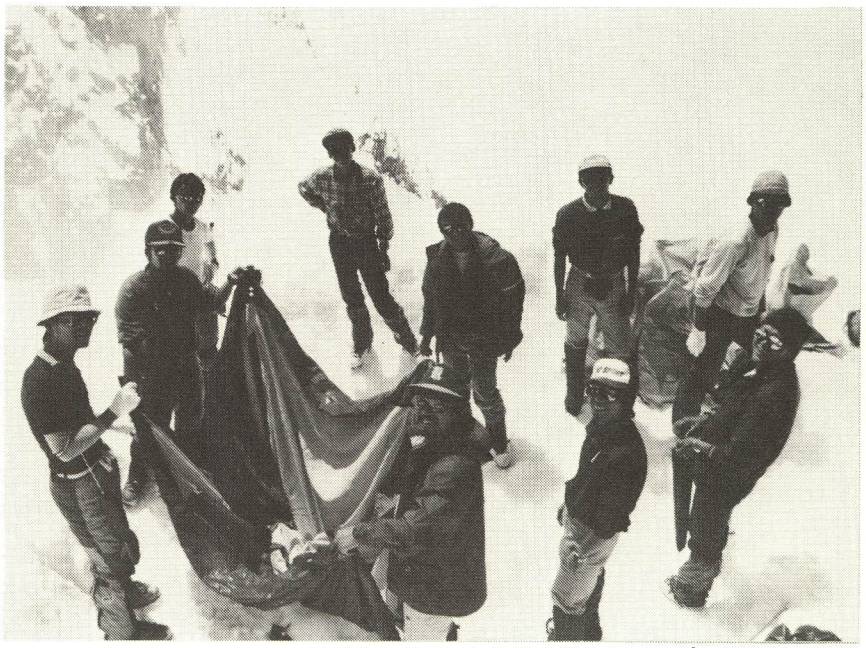
村口・古野は3時半頃よりルート整備に向かう。雪が深く、2本目のルンゼでは落石の為にロープが寸断されて、繋ぐのに手間がかかった。小雪が舞って寒いので引き返す。6時近くに帰幕するとひとりさびしく鈴木がメシを炊いて待っていた。

9月17日　①

C1の3名は工作に向かうが、雪に埋まったロープ掘りに終始する。洞穴ピークに着いた時には、既に夕方の雲が湧き上がり、ヤル気を無くしてC1へ戻る。

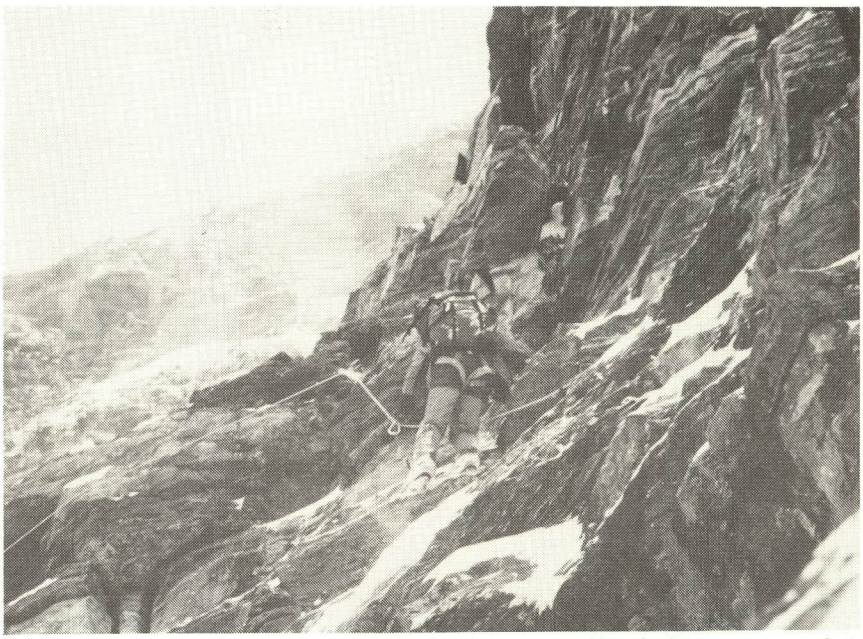
9月18日　①

岡田隊はC1入り、村口隊は引き続き工作。



人数がこれだけいると瞬く間にキャンプの建設が可能だ

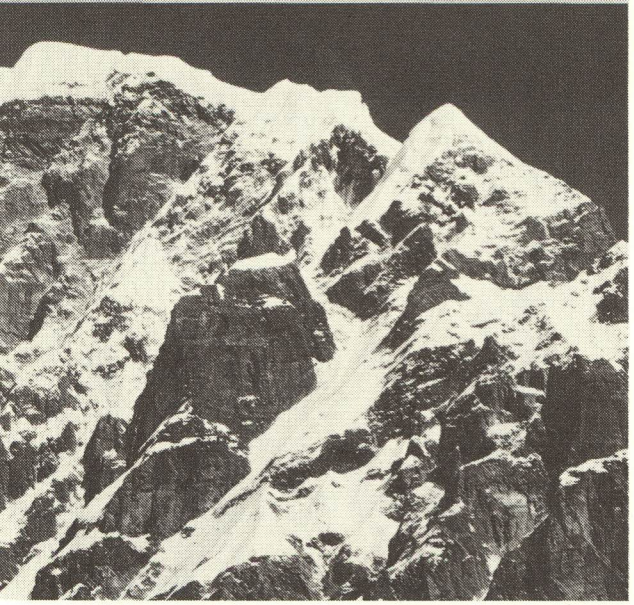
C2迄工作しようと、張り切って朝6時にC1を出発。洞穴ピークから雪稜を2ピッチ半下降しコルに着く。これから向かう岩壁部はリッジを越えて再び下降しなければならない。見た限りではこのコルからトラバースすると、うまい具合に直接岩壁部へ達せそうだ。雪を伝って左へ左へと回り込んで行くと、風化した大ハングが張り出しルートは悪くなる。上を見上げると、目的の岩壁部がすぐそこに見える。しかし、残念だが、ここで工作に時間をかけ、悪いルートを行くよりも多少の遠まわりでも安全で確実な1981年のルートを行くことにする。右俣側を2ピッチ半登ると『モロゾフ』の垂直の岩壁にぶつかり、ドルディー側へ再び1ピッチ下降する。井戸の底のような所から垂直のフェースに取り付き、4級の岩壁を1ピッチ半でスーパークーロワールの入口に到達した。1981年の工作が如何に理想的なルートを選択しているか改めて感心する。クーロワールを2ピッチ程登り、3時半に引き返す。C1を通過し、7時頃BCに帰り着く。



スーパークーロワール手前の岩壁をトラバースする

9月19日　① ～ ◉

昨日C1入りした岡田隊の4名は更にルートを



右のピーク（別名モロゾフピーク）にＣ２が建設された。その下がスーパークーロワール

伸ばし、モロゾフピークＣ２予定地へ到達する。

硬い氷混じりの急傾斜で構成された『スーパークーロワール』を約200 m登ると、1981年のフィックスロープが垂直の岩壁に残され、雪の少なさを顕していた。壁の基部をトラバースし、リッジに回り込んで急な雪壁を３ピッチ程でモロゾフのピークに出る。

9月20日　①

岡田隊はＣ２建設の為、天幕・食糧・ロープなどを大量に荷上げしＢＣに下降する。

村口隊はＣ１をとばして、星明かりの中、Ｃ２に入る。

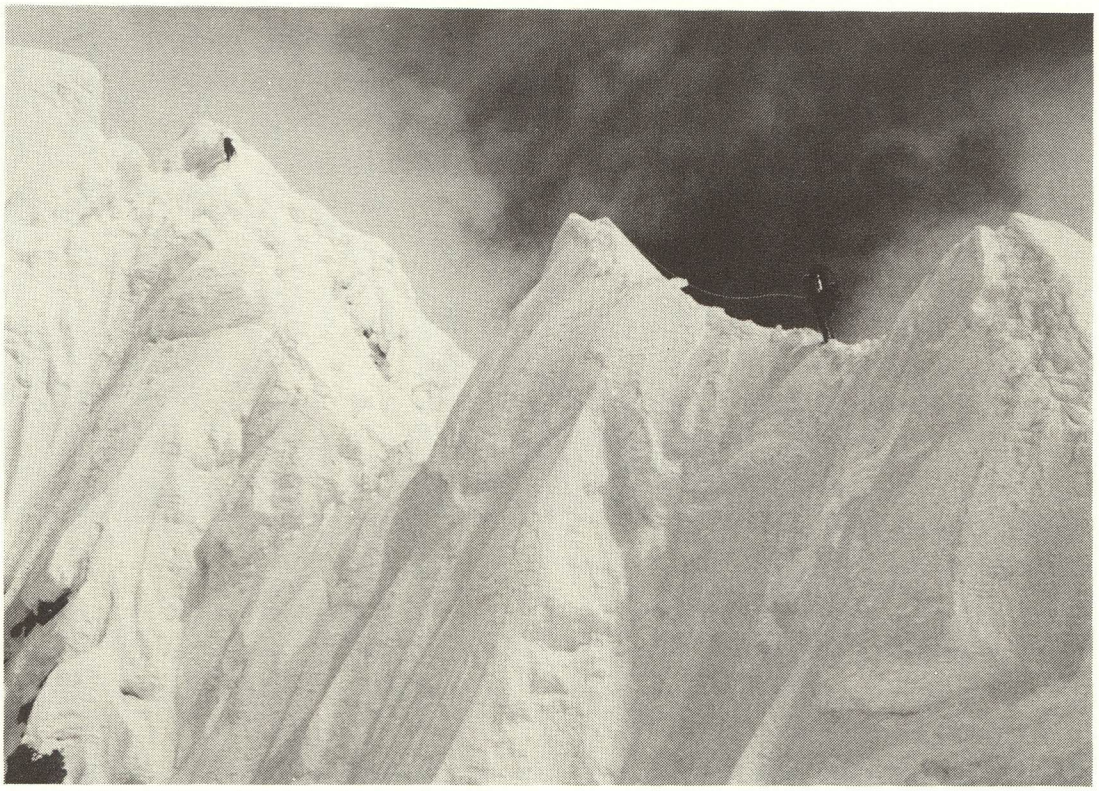
9月21日　① ～ ⊛

村口隊３名はルート工作。昨日Ｃ２入りしたニマ・テンバ、ニマ・ドルジェ２名は、逆ボッカに出発する。

今までのルートとはうって変わって、鋭い稜線の工作だ。アイスバーをしっかり埋め込みながら一本一本慎重にロープを伸ばして行く。雪質が非常に悪く、細い稜線に緊張させられる。稜線が角度を持ってくると雪が深く、体力ばかりが消耗する。みぞれ雪が降り出し、全員ビショ濡れの面白くないルート工作だ。６ピッチ工作して早々に引き上げる。こんな天気の日は、天幕でおとなしく過ごすのが正しい考え方だ。

9月22日　⊛

村口隊は工作へ。午前中１時間ぐらいの晴れ間



ルートは細い稜線につけられた（Ｃ２～Ｃ３間）

以外は雪が降り続け、今日も全員ビショ濡れの工作だ。雪質はまったく悪く、工作というよりラッセルに労力を使う。崩れる足場を固めながらルートを進め、小さなコブを一つ一つ越えて行く。50m伸ばすのに非常に時間がかかる。

急なナイフリッジを登りつめ、20m程岩壁を右俣側から登ると1981年に『羅生門』と名付けたキレットの頭に出た。ラッセルに手こずり、時間がかかったため下降する。C2の5ピッチ位手前から夜が訪れ、ヘロヘロになって帰幕した。

9月23日　㊍～①

岡田隊はC1入り、村口隊は引き続きルート工作。朝、降雪のため停滞と思いきや7時頃になって晴れ渡り、気分の乗らないスタートとなった。C2にいたシェルパ2名が先行し、我々はノロノロと彼らの後を追い続ける。『羅生門』からハング気味の壁を10m程懸垂下降すると、不安定なコルに降り立つ。平均台を渡るようにナイフリッジを渡り、『羅生門』と同じ高さ位のところを右俣側にルートを求めトラバースを開始する。雪が不安定で、岩が非常に脆いいやな場所だ。約1ピッチ半で100mの雪壁の基部に到達する。この辺でトップがヘマをするととても厄介なことになる場所だ。濃いガスが突然視界をさえぎり、下から吹き上げる風が体温を奪う。雪崩が心配だったが、問題なく越えC3予定地を目指す。雪壁の上は、膝ぐらいのラッセルが続く広い尾根となる、6,000m付近の斜面に荷をデポして下降する。夕闇に包まれる頃、ヨレヨレになってC2に帰幕する。

9月24日　①～㊍

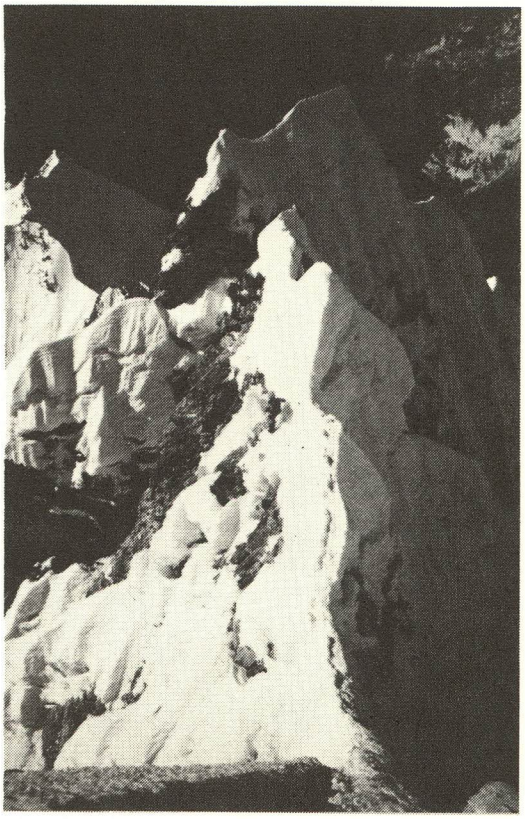
岡田隊はC2への荷上げ、村口隊はC2で休養。

9月25日　①～㊍

岡田隊はC2への荷上げ、シェルパも確実に荷上げを行い、物資はC2に集積されていった。村口隊は、ニマ・テンバ、ニマ・ドルジェと共にC3（ABC）を6,300m付近の斜面に建設する。苦労してかつぎ上げたハシゴが『羅生門』ハング下にかけられた。

C1からC3間には約50ピッチのフィックスロープが切れ目なく張られ、困難な岩壁部には10㎜ロープをダブルで垂らし、二ケ所にハシゴがかけられた。ルートはほぼ1981年に開拓したルートを忠実にたどり、悪天にもかかわらず、岡田・村口の指揮により工作が続けられた。容易に高度をかせげない複雑な岩壁部と鋭いナイフリッジで構成され、登攀技術・体力と共に、天候の悪さからルートファインディングが要求されてくる。

100m雪壁から羅生門を振り返る



しかし、前回の経験の強味で、ルートは完璧に工作されていった。1981年に終始トップをきって登った松野の登攀記は、工作隊にとって大いに利用され、またタクティクスの上でも非常に参考になるものだった。シェルパの荷上げ能力も強く、ルートの悪さから危険手当を要求してきたが、ボーナスを出すことによって登攀計画が思った以上にスムーズに進んだ。

安全の確保とシェルパが安心して荷上げできるように隊員は、荷上げの時には、常にハーケンの確認やロープの整備を行なった。

岩壁部C2～C3間

≪C3～C5建設まで≫

9月26日　①～⊛

村口隊はC3入り、岡田隊C2入り。

9月27日　①～⊛

村口隊はC4へ工作に向かう。岡田隊はC2で休養、今までの緊張する細いナイフリッジの稜線とは打って変わり、だだっ広い雪の斜面が南稜上まで大きく広がっている。C3から50mも登ると、ヒマルチュリの岩壁が迫力ある姿を見せる。大クレバスに沿ってプラトーを横切り、広い斜面に赤旗でマーキングしながらラッセルを繰り返す。ヒドンクレバス地帯や、氷壁にはロープを残し、あと少しで南稜上に出られると思ったが、雪が舞って何も見えなくなったため、ロープを整備しながら早々帰幕する。

9月28日　⊛

大雪のため、全キャンプ動けず停滞となる。

9月29日　①～⊛

今日はC4まで行く予定だったが、昨日の大雪のためラッセルがきつく、先日ロープを伸ばした所までも行けない。寒波のために雪が不安定で小雪崩が頻発し、登る気もしない。風雪が強くなり、フィックスロープに物資を固定して下降する。岡田隊は、順化のため『羅生門』まで往復する。

9月30日　①～⊛

C3の村口隊は休養のためにBCに下降する。

岡田を除く3名はC3へ順化を兼ねて荷上げする。今日も朝だけ晴れて、すぐに雪が降り出した。

10月1日　⊛

岡田隊は雪の降りしきる中をついてC3入り。村口隊はBCで休養。

10月2日　①～⊛

岡田隊はC4へ向けて工作に向かうが、深い雪に悩まされ、健闘も虚しく途中の氷壁付近で引き返す。村口隊は、デポジットまでの荷上げを行う。

10月3日　①～⊛

村口隊はデポジットまでの荷上げ、岡田隊休養。

10月4日　①～◉

岡田隊は今日こそC4をと張り切ってスタートするが、ラッセルに苦しめられ南稜主稜線直下で引き返す。石川は調子を崩しBCに下降する。村口隊はC1入り。

10月5日　①◉

昨日のトレースはすべて消え、再び最初からラッセルしなければならない。岡田隊はついに無限のラッセル地獄を克服し、南稜上のC4キャンプ予定地に到達した。1981年には、このようなラッ

セルがなかったため、C3～C4間は気楽に考えていたが、工作を始めてリーチするまでに9日もかかってしまった。村口隊はC2へ荷上げ。

10月6日　◉ ～ ⊛

C3の岡田隊はC4建設に向かうためスタートしたが直後小雪崩で天幕が埋まり、C3の再建設を行うはめになった。村口隊は地吹雪の中C2入りする。

10月7日　⦶ ～ ◉

岡田隊はC4建設と同時にC4入りをする。村口隊はC3入り。

10月8日　⦶ ～ ◉

岡田隊はドルディー側からの冷たい風を受けながらヒマルチュリのピラミダルな大岩壁を目指して10ピッチ工作をする。午後からガスが湧き、視界がまったく効かない。村口隊の3名はC4へ荷上げを行い、岡田隊の3名もホワイトアウトのためにC4に戻った。頂上岩壁のルートについて、南稜をダイレクトに1981年のルートを行くか、ルートの変更をして南西壁側にまわり込むかしばらく話をする。

10月9日　⦶ ～ ⊛

今日も昼からガスが湧き、視界が効かない。岡田隊はさらにルートを伸ばし、南稜岩壁基部のC5予定地付近まで12ピッチ工作する。BCあたりから見る南稜のC4～C5間は平らな稜線に見えるが、所々急傾斜があり風が強いため消耗させられる。チューリン側は巨大な雪庇が張り、うかつに近寄ることができず、ドルディー側をトラバースするようなルートとなる。ロープはドルディー側から吹き上げる風で、宙を舞う。村口隊はC4への荷上げ。C3に帰る途中、濃いガスの中から、いきなり人間が現れ、驚いてよく見ると、シェルパのニマ・テンバとニマ・ドルジェだった。彼らはC2からC3を通り越して、C4まで荷上げに来た。驚異的な強さだ。石川はC2入りをする。

10月10日　⦶

C4にいる岡田・中村・井本は休養のためC3に下降する。村口隊も今日は休養。石川もC2からC3入りをし、久し振りに全員が集結した。

10月11日　⦶ ～ ⊛

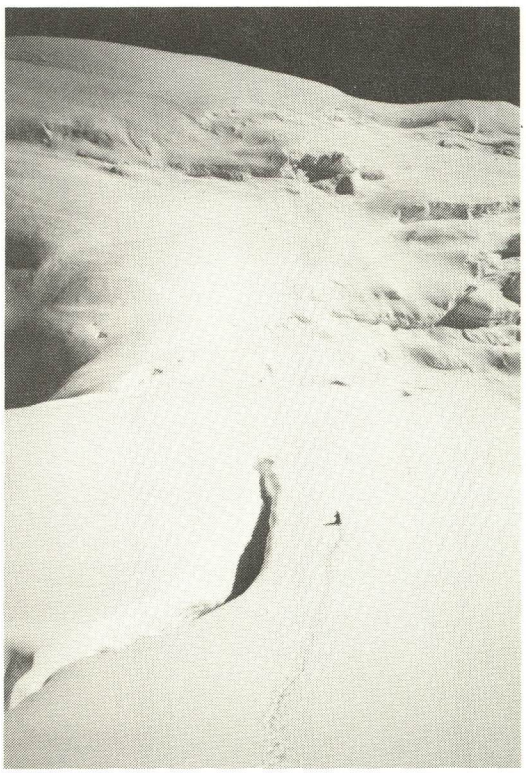
村口隊はC4入り、石川はC4順化のため往復。風が吹いて寒い1日だ。岡田隊はC3で休養。

10月12日　⦶

村口隊はC5の荷上げと、南稜岩壁の基部まで2ピッチロープを伸ばす。風が強くロープが宙に舞い、風が体を通す。岡田隊はC3で休養。

10月13日　⦶

村口隊はC5建設と同時にC5入り。岩壁基部の急傾斜を削って天幕を建てる。3人で交替しながらスコップをふるい2時間以上の格闘の末やっとC5が完成した。岡田隊はC4入りをし、夕方の交信でルートについての話をする。1981年の南稜ダイレクトは岩壁基部から見上げると巨大な岩壁がハングして圧倒的に迫り、我々の登高を拒むかのように天空を突いている。1981年に 7,600m まで伸ばしたルートを私達の登攀力をもって辿ることは可能であろうか。もし仮にそこまで行けたとしてもその先の大きく張り出した雪庇を乗り越



C3からC4への大雪原を行く

すことができるであろうか。南稜ダイレクトを行ってみて不可能ならば南西壁へまわり込もうという時間の余裕はない。岡田・中村・村口の話合いから、直感的というか気分的なもので、南西壁を突破しようという結論に達した。それは、理論的な裏付けも何もなく行ってみなければわからないが、南西壁のスケールならば行きづまったとしても、何処かにルートを見出せるのではないかという希望的観測があったからである。C4建設に予想外の時間が費やされたが、建設後は、次々とロープが張られ、岩壁基部のC5がスムーズに完成した。ルートはやさしくなったとはいえ、決して気の抜けるルートではなかった。天候は相変わらず良くなかったが、隊員・シェルパの荷上げによって予定通りの物資が上がり、高所にも全員が順化し、いよいよ全員が頂上に近づきつつあった。

≪頂上岩壁≫

10月14日 ㊀ ～ ㊋

C5の村口隊は、朝、地吹雪のためしばらく待機をしていたが、強風をついて9時頃より岩壁の工作を開始する。C4にいた岡田は、南西壁のルートを工作隊に指示するためにC2へ下降する。中村・石川はC5へ荷上げ、途中井本は調子悪くC4へ引き返す。古野の確保で村口が蜘蛛の巣のように氷の詰まった壁から取りついた。5m登って敗退し、しかたがないので岩壁基部を10mばかり上部へ登ってみると、そこに、1981年のピトンがしっかりと打ち込まれ、白い残置ロープが右上へ所々氷づけになって伸びていた。そのピトンをしっかりとハンマーで叩き、ランニングを取り、かぶり気味のフェイスを左へトラバースする。20

C3～C4間　予想外のラッセルに悩まされた

m程複雑なトラバースをし、堅いブルーアイスのルンゼを直上し、左に回り込んだ所にいいテラスがあった。50m伸ばすのに1時間以上かかる。確保している古野と、そこで待つ鈴木は、ドルディー側からの吹き上げで寒さに震えている。後続の古野がテラスに上がり、再び村口はロープを伸ばして行く。鈴木は、登攀具の荷上げと、ロープの整備を行う。左へ左へ南西壁正面側へトラバース気味にルートを伸ばし、所々、垂直のフェイスを騙し騙し登ると第一雪田に出た。雪壁を40m直上し、遠くから見える顕著な八の字岩壁を目標にルートを伸ばす。天候が荒れ、風雪のために体が冷え、視界を失ったため、登攀を中止して下降する。たった4ピッチしかルートが伸ばせない。

南稜主稜線に出ると冷たい風がドルディ側から吹きつけてくる。工作隊は頂上岩壁を目指してひたすらロープを伸ばす。恐ろしく高く頂稜がそびえたつ

チューリン氷河側へ大きな雪庇が張り出した南稜をＣ４からＣ５へ向かう。
後方はバウダ（6,672m）

10月15日 ①

朝、地吹雪のため、今日も待機する。いくら待っても止まないので、10：00頃より行動を開始する。南西壁側にまわり込むと以外と風が無く、天候もそれ程悪くない。昨日の最終地点より工作を開始する。一歩登ると二歩ずり下がる最低のルンゼを左上し、雪を伝わって垂直フェイス基部をトラバースし、アイスハーケンをがっちり岩壁に叩き込んだ。古野とトップを替わり、３級程度のフェイスを直上すると第二雪田に出る。広い斜面を２ピッチトラバースして、雪田中央のリッジに出た所で工作を中止して下降する。この雪田から上を見ると南西壁がおおいかぶさるように迫って見える。右側は大ハングが夕日に輝き、左側南西稜の岩壁がヒマルチュリの城塞のように黒々と不気味に迫って見える。この雪田からさらに左へトラバースして行けば、それ程の困難もなく南西稜側へ抜けることができそうだ。Ｃ４にいたニマ・ドルジェがＣ５入りをする。

10月16日 ㊍

昨夜、台風なみの風が吹き、Ｃ５は恐怖におののいた。朝になっても風雪は治まらず行動不可能、全キャンプが停滞をくらった。岡田は降雪の中、ＢＣに辿り着き、上部キャンプと今後の打ち合わせをする。明日、Ｃ５の村口隊と、Ｃ４にいる中村隊が入れ代わり、引き続きロープを伸ばすことに決める。

10月17日 ①

降り続いた雪のためにＣ４にいた中村隊３名は真夜中、一瞬にして潰された。ツェルトを張って朝を迎えたが、悪天が続き、いつになったらモンスーンが明けるかわからない今、態勢を建て直すためＢＣに下降する。ヒマルチュリからは、冬が来てしまったかのように雪煙が上がり、モンスーン明けを告げる鶴も今だヒマルチュリを越えない。Ｃ５の村口隊は強風で飛ばされないように、天幕をたたみ、昼頃下降を開始する。一緒にいたニマ・ドルジェに「今日はＣ３のテント掘りだぞ！」と言っておいたがＢＣまで下降してしまった。潰されたＣ４はそのまま通過し、雪崩で埋まったＣ３を再建するために、３人でスコップを振るう。夕闇が迫る頃、やっと１張再建できた。Ｃ３にいたシェルパ

があまりの天候の悪さに危険を察知して勝手にBCに下りたからキャンプが崩壊した。シェルパが悪いのか、そんな所にキャンプを作った我々が悪いのか。シェルパ達は、あまりの天候とルートの悪さに、予想外に時間のかかることから登山活動を中止したがっていることが容易に想像できる。

10月18日 ①

村口隊は、午前中C3の埋まった天幕をもう1張掘り出してから、BCへ下降する。風が強いが、雲も少なく、モンスーンの明けたような感じの空だ。全員が揃ったBCで、今後のことについて話し合う。中止した方が良いという意見と続行しようという意見が出たが、現在の状況はC3・C4が潰されたぐらいで食糧・装備・酸素・燃料、そして、登攀意欲すべてが揃っている。ここで登攀活動を中止する理由はない。可能性がある限り登攀を続行する。こうした話し合いの中から、登攀計画の練り直しを行い岡田の決定をあおいだ。

≪登攀活動再開する≫

10月19日 ①

登攀終了迄を8日間の予定で再び登攀を開始することが決定し、サーダーのニマ・テンバと話をする。彼らは、もう下山したいとしきりに言っていたが、私達の行動計画を詳しく説明すると、了解し、隊員達と特別のレーションパックを作ったりして、荷上げのパッキングを始め出した。ヒマルチュリからは、雪煙が上がっているが、天気は安定してきたようだ。

10月20日 ①

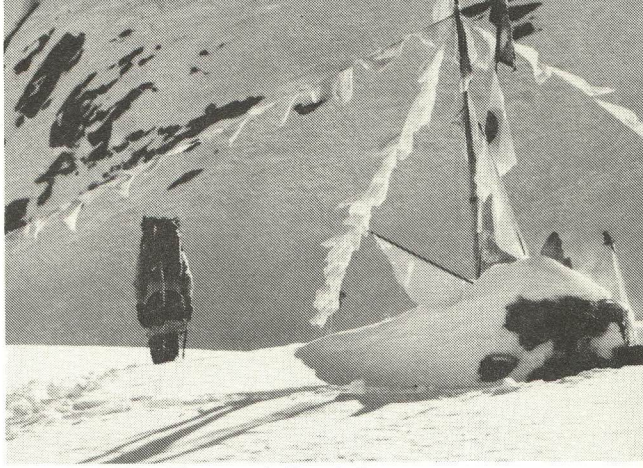
中村隊の3名とシェルパ5名はBCを出発し、C1をとばしてC2に入る。

10月21日 ①

ヒマルチュリは昨日、今日とわずかに雪煙がなびくだけで、天候は安定している。中村隊はC3入り。村口隊3名はC1をとばしてC2入り。

10月22日 ①

中村隊の3名とシェルパのニマ・ドルジェはC4入り。潰れたキャンプを再建する。村口隊はC3入り。



登攀活動再開。雪のBCを後にする

10月23日 ①

中村隊は順調にC5に入る。天気も良く、穏やかな登頂日和だ。村口隊はC4入り。

10月24日 ①

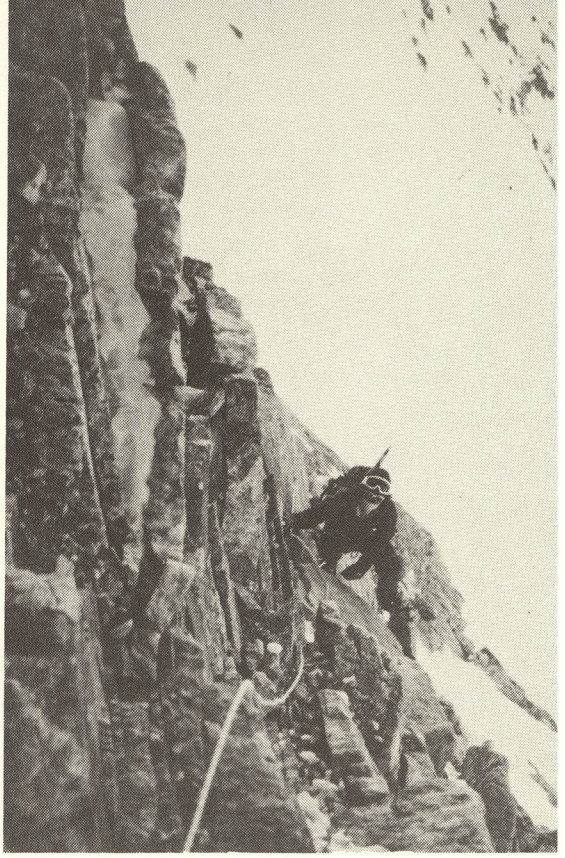
中村隊とニマ・ドルジェは、南西壁の最終工作地点より、さらにルートを7ピッチ伸ばし『プラトー』までロープを張った。第二雪田から雪稜を行くと中央ルンゼ下部の垂直のフェイスにぶつかり、所々威圧的な垂壁を越して中央ルンゼに出る。巧みに雪を伝わり、壁に沿って右上し、プラトーに到達する。直上ルンゼ最奥まで少しを残して下降する。今日の工作で可能性がかなり広がった。村口隊はC5入り。テントを張り終え、中でお茶を沸かしていると、中村隊が頼もしく下降してきた。BCの岡田とC5のメンバーで話し合った結果、明日、村口隊工作、中村隊アタックということに決定した。

≪アタック～事故発生≫

10月25日 ①

村口隊3名は、工作のためAM4：00、暗闇の中、ヘッドランプをつけてC5をスタートする。寒さが厳しく手足が痛い。プラトーの最終到達地点から工作を始める。古野トップで6㎜のロープを張りながら、直上ルンゼを登って行く。村口・鈴木が、後続し、ルンゼのどんづまりチューリン氷河側の見渡せるテラスに着いた。写真で見た限りでは、そこからごちゃごちゃした壁が登れそうだったが、実際には壁全体が大きくかぶっていて、

第一雪田付近

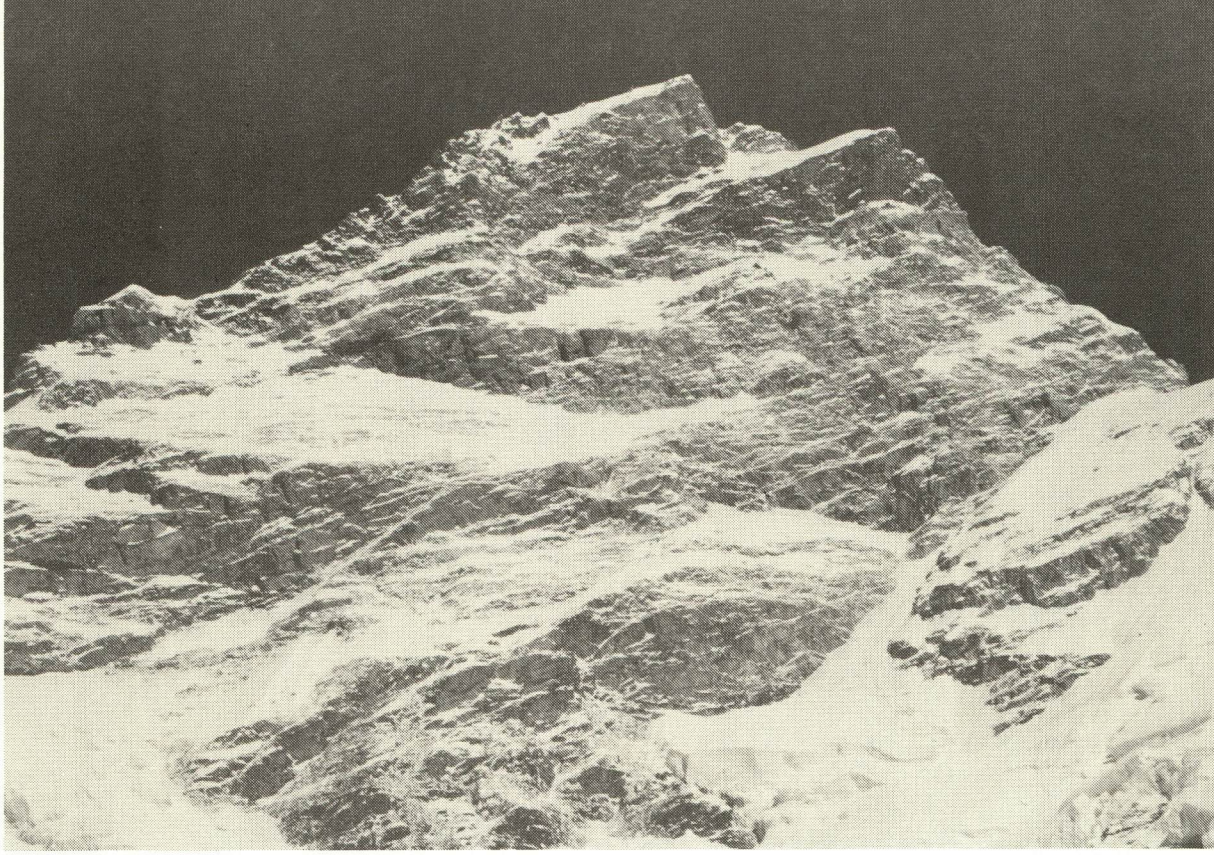


第二雪田付近

チューリン側は手のつけようがない。となると、残るルートは、真上に広がる垂直のフェイスしかない。見上げた途端、考え込んでしまった。古野と、あれこれ話し合っているうちに、アタック隊の中村・井本・石川・ニマ・ドルジェが登って来る。こうしていても仕方がなく、村口はハーケンを沢山ぶらさげて、垂直のフェイスに取り付いた。順層だが、所々、非常にいやな部分がある。トラバース気味にガリガリと登って行く。恐ろしく高度感の出る壁だ。50m一杯で狭い雪のテラスに着き、ピトンを2枚打ち込みロープを固定する。古野が登ってくる間、先のルートを観察する。頂上まで雪の広がる南西稜側へは、手に届きそうな距離で左側に見えるが、ハングした岩壁と空間とがルートを拒絶していた。古野がテラスに着き、確保を取る。左のバンドをじりじりとトラバースし、チムニーを渡って岩を抱きかかえるようにトラバースしたところで行き詰まった。テラスに戻り、右側へ行ってみるが、全体が大ハングの重なりでとても登れそうになく、再びテラスに戻る。直上はどうだろうかと5m程登り、かぶり気味のフェイスに薄刃のハーケンを打ち込もうと試みるが、失敗した。どうしても登れない。最終岩壁が、すべての登高を拒否するかのようだ。オロオロともどかしい登攀をしているうちに、下にツェルトを張って待機していたアタック隊が登って来た。あと30m、そんなにないかも知れない……。そこには頂上へと続く広いなだらかな斜面が目の前に開けるはずだ。なんとかして、ルートを探さなければならない。

今日のアタックは中止しよう。

この岩壁を抜けるまで、しばらく時間がかかるだろう。アタックをするには時間的に遅くなる。このままここにいても、体力を消耗させるだけだと判断し、みんなに下降してもらう。残った村口・古野のペアーで工作を続ける。ちょっと厄介だが、ハーケン連打でハング下をアブミトラバースしてみようと、最初のトラバースルートを左へ左へと回り込んだ。フェイスに張り付きながら古野の方を振り向いた。彼は長い時間、寒さの中で確保を続けている。「落っこちるから、ロープ、張ってくれ！」と声をかける。トラバースの終わりから、



ヒマルチュリ南西壁

ハング下をシュリンゲにぶら下がって3m程クライムダウンすると、狭い雪のテラスに着いた。ここから上を見るとかぶり気味だが、いいクラックが走った垂直のフェイスが登れそうに見える。厚刃のハーケンがあれば最高だが、と思いつつ、ピトンを2枚打ち、ハングを腕力で越して垂直のフェイスに出てみる。「登れる。ここさえ人工で越せば、登れる！」あとは雪を20m程伝わっていけば、うまく稜線に出ることができる。ルートが読めたので、テラスへ引き返す。ルートはここから確実に広がるはずだ。夕焼を見つめながら、私達は下降した。BCとの連絡で、明日、もう一度のアタックを決定する。

10月26日 ①

先行する予定だった村口隊の3名は、村口が凍傷、鈴木・石川は体調が悪いため、登頂を断念し、昼すぎC3へと下降を始めた。

中村隊との話し合いの末、古野とニマ・ドルジェのペアーが先行した。古野、ニマ・ドルジェは、昨日工作した最終地点からハーケンの連打で、南西壁を抜け出し、午後1：00、ついに憧れの頂上に立った。

6時半すぎにC5を出発した中村・井本も、夕方5：20、頂上に到達した。

頂上を後にフィックス地点まで下降してきた中村から「現在、登頂を終え、最終フィックス地点に到着、既に井本は下降中、自分もすぐに確実にゆっくりと下降します。ヘッドランプもありますし大丈夫です」という交信が届いた。しっかりした口調にひと安心し、C5に帰り着くのを待ったが、とうとうその日、中村からの交信は入らなかった。

以下の記述は、古野の手記に譲る。

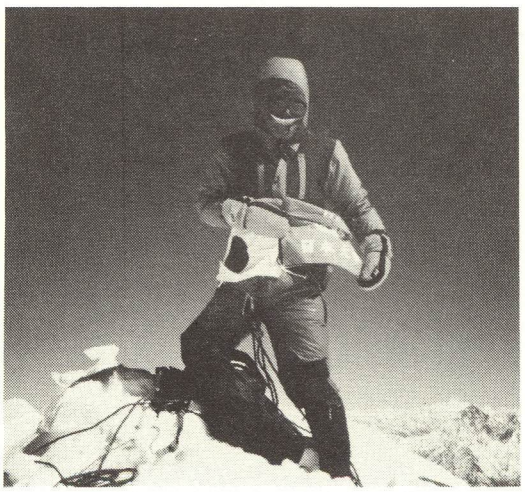
≪登頂手記≫

最終岩壁帯に取り付いた時、上部から覆いかぶさるハング帯を見上げ、半ば絶望的だと思い知らされたルート工作も、最終ピッチを張り終えた時点で、微かな光を見たような気がしていた。明日はきっといける。悪天の兆もないようだ。長く苦しんだ登攀もきっと明日で終わらせてやる。BC

の岡田隊長と最後の打ち合わせを済ませ、それぞれの天幕に戻り、明日に備えるため、酸素を吸いながら22：00就寝する。皆、意識ははっきりとしており、明日は全員で登頂できそうな雰囲気だ。

10月26日　晴れ。1：15起床。微かに風の音はしているが、まずまずの天気の様子である。短い睡眠時間ではあったが、気が張っていたせいか、目覚めは良い。村口、鈴木をゆり起こすが2人とも調子が悪そうである。村口は昨日の行動で足の指の凍傷が悪化し、行動できないとの話。鈴木は疲労の為、登頂を断念するとの意向である。朝食を作りながら今日の行動を話し合う。私はニマ・ドルジェと先行し、最終岩壁部のルート工作及び頂上アタックを行いたいと話す。朝食後、1人で出発の準備をして、中村隊の天幕を訪れるが、全員就眠中。4人を起こすが、石川は体調悪く（昨晩嘔吐する）、今日の登頂は断念したいとの事。食事を作りながらミーティング。私の意向を話し、ニマ・ドルジェには早く準備をさせ、私の後を急いで追って来るように指示する。当然、足の速さは違うので途中で追いつくはずである。出発の時間が予定より大幅に遅れてしまった。

5：15、ヘッドランプを点け、焦り気味に出発する。風は昨日より弱く、快調に高度を稼いでいく。何度も通ったルートのため、岩壁部分もスムーズに通過でき、第二雪田からロックバンドに入る所でニマ・ドルジェを後に見つける。時間を気にしながらさらに精一杯のスピードで登高し、頂上岩壁基部にさしかかったところで、9：00にニマ・ドルジェと合流。休む間も惜しみ、頂上岩壁部に取り付く。


頂上に立つ古野

昨日、村口によってルート工作された、傾斜の強い岩壁部のフィックスロープ2ピッチ（約75m）をユマーリング。昨日のルート工作最終地点に10：00到着。この上部5m程の垂壁は人工登攀である。事もあろうにアブミをC2に忘れてしまったため、シュリンゲでアブミを作り、チャンネルハーケンを連打し、ようやく岩壁部分を越える。ここの高度感はかつて経験のない恐怖である。この5mの壁を抜けた後、昨日村口に指示されたすべり台状の岩場に取り付く、しかしピトンのリスがなく、手掛かりがつかめない。右上の直上するルンゼも上部でかぶり気味である。右に左に、行ったり来たりしているうち、左方下り気味のトラバースにルートを見つけ、不安定な岩と雪のミックスした脆いバンドを抜けて頂上稜線に11：30、なんとか這い上がる。そこはまさに別世界のような斜面で、P29、マナスルが一望できる場所であった。ザックを置いて、緊張をほぐし、セカンドを確保する。ニマ・ドルジェは身が軽く、体力も群を抜いていたが、さすがにこの岩場の通過にだけは苦労している様子で、なかなか上がって来ない。2人揃ったところで初めて休憩。“もうここまでくれば十中八九、行ける”という気持ちで、嬉しさが込み上げてくる。それにしても中村パーティーの姿が見えない。私の目論見では、我々がルート工作を終えた時点で追いつくはずだったのだが、テルモスのお茶を飲んで12：00、頂上に向けて出発。

この稜線に出ると風が急に強まり、時折突風でバランスを失いかける。20m程の間隔をおいて、コンティニアスで登高。ちょうど冬富士を登っている感じである。雪庇に気をつけながら、稜線づたいに登高する。スピードを上げるとさすがに息が切れ、トップのニマ・ドルジェと私とで代わる代わる立ち止まり、深呼吸をする。疲れを全く見

頂上よりマナスル方面を展望する

せなかったニマ・ドルジェもさすがに苦しそうに歩いている。ラッセルはほとんどなく、程良くクラストした雪面はたいへん歩き易い。

頂上は雪庇状のピークが3つある。手前のピークから2番目のピークへと縦走し、13：00登頂。そのピークで写真を撮り、余ったピント類を残す。

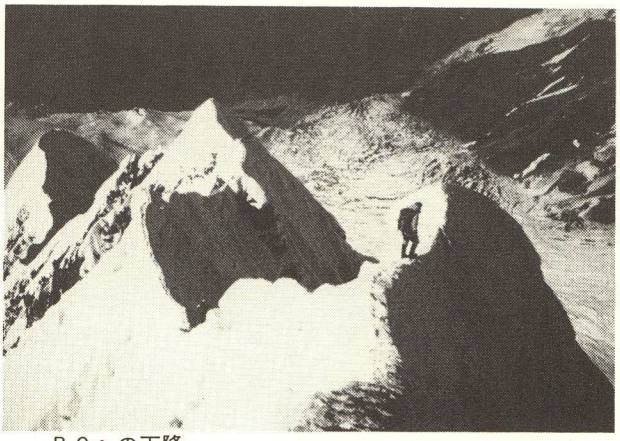
高校1年生の時、エベレストに登頂した石黒さんの姿を初めて映画で見て以来、この自分がヒマラヤの頂きに立っている姿など、夢にも思わなかったものである。頂上で旗を揚げるのは気分の良いものだが、やってみると風が強くてなかなかうまくいかない。あげくのはてには、旗を風でどこかへ飛ばしてしまった。"やれやれ、これでやっと遠征も終わる"。30分程、頂上にいた後、下山を開始する。下りになるとニマ・ドルジェが急ごうとするので「ゆっくり下降しろ」と何度も怒鳴りつける。案の定、雪面を10m滑落する。私の手首に通したロープで支えてかろうじて止まったが、どうやら私とニマ・ドルジェとの間の小さなスノーリッジにロープが食い込み、その摩擦で止まったようだ。登頂の安堵感も束の間、2人とも一気に緊張してしまった。

頂上岩壁の下降点には14：00に到着。この地点から中村・井本が頂上岩壁部をユマーリング中のところを確認。井本は私に「そこから頂上までどのくらいありますか」と大きな声で質問したので、私は「我々の足で1時間かかった」と答える。中村、井本パーティーでは、1時間では登頂できそうにないと思ったが、風が強く、まだかなり下方の2人と詳しい話をする事はできない。昨日のトランシーバー交信にて、登頂のタイム・リミットを15：00と決めていたため、登頂はもう無理ではないかと思っていたが、その気配のない事にとまどいながらも、我々は明るいうちにC5に帰りたい一心で早々に下降する事にした。

我々は頂上岩壁のフィックスロープをたどって下ると中村・井本パーティーと交錯して時間がかかると思い、ここから真っ直ぐにアップザイレンする事に決めた。ピトンを打ち足し、我々がコンティニアスで使用した青のナイロン・ロープ50mをシングルで固定。古野が先に下降する。ほぼ垂直から、かぶり気味の空中懸垂であった。ニマ・ドルジェがアップザイレンを終了し、15：00、再び、フィックスロープを下降し始める。古野が先行し、後からニマ・ドルジェがぴったりくっついてC5へ16：00に帰幕。ニマ・ドルジェが作ってくれたお茶を飲み、おかゆを食べて中村パーティーの帰りを待つ。井本が21：50、C5に帰幕。中村は、

後から下降しているとの事。井本の疲労は激しく、一度横になったまま動けない。話すのもつらそうである。中村パーティーの天幕で23：00まで中村を待つ。もし中村が帰幕しない場合、古野・井本及びニマ・ドルジェの3人で、早朝、中村の捜索に出発する事を井本とニマ・ドルジェに告げて、村ロパーティーの天幕に戻って就寝。村ロ・鈴木・石川の3隊員は　今日C3に下降している。

――――――古　野　　淳


ＢＣへの下降

10月27日　①

早朝、古野、ニマ・ドルジェは、昨夜戻らなかった中村の救助に向かった。7,500m付近で発見したのは、中村の所持品数点と、南西壁を真下に向かって点々と穴をあけた中村のものらしい滑落の跡だけだった。古野は現場の状況から捜索を打ち切り、下降を開始した。C3より登り返した鈴木とC4で合流し、共に下降する。BCでは早朝より3台の双眼鏡で捜索をしたが、中村の姿は確認できなかった。

10月28日　①

村ロ・鈴木・古野・井本・石川、ニマ・ドルジェの6名は、BCへ向かう。"こんなことがあっていいのだろうか"南西壁を探しながらBCへと下降した。

東尾根　ラニ・ピーク（6,693m）

帰　　路

先発隊

（村　口）

一刻も早く遭難の報告をするために隊を2つに分ける。先発は、岡田・村口・チンジ・キッチンの2名という小編成で、10月29日ベースキャンプを後にする。何度も何度もふり返りながら、まだ岩壁の中にいる日出さんに呼びかけていた。それまでヒマルチュリの壁は、可能性と不安を含めて、あくまで頂上へ到達しようとする希望に満ちた目でながめていた。ついさっきまでいた世界はもうここにはない。山がひどく寒く見える。昔に見たヒマルチュリとは違っていた。日出さんがこの山のどこかにいるということでしかヒマルチュリを捉えられなくなってしまった。キャラバン中はもっと複雑だった。諦めなければいけないと思いながらも諦めきれなかった。

29日キューダカルカ、30日タジェ、31日ボテオラと朝から夕方までひたすら歩きつづけ、11月1日には，カトマンズにたどりつく。

後発隊

（鈴　木）

10月30日　晴～曇　BC→ウクンダカルカ

2ヶ月もヒマルチュリで生活していると、この風景が大変親しいものに感じられる。日出さんのチョルテンで長い時間を過す。シェルパ達が香を焚きお祈りをして一人一人下って行った。濃い青空にヒマルチュリと、国旗が鮮やかだ。日出さんは、本当に死んでしまったのかと考えつづけた。BCからの下りは、青かった草が黄色に変っていて、ヒマルチュリと空の組み合わせが素晴らしかった。休養キャンプは通らず、直接下のカルカに降りて行く。夕食はヤギを一頭買い、久し振りに焚火を囲んで静かな夜を過した。

10月31日　晴～曇　CS→ジョルダカルカ

モミや石楠花は緑だったが、落葉樹はもう葉を落としていた。午前中は空気が澄んでいて風景が非常に鮮明だ。きのうと同じように午後からガスってしまった。

撤収準備　タジェのポーターがBCへ上がって来た

ベースキャンプの小高い丘に作られたケルン

11月1日　晴　CS→タジェ

今日は1,200mも下る。落葉の積み重なったジョルダカルカを下り始める。晩秋の雰囲気だったのが、やがて木々は緑に変わる。さらに降りてゆくと、セミの鳴声が聞こえてくる。セーターからTシャツ一枚の姿に変身する。太陽は暖かく、水の音が聞こえ、生きものの世界に帰ってきたのだという実感が湧いてきた。昼過ぎにタジェの村はずれに着く。田んぼの中にマットを敷きヒマルチュリを眺める。

11月2日　晴　タジェ停滞

ティハールという祭りのためポーターが動かず、タジェで停滞する。疲労のせいか、みんなゴロゴロとしているか、食べているかのどっちかだ。午後7時のニュースでヒマルチュリの事故のことが流れた。

11月3日　晴　CS→プトリケット

ティハールのためかポーターの集まりが悪く、また花で飾っている人が多い。タジェよりドルディコーラまで急降下し右岸に渡る。すぐ牛の放牧地になり、犬にさんざん吠えられた。川沿いの道を進む。一ケ所高巻があり、先行しているキッチンスタッフが何やら騒いでいる。なんと対岸にマントヒヒ？が群をなしていた。ひたすら田んぼの中を早いペースで歩き左岸に渡る。キルティプールを通過し、まじめに歩きつづけるのだがなかなか予定地まで着かない。ついに4時で打ち止め。プトリケットの手前の河原にテントを張る。

11月4日　晴　CS→ボテオラ

いつもより早い出発である。マルシャンディコーラが見えてきた時はなつかしい気がした。マルシャンディまで出ると、乾期には車が走っている。お昼にボテオラに着いたが、トラックは通らず、学校の校庭にテントを張る。タジェのポーター達は給料をもらって嬉しそうに帰っていった。我々はビールを飲み、ぼんやりと時間を過ごした。

11月5日　CS→カトマンズ

マナスル・ピーク29、そしてヒマルチュリが朝日に輝いている。自衛隊のトラックみたいなのに乗って出発だ。道はひどかったが、行きのキャラバンで2日かかったところをわずか2時間余で走ってしまった。デュムレでパンとダル、カレーをつめ込んだ後、一路カトマンズへ向かう。夜8時前カトマンズに到着する。

行動表

岡田隊 ： 岡田、中村、井本、石川
村口隊 ： 村口、鈴木、古野

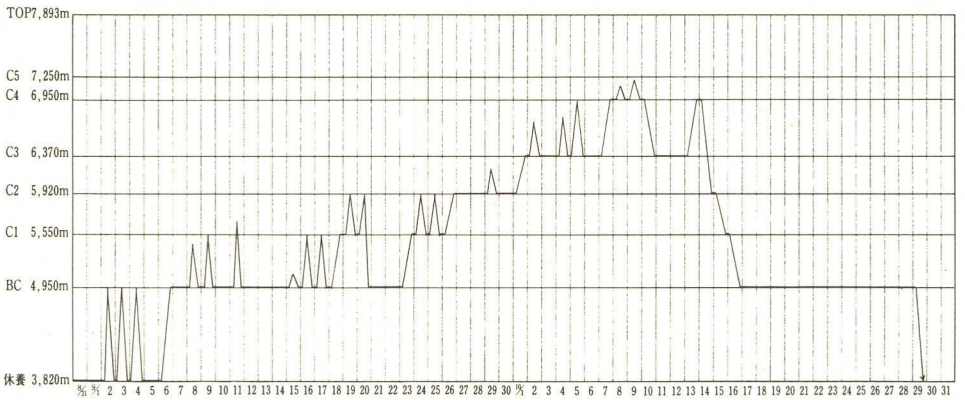
月・日、天候	(3820m)	B.C (4950m)	C1 (5550m)	C2 (5920m)	C3 (6370m)	C4 (6950m)	C5 (7250m)	Top (7893m)	備考
9/1 ◐～◎		村口、石川 鈴木、古野							
2 ◐～●		全員							
3 ◐～●		全員							
4 ◎～●	Rest	岡田隊４名							
5 ●	Rest	村口隊３名							
6 ●		岡田隊４名							全員BC集合
7 ●									BC開き
8 ◐～●			岡田、中村、鈴木、石川 村口、古野（トリプル洞穴ピークコルへのルンゼ試登）						C1予定地到達
9 ●			岡田、中村、井本、鈴木、石川 村口、古野						C1建設
10 ●			井本 村口（洞穴ピーク直下まで） 古野						
11 ◐～●			石川、中村、井本 岡田、鈴木						
12 ⊛		Stay							
13 ⊛		Stay							
14 ⊛		Stay							
15 ◐		岡田隊（氷河対岸まで） Stay							ラッセル
16 ◐～⊛			岡田隊 村口隊						C１再建設 C１入り
17 ◐			岡田隊	村口隊					
18 ◐			岡田隊	村口隊					

月・日、天候	Rest	BC	C1	C2	C3	C4	C5	Top
9/19 ◐~◉		Rest	岡田隊					C2予定地到着
20 ◐		村口隊	岡田隊					C2建設 C2入り
21 ◐~⊛		Rest		村口隊				
22 ⊛		Rest		村口隊				
23 ⊛~◐			岡田隊	村口隊				C3予定地決定
24 ◐~⊛			岡田隊	Rest				
25 ◐~⊛			岡田隊	村口隊				C3建設
26 ◐~⊛◉			岡田隊	村口隊				C3入り
27 ◐~⊛				Rest	村口隊			
28 ⊛				Stay	Stay			
29 ◐~⊛				岡田隊	村口隊			
30 ◐~⊛		村口隊		岡田 Rest	中村、井本、石川			
10/1 ⊛		Rest			岡田隊			
2 ◐~⊛		D.P村口隊			岡田隊			
3 ◐~⊛		D.P村口隊			Rest			
4 ◐◉		村口隊			石川BC下降	岡田、中村、井本		
5 ◐◉		石川 Rest	村口隊		岡田隊			C4予定地到達
6 ◉~⊛		石川 Rest	村口隊		Rest			
7 ◐~◉		石川 Rest		村口隊	岡田隊			C4建設
8 ◐~◉		石川			村口隊	岡田隊		
9 ◐~⊛			石川		村口隊	岡田隊		

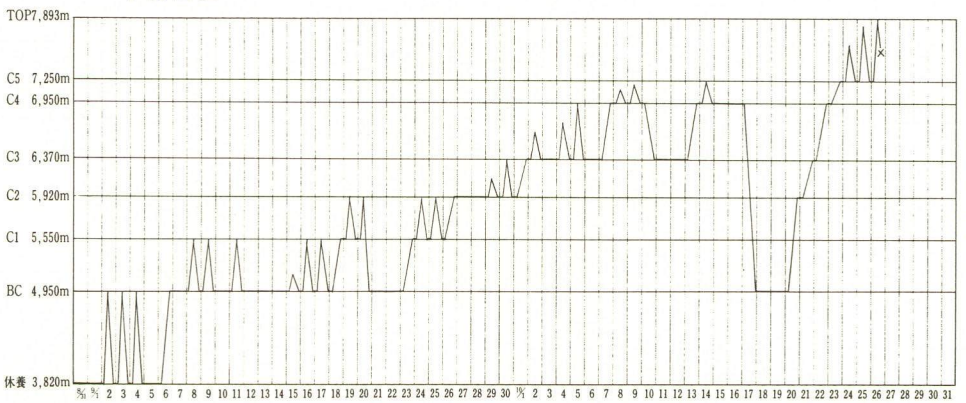
月・日、天候	B.C	C1	C2	C3	C4	C5	Top	備考
10/10 ⦶			石川 →	← 岡田隊 / Rest				
11 ⦶～⊛				石川 ← / ○ / 村口隊 →				
12 ⦶ 風強し				Rest	村口隊 ⇄			C5 予定地到達
13 ⦶				→	岡田隊 / 村口隊 →			C5 建設
14 ⦶～⊛			岡田 ←		中村、石川 ⇄ / 井本	村口隊 ⇄		
15 ⊛～⦶		岡田 ←			Rest	村口隊 ⇄		
16 ⊛ 風強し	岡田 ←				Rest	Rest		
17 ⊛ 風強し	←	←	←	←	中村、井本、石川	村口隊 ←		C4 つぶされる
18 ○ 風強し	Rest / ←		←	村口隊				
19 ⦶	Rest / Rest							
20 ⦶	→	→	中村隊（中村、井本、石川　ニマ・ドルジェ）					
21 ⦶	岡田 / →	→	中村隊 → / 村口隊（村口、鈴木、古野）					
22 ⦶			村口隊 →	中村隊 →				
23 ⦶				村口隊 →	中村隊 →			
24 ⦶					村口隊 →	中村隊 ⇄		
25 ⦶						村口、古野 / 中村、鈴木、井本、石川、ニマ・ドルジェ ⇄		
26 ⦶				村口、鈴木、石川 ←	古野、ニマ・ドルジェ / 中村、井本	登頂 ⇄ / 事故発生 ⇄		
27 ⦶				井本 ← / 石川 ⇄	鈴木 ←	古野、ニマ・ドルジェ ⇄		捜索
28 ⦶				全員 ←				
29 ⦶	← 岡田、村口							
30 ⦶	← 鈴木、古野、井本、石川							B.C 撤収

個人別行動表

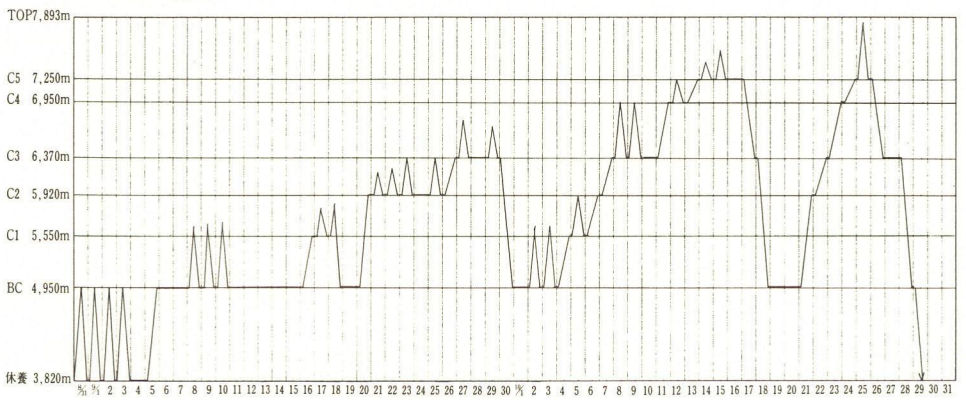
岡田貞夫



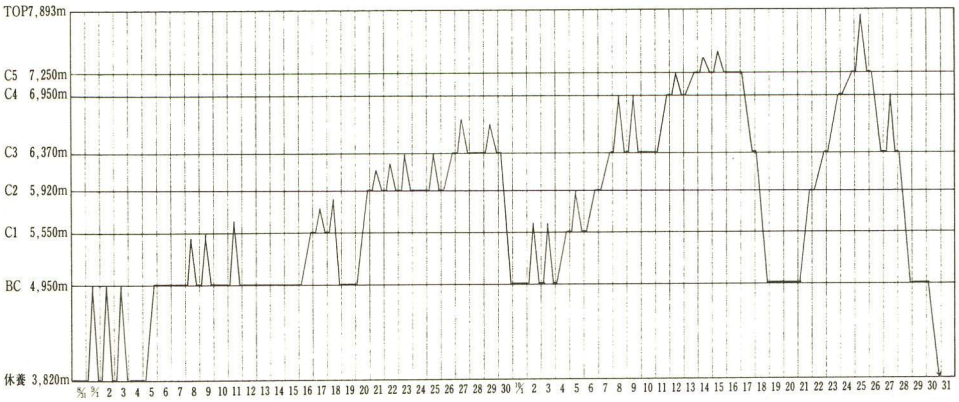
中村日出



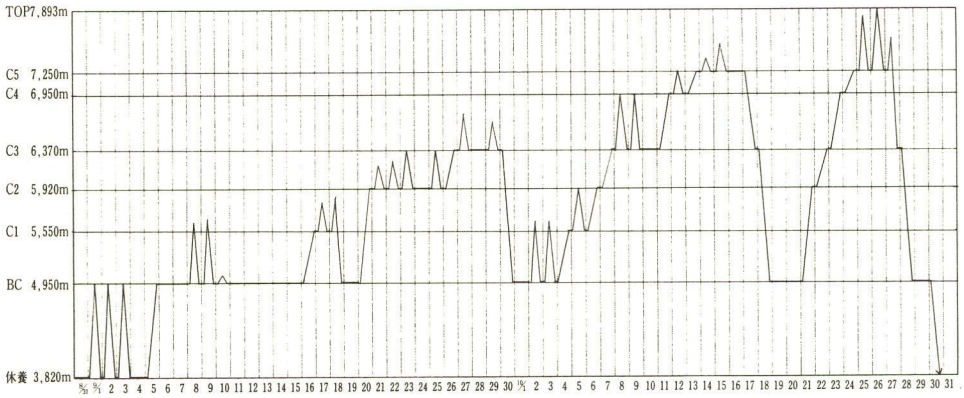
村口徳行



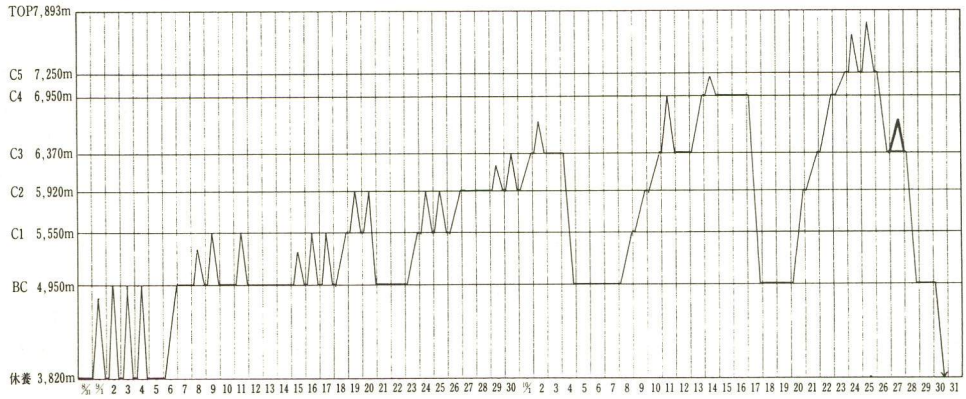
鈴木弘之



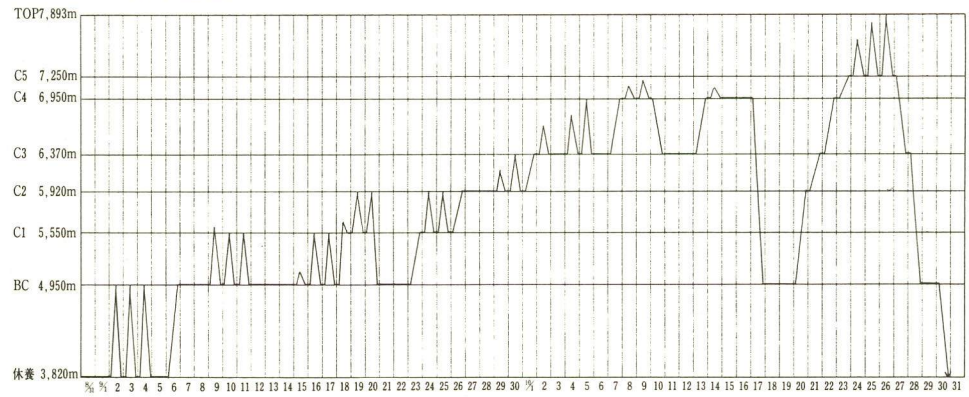
古野　淳



石川一郎



井本重喜



登山活動の総括

（岡　田）

ヒマルチュリ南稜から南西壁を経て初登攀に至るまでの活動内容は、全ての力を出しきった精一杯の充実した行動であった。しかしながら下降中の中村の遭難は、なににもかえられぬ大きな代償であった。私達６名はあのいまわしい日々に体験したものとはまた異なる悲しさの増していく中で、この事故により萎縮するのではなく、事実をより正確に把握し、積極的に大きな課題として取り組む事で、後続してくれる人達のためにも総括をこころみたい。

私達にとって５年ぶりのヒマルチュリに参加した４名は、高所登山の経験がないため、5,000ｍにスムーズに順化ができるかが計画の大きなポイントであった。この高さへの完璧な順化なくして、その後の全ての行動は成り立たない。実際には、隊荷到着の遅れ、それにともなうキャラバンのスタートの遅れなどもあったが、経験の少ない隊としては、非常に順調なBC（4,950ｍ）への順化が行なえた。

５年前と同じルートとはいえ、モンスーン中の登攀は、特にＣ１～Ｃ２間であまりにもルートが変化していたこと、視界の悪い天候にもかかわらず、工作、荷上げに支障が出なかったのは、ルートを知っていた強味があったからである。

6,000ｍ・7,000ｍと高度が上がり、悪天による停滞はあったものの、誰一人、重度の高度障害にかからず、隊員が原因となる計画の遅れはなかった。ＢＣスタート時に組んだパーティーがそのままローテーション良く行動できたのは、東京でのトレーニング方法の基本的考え方、実行に誤りはなかったと確信した。

個々の力は'81年の隊員にまさる事はなかったが、経験の無い隊員が、自分自身のコントロールだけでもたいへんな高所において、自己管理ができ、分担された仕事を行なえたのは、'81年の経験が財産として受け継がれたためであろう。

補給についてはシェルパ達の力が大きかったが、危険手当なる名目のボーナスの要求に対し、何か割り切れないものを感じ、即答は避けたものの、彼らの希望をのむ結果となった事は、私自身の力不足によるものが第一の要因である。しかし、それまでに至る彼らの献身的な行動の裏付けがあったし、その後の彼らの働きには目ざましいものがあったのも事実であり、計算通り物資が全キャンプに補給を終るまでに至った。

10月中旬に入ってもモンスーンは明ける気配さえ感じられず、朝は必ずといってよい程ラッセルで始まり、体力の消耗も激しかった。しかしチャンスの少なくなっていく貴重な時間の中でも、登頂後のアクシデントの発生率が高いため遭難対策上、Ｆixロープによる下降路の確保があって後のアタックの考え方にかわりはなかった。

Ｃ５（7,200ｍ）より7,800ｍの最終岩壁を抜けるまでＦixロープを張った作業に費やした時間と労力は、登頂の成否を大きく左右する天候という時間との戦いの中で、私達の力の最大限の努力であった。

アタックも間近になった10月16日の夜半、突風によりＣ４及びＣ３が一瞬にして潰され、Ｃ５は孤立、補給路は壊滅した。態勢建て直しのため、18日、ＢＣに全員が集結、登山活動の終了をも考えたが、隊員の登攀意欲は少しも衰えず２日間の休養後、再度８日間の計画で頂上アタックに向けてスタートした。

10月25日の第1次アタックは失敗に終ったものの私を除く６名が何んの支障もなく7,700ｍ以上に達し得た事、そして頂上に到達した３名の内２名は、初めての海外登山経験であったことからも、基本計画案通りの高所適応ができ、チームワークの結集の結果であり、個人個人、納得のいく活動であった。

今後、私達の行なった登山活動の内容を有意義に活用し、二度と事故を起こしてはならないという反省を含めてさらに素晴らしい計画を創ってもらうことが、私達の最も望むところであり喜びである。

記録、報告、学術

装　備

井本重喜

装備は1981年ヒマルチュリ隊の資料を参考に、不足なものと余分なものとを検討した。重量・予算・必要性などの面からも考慮したが、基本的には良質な装備を揃え、つまらないミスのために登山活動に支障をきたすことのないよう配慮した。特に露営具・登攀具・燃料などに関しては、タクティクスとルート状況を再度検討しなおし、必要最少限な数の割出しと安全性を重視した計画を作成した。

装備調達にあたっては、OBの方々、各企業、登山団体などたくさんの御協力をいただき、予算も軽減することができた。

共同装備は現地購入、借用を含め、トータルで約600Kgの重量となった。

── 使用報告 ──

1. 露営具

テント数はBCに9張、各キャンプ2張ずつで、C4のみ1張の計18張。いずれも4～5人用、または5～6人用のドーム型である。高所用として使用したテントは、ダンロップ社の6人用テントとカモシカエスパースを使用した。隊員による補強や、天幕地の選択により、特に問題はなかったが、いずれもスペアーのポールフレームは必要である。テントの固定には、アルミのアングルバーや自然物を使用し、各テントにそれぞれフィックロープを通して固定した。テントマットには、5㎜厚のウレタンマットを使用した。断熱に優れ、また緩衝材としても多く使われ、非常に有用なものだった。キャラバン中は雨季のため、フライシートは必需品となる。特にキッチンや、荷物の管理などの面からも、準備した大型のハイピーシートが非常に役に立った。

2. 登攀具

BCから頂上までの標高差約3,000m、水平距離にして約8㎞。C1からC3間、C4から7,800mまでを完全につなぎ、BC～C1間、C3～C4間は部分的にフィックスした。固定用ロープとして、ダンライン9㎜φ×6,200m、ナイロン10㎜φ×300m、ナイロン編みロープ6㎜φ×100m、計6,600mのロープを使用した。場所に応じてロープを張り、持参した全てを消化した。岩角などで擦れる部分にはビニールテープを巻いて直接触れないように工作され、荷上げや順化のたびに整備をしながら行動した。

ハーケン類は、厚刃・薄刃・パイプ・スクリュー・イボイボなど岩壁部で多く使用された。雪稜ではスノーバーが多量に使われた。アルミアングル材、30㎜×30㎜×3㎜厚のものを80㎝に切断し、6ケ所に突を開け、頭部にシュリンゲを通したものを持参した。

アブミ・ラダーは各2ケ所で使用し、ボルト類は使用しなかった。

登攀用の個人装備は、普段日本で使い慣れた装備を使用した。

3. 燃料

当初プロパンガス(充塡済のもので重量約15Kg)をC3まで上げる予定だったが、荷上げの問題からC1迄で使用することにし、上部キャンプは寒冷地用ブタンガスを使用した。25本のプロパンガスと、150個のブタンガスは、登山終了時に、わずか2本の充塡プロパンを残すのみとなっていた。照明用と予備コンロ用としてケロシン80ℓを用意したが充分であった。

上記以外の主要装備は表にして現わすことで、詳しくは省略したい。

個人装備については、各自必要装備をリストアップさせ、「市販品で質の良いものを」と検討を重ねたが、最終的には、個人の好みに任せた。

中でも利用価値の高かった物が、ワンタッチ式のアイゼンで、着脱も早く使い易い。靴は殆どのメンバーがコフラックのプラスチックブーツを使用したが、保温性も高く、軽量のため好評だった。インナーにサーモインナーを使用した者もいたが、非常に保温性が優れているということだった。今回ラッセルに非常に苦しめられたわけだが、ワカンも必需品だと思った。

ちなみに私の登頂時の個人装備は、化学繊維の下着上下、オーロントレーナーシャツ、綿のクライミングパンツ、パイルジャケット、羽毛服上下、ゴアテックス雨具上下、高所帽、ゴーグル、ネックウォーマー、手袋、羽毛ミトン、ソックス3枚重ね、プラスチックブーツ、オーバーシューズ、アイスバイル、ゼルブストバンド、ユマール、カラビナ、ヘッドライト、SP電池、以上である。

装備全体を通して考えてみると、まだまだ研究、改良の余地のあるもの、不足、余分なものなどがある。しかし準備中に十分に検討して、持参した装備を山でどう生かすかが大切だと思う。なによりも必要最少限の装備で登るのがもっともベストの登山であろう。また準備期間中においても、無駄な時間を極力さけ、予算内で効率よく準備することが必要だ。

主要装備表

区分	品名	規格	数量
露営具	テント	ダンロップ　6人用（外張、フライ含む）	6張
		エスパース 4～5人用（内張、フライ含む）	5張
		ウィルダネス　4人用	1張
		〃　2人用	2張
		石井スノードーム	3張
		夏用家型　6人用	1張
	ツエルト	モンベルウルトラライト	5張
	ポールスペアー	ダンロップ、エスパース	各2張分
	ハイピーシート	3.6 m×5.4 m	7枚
登攀具	ナイロンザイル	ナイロン　9㎜φ×50 m	4本
	フィックス用ロープ	ダンライン　9㎜φ×50 m	6,200m
	〃	ナイロン　10㎜φ×50 m	300m
	〃	ナイロン　6㎜φ×100 m	100m
	スノーバー	アルミアングル 80 cm	154本
	〃	〃　40 cm	28本
	ロックハーケン	兼用、ウェーブなど	300枚
	アイスハーケン	20 cm　各種	80本
	カラビナ		250枚
	シュリンゲ	6㎜φ、15㎜巾テープ	300本
	ラダー	3 m	3台
	アブミ		10本
燃料	プロパンガスボンベ	内容量10 Kg	25本
	ブタンガスカートリッジボンベ	寒冷地用	150個
	ケロシン		80ℓ
その他	イワタニプリムスガスコンロ		12ケ
	プロパンガスレンジ		4台
	圧力釜		3台
	トランシーバー		8台
	乾電池	単3形	1,800本
	8㎜カメラ		2台

食　糧

石　川　一　郎

食糧計画は、1981年ヒマルチュリの計画を基に、次の7項目の基本方針を立てた。

1. 食べやすく口に合うものを選ぶ。
2. 栄養価の高いものを選ぶ。
3. 消化吸収の良いものを中心に考える。
4. 水分の補給しやすいものを考える。
5. 調理の簡単なものを選ぶ。
6. ビタミンの補給を考える。
7. 次の7種に分類する。

a．キャラバン食
b．BC食
c．低所キャンプ食、C1～C2間で使用
　3人×4日で1カートン
d．高所キャンプ食、C3～C5間で使用
　3人×3日で1カートン
e．アタック食
f．予備食、c・dに準じて作る。
g　スペシャル食、嗜好品中心の食糧

以上の方針に沿って献立表を作成し、タクティクスからはじきだされた各キャンプ別の延べ人日数にあてはめ、荷上げ量が決まっていった。キャラバン・BC食は現地で購入し、ドッコと呼ばれるかごに30Kgづつ詰めた。BC以上の食糧は、すべて日本で準備し、ビニールに人日数でひとつの献立のパックをつくり、15Kg前後のビニールパックを作る。さらにそれをカートンにつめて、2つまとめた30Kgの大カートンを作った。こうすることによってキャラバンから荷上げまで表示することができすべてが解決する。

現地購入のキャラバン・BC食については、その人日数をコックに示して彼に一任した。カレーが中心になったが、飽きもせず大変好評だった。その他、好評だったものに、ティモモ（中国の饅頭のようなもの）、コロッケ、野菜いため、ソーメンなどがあり、不評だったものは、ララ（現地のラーメン）ぐらいだった。昼はチャパティーやホットケーキが好まれた。新鮮な野菜や果物はメイルランナーに買い出させ、不足分を補った。BCでは圧力釜を使用したために、おいしい米が食べられた。コック・キッチンボーイが優秀だったせいか、食生活はとても豊かで満足のいくものだった。

C1～C5間の食糧は、レトルトパウチ食品が中心で、主食は米飯類6種（白飯・赤飯・ドライカレー・山菜おこわ・ホタテピラフ・五目飯）であったが、赤飯・山菜おこわは、戻りが悪く、パラパラの飯であまり良くなかったが、手を加えたりしてどうにか食べられた。人気のあったものは白飯・ドライカレーであった。副食（おかず）としては、カレー・シチュー・ワンタン・中華飯の素などを使用したが、カレー・シチューは作るのが少々面倒なのか、入れる乾燥野菜が良くないのか人気品目にはなり得なかった。アルファー米も多く使用され、お茶漬やふりかけ、おじやなどでさっぱり食べるのが好まれた。上部へ行くにつれお茶漬やふりかけが人気品となり、村口隊の3名は、何日にも渡って朝晩お茶漬を食べていたようだ。高所ではさっぱりしたものが口に合うらしい。

ラーメンは、調理も簡単なので一日の行動終了後や、朝の食事に良く使用された。

行動用レーションを、1人1日毎に約200gのパックを作ったのは成功だった。内容は、寄贈品のカンパンがレーションパックの中身80％をしめ、その他、アメ・ピーナツ・コンブ・干ぶどう・ようかん・ゼリー・ビスケットなどで作ったが、カンパンが一部で不評だった以上は、結構おいしいメニューだった。

水分補給のために、ゲータレード・コーヒー・

紅茶、食事時のスープ・ミソ汁など飲みものを多めに用意した。

嗜好品を中心として作ったスペシャル食は、好評なのは当然だが、その中でも特に、イカの塩辛・海苔の佃煮・梅干し・干魚・もち・海苔などは、食欲促進剤としても好まれ、もっと多めに用意するべきだった。

全体的には各人の嗜好による好不評はあったが、食糧パックを柔軟に作ってあったので、自分達の好みでメニューを考え、食べていた。量的には、その日の体調にもよるが、全体的に多かった感じで、特に上部では余り気味だった。今回に限っていえば、計画した70～80％で足りたようである。

キャンプ別重量及び基本計画表

	滞在人日数（人日）	基本重量（1人1日Kg）	総重量（Kg）	荷上げ量（個）	基本メニュー（a・朝、b・昼、c・夜）	備考（d好評 e不評）
キャラバン食	500	1.5	750	—	a・ラーメンor飯＋α b・チャパティ c・飯＋おかず＋α	d・野菜いため・カレー e・ラーメン（ララ）
B C 食	476	1.5	714	—	キャラバン食と同じ その他嗜好品	d・コロッケ，他 e・ラーメン（ララ）
低所 C1	111	1.0	111	3人×4日×10	a・レトルト（6種より選択）＋α b・レーション c・α米＋おかず その他、ラーメン・飲物・ふりかけ他	d・ドライカレー 白飯・お茶づけ つけもの e・赤飯 山菜おこわ 乾燥野菜 カレー・シチュー その他嗜好品は好評、特にうめぼし佃煮、イカの塩辛
低所 DC	35	1.0	35	3		
低所 C2	134	1.0	134	12		
高所 C3	71	0.8	568	3人×3日×8	a・c・レトルト（6種より選択）＋α b レーション その他、ラーメン・中華スープ・飲物，他	
高所 C4	41	0.8	32.8	×5		
高所 C5	14	0.8	11.2	×2		
予備 低所	80	1.0	80	3人×4日×7	低所・高所に準ずる	—
予備 高所	24	0.8	19.2	3人×4日×3		
スペシャル	—	—	120	12	嗜好品（そば・うめぼし・マヨネーズ・ゴマ・はちみつ・佃煮 他）	10Kgカートン×12コ 主にBCで使用
合計	—	—	2064	62	—	—

※ この表は計画時のもので、実際にはDCがC2になり、キャンプ数は5コとなったため荷上げ量は違っている。合計では計画の70％前後を荷上げし残ったものは、BC、帰路のキャラバンにまわした。

酸　素

古　野　　淳

八千メートル峰における登山報告書を読んだり、経験者の話を聞くと、酸素使用の役割がいかに大切なものであるかと認識させられる。しかし、エベレストを始め、八千メートル峰の無酸素登山の記録も数多く見られるようになってきた。高所における酸素使用の議論は尽きぬところだが、登山界の時流に乗り、安易に結論づける事は避けたいと思っている。

1, 使用計画

過去、ヒマルチュリを含む八千メートル前後の山々（ダウラギリ・アンナプルナ・ジャヌー等）でも酸素を行動中に使用する事が試みられてはいるが、実際に目に見える効果を上げた隊は数少ない。一般にこの標高（7,500 m～8,200 m）では医療用、睡眠用にのみ使用されるケースが殆どで、我々は前回の経験もあって、医療用、睡眠用にのみ使用する事を考えた。

高価な酸素器材を購入する事は、我々の規模の登山隊にとっては大変に頭をいためる問題ではあるが、困難でしかも長大なルートには長期戦、あるいは高度障害を起こしてしまっても容易に高度を下げる事ができないという事態も予想され、一種の保険として利用するのではなく、高所に長期間滞在できる生理機能を維持するという意味で積極的に使用する事にした。

使用方法は以下の通りである。

- ○ＢＣには医療用として数本を配置する。
- ○睡眠用の使用は、第３キャンプ以上とする。
- ○隊員・シェルパとも毎分 0.5 ℓの吸入で使用。

2. 用具

メインで使用するシリンダーは、アメリカＮＡＳＡが開発したラクスファー社製（アメリカ）で英国ライフ・サポート社で販売しているＬ 45－45 FIBRE WRAPPED ALUMINIUM CYLINDERというタイプ12本である。充塡圧力 350～400 気圧、容量 4.5 ℓ、5.5 kg。現在のところ最も優秀といわれているシリンダーであるが、レギュレーターは専用のものを使用する必要があり、又旧タイプのラクスファー製シリンダーでは新タイプのレギュレーターと合わない。レギュレーターはシリンダーに直結する部分に減圧器と圧力計がついており、そこから１ mのチューブが延びていて、その末端に流量調節器がついたものである。尚、レギュレーターは３個購入した。

又、我々はカトマンズで10本のシリンダーを購入した。フランスＡＭＰタイプのレギュレーターがコネクションできるもので、フランス製と西ドイツ製があり、すべて２００気圧以上の純酸素であった。レギュレーターはＡＭＰ純製と日本製を使用。レギュレーター接続ネジ部の径は２種類あり、１種類はシリンダーとレギュレーターの間に銅製六角のコネクターが必要である。シリンダーの大きさはまちまちで、4種類もあり、１本12kgもあるものやスチール製のものもあった。

その他の付属品は以下の通りである。酸素マスクは医療用10セット、アルミ製四又管と三又管及び配管チューブ、Ｏリング、六角レンチ（コネクター用）、プライヤー等。

3. 使用結果報告

ＢＣに医療用として２本を配置し、残りの20本はすべて睡眠用としてＣ２～Ｃ５に配置した。隊員及びシェルパのボッカ力は予想以上で、ほぼ理想通りの荷上げを行う事ができた。各キャンプの酸素使用本数は以下の通りである。ＢＣ－２本、Ｃ１－０本、Ｃ２－１本、Ｃ３－３本、Ｃ４－８

本、C5－8本。睡眠時の酸素使用が翌日の行動、あるいは高所長期滞在を可能にした事は確かであったが、個人差のあった事も事実であった。酸素を必要とする高度に差があるため、全隊員・シェルパが一律に同じ量の酸素を吸う事は無駄が生じてしまうが、実際の現場においてそのコントロールは難しい問題である。

実際の使用法は、1天幕3人の場合、圧力計の目盛を1.5～2ℓ／分に合わせ、天幕の天井に這わせた配管チューブから各隊員に酸素を送るというシステムである。過去、酸素器材における様々なトラブルが報告されているが、実際の使用結果及び感想は以下の通りであった。

① バルブ部分の凍結

酸素シリンダーは天幕外に置く事が多いので大抵の場合、バルブ部分は凍結しているが天幕内に特ち込んで、少し温めると問題はない。特にラクスファータイプはハンドルが大きく使い易かった。

② 酸素シリンダー内圧の低下

ラクスファー製シリンダー1本のみ、未使用で200気圧程度に下がっていたが、他は総て320～400気圧を示していた。AMPタイプも総て200気圧以上を示していた。

③ 酸素シリンダーとレギュレーターとコネクションするパッキンの破損による酸素の漏れ

AMPタイプには予備を持参したが、ラクスファー製には予備が無かったためパッキンを裏にして使用し、難を逃れた。ラクスファー製は手の力のみで十分であるが、当初慣れない事もあって、レンチ等で無理に閉めたため、パッキンの破損を早める結果となってしまった。又、AMPタイプはレンチ等で強く閉めないと酸素の漏れが止まらない。レンチを紛失した時は、たいへん苦労した。

酸素消費量の実際は、ほぼ計算通りであった。ラクスファー製1本を3人で毎分2ℓの割合で使用すると2晩目の途中で使い切ってしまう。又、AMPタイプは1本を1晩使用し、僅かに残りが出る程度であった。

計算式は以下の通りである。

○ラクスファー製シリンダー

$$\frac{4.5\ \ell \times 350\,kg/cm^2}{2\ \ell/分} \fallingdotseq 13時間$$

○AMPタイプシリンダー

$$\frac{4.0\ \ell \times 200\,kg/cm^2}{2\ \ell/分} \fallingdotseq 6時間30分$$

4. あとがき

今回、3名の隊員が登頂できたのは、高所順応が成功したからに他ならない。しかし、その高所適応成功の要因として酸素使用の役割が大きかった事は誰もが認めるところである。中村隊員の痛ましい事故の原因に高度障害の影響があったか否かは、知るすべがない。しかし、ヒマラヤ登山に初めて参加した3隊員が登頂できたのは、高所順応に鍵が握られていたと思われる。もし、中村隊員の順化がうまく進んでいなければ、と考えることはナンセンスだとは思うが。

医　療

大城　泰、鈴木弘之

医療は次の事について対策を考えることとした。

1. 積極的対応－環境の変化、特に高所に対してどのように身体を慣らすか。
2. 予防的対応－病気や怪我をしないようにするにはどうしたらよいか。
3. 治療的対応－病気をしたり事故を起こしたりしたときにはどうするか。
4. 現地医療－キャラバン中の現地人からの治療の依頼をどうするか。

I. 出　発　ま　で

1. については低酸素、低気圧、低温、強風、強い紫外線、悪い生活環境におかれることになるので、そのような環境に慣れるように、積極的に心がけて準備をしていく。

準備段階において前回の経験を基に、心臓、肺を特に強くすることに目標を決めた。

○日常のトレーニングを第一に、各人のやり易いような方法を決めて実行する。

○全員がフルマラソンに参加する。また完走できるような体力づくりをしていく。

○富士山へ、最低六回は登頂する。

○できるだけ山行きをする。参加メンバーによる合宿と同時に、個人山行をなるべく多く行う。

○筑波大学の低圧実験室へ入り、低酸素の環境を経験する。

○準備会の席でヒマラヤの経験者の話を聴き、予備知識を得ておく。

○文献、記録を読み、高山病の症状について良く理解しておく。

○都岳連主催の、高所医学研究会に出席する。

2. については、前項 1. と共に

○日常の生活において心身の強化に努める。

○特に強い精神力、注意力を養うように普段の生活を心掛ける。

○できるだけ禁煙することにする。そのためには集会中は禁煙とした。また山行中、テント内は禁煙にする。

○前回の経験から、下痢をする者が多かったので、現地においては生水を絶対に飲まない。

○食事の内容と、特に不足が予想される、生野菜、ビタミン類の補給を考える。

○登山中の水分の補給を充分にする。

○健康診断を行い、事前に高所に適応できる身体であるかどうかを再確認し、不測の身体の異常を知っておく。診断の結果は幸い登山にさしつかえるような異常を持つものはいなかった。

○身体の具合の悪いところがある場合は、前もって治療を終らせておく。特に歯、痔、についての治療を終らせておく。

○普段の、体温・脈拍・血圧・呼吸数を計り、異常時との比較がわかるようにしておく。

○登山中には隊員の健康状態を常に把握できるようにして、病気や事故を未然に防ぐようにする。そのために、次のような『健康・行動の記録』を書き込む用紙を作り、この用紙を各人2部づつ用意しておき、内1部は隊員に予め配っておき、記入してもらう。医療係は隊員からの報告をもらうか、問いあわせ、その結果を聴いて自分のほうにも同様に記録し、隊長にも報告して次の行動予定の参考にする。

この表の作成について留意した点は、隊員のその日の行動と健康の状態が、一体となって一目でわかるように、また連日にわたっての前後の状況が、一覧できるようにしたことである。また具合の悪い時に、どのような処置をとったか、服用薬や手当てなども同時に書き込めるようにした。こ

れはいままでの他の報告を見ても、具合の悪い時の、処置や手当てについての記載が少ないのと、その経過がどのようになっていったかがわからないのを感じたからである。しかしこの表の書き込む欄が多すぎて、現実的には無理ではないかという声もあったが、筑波大学低圧実験室からの細かいデータの記録の要請もあり、『できる範囲』ということにした。

氏　名

『健康・行動の記録』

		例	月／日	月／日	月／日	月／日
時　刻	0 ～ 24h	7				
高度・Camp	m，C	C　3				
身体状況	くわしく	△ つかれがひどい				
故障・痛み（くわしく）	部位・状態	頭痛ややあり かぜぎみ				
睡　眠		○				
食　欲		○				
体　温　℃	朝寝たまま	37.5				
呼吸数　／分	異常は×	19				
脈　拍　／分	異常は×	79				
血　圧　高／低						
尿	回・量	6、○				
便　通	回・状態	1、○				
むくみ	額、脛、瞼	あり、まぶた				
息こらえ	分・秒					
服用薬	薬名・量	鎮痛剤　1				
ビタミン剤	服用は○	○				
手　当		休　養				
O_2　，ℓ／分	時～　時	21～6 睡眠				
行　動（パートナー）						
C　5						
C　4						
C　3		休　養				
C　2						
デポ　C						
C　1						
B　C						
休養　C						
キャラバン						

記入例、あり、なし　　最良◉　　良◎　　普通○　　やや悪△　　悪×

3. 医薬品、材料等の準備

登山隊に参加することになっていた、歯科医師の大城　泰が、出発直前の6月中旬にトレーニング山行中に、北穂高岳から下降中、涸沢において雪渓上を滑落し、右下腿骨折をしてしまい急に参加できなくなってしまった。そのために医療担当者がいなくなり、計画に支障をきたしてしまって、隊員の方々に大変申し訳ないことになり、この紙面をかりてお詫びする次第です。代わりの医師をさがしたが、急なことでもあり参加できるものがいないままに、已むを得ず出発することになった。このため医薬品等の準備や内容について、当初の予定を変更せざるを得なかった。

また学術調査の『食習慣、生活習慣の違いと、歯と顎の関係について。』も行うことが出来なくなってしまった。

この事故を起こした原因については、 2. にも関係することであるが、自己の体力以上に長時間にわたって行動を続けたことが疲労となり、ちょっとしたスリップが事故につながったのである。

また、他の隊員もマラソンなどのトレーニング中に、やりすぎて返って身体を傷めたり調子を崩したりして、合宿に参加できなくなった者もいたのは、方法と量についてもっと考えなければいけなかったことである。日常生活や勤務を読けながらのトレーニングは、時間的にも充分できず、出発をひかえての多忙や焦りから、どうしても無理をしがちで、できる時にという気持ちからもオーバーワークになるのを注意しなければならない。

医薬品、材料等の量と内容については、登山日数がBC以上で約60日、隊員数7、シェルパ5、往きのキャラバン約10日、帰りや滞在日数を考慮して次のように分けて梱包することにした。

個人常持品　7、BC用　1、下部キャンプ1、中部キャンプ用　1、上部キャンプ用　1、予備用（消耗品の補充）　1、キャラバン用　1、を用意した。

医療用、睡眠用としての酸素は、ボンベ22個、平均300気圧、平均4.3ℓ詰を用意した。

予算のこともあり、大部分の薬品を寄贈して頂けたことは幸いであった。

山岳部OBの岡村治明医師（春日部市民病院外科）、川久保芳彦医師（日本大学駿河台病院精神科）に種々、御援助、御助言を賜り深く感謝する次第です。

注意事項としては

(1) 必要な時に必要なものがある様に、常に持ち歩く。外傷は行動中に起こる事が多い。

(2) 身体の具合の悪いときは、なるべく早期に下部キャンプに降りる。

(3) 薬に頼らず、自然治癒を第一に心がけること。

なお薬名（商品名）については煩雑になるので、ほとんど省略する。

個人常持品

感冒薬：5日分、総合ビタミン剤40日分、胃腸薬：3日分、鎮痛解熱：10回分、複合トローチ：2日分、ハイシー：30日分、日焼け止めクリーム・リップクリーム、バンドエイド：大10　小5、弾性包帯：4裂1、体温計、その他持病薬　重量約0.3kg

以上をポリエチレン袋にそれぞれ分け入れ、さらに医薬品リストや使用上の注意書と共に、一つにまとめて各人に渡した。使用して足りなくなったものは予備用の箱から補充し、常に最低のものは持ち歩くようにした。

BC用

感冒薬：10日分、胃腸薬：20日分、下痢止：10日分、鎮痛解熱消炎：50回分、精神安定剤：20回分、抗生剤：16日分、複合トローチ：50錠、外用軟膏：2種4本、消毒薬：1、しっぷ薬：40g×5、総合ビタミン：80錠、ハイシー90錠、バンドエイド：大30　小80、絆創膏（5cm×5m）：1、脱脂綿：20g、包帯：4裂2、弾性包帯：4裂1・3裂2、三角巾：大1、滅菌ガーゼ（15×15cm）：30、ガーゼ5m、体温計：1、眼帯：1、爪切り：1、耳掻き：1、とげぬき：1、はさみ：1、ピンセット：1、安全ピン：5。　重量約2.1kg

以上を、それぞれポリエチレンの袋に分け入れてから、軟性プラスチックケースに詰め、ポリエチレンシートで包み、ひもでしばって輸送した。

予備、下部キャンプ用

BC用とほぼ内容は同じであるが、内服薬の各量を少しずつ減らし、利尿剤を加えた。

重量約1.5kg

中部キャンプ用

予備、下部キャンプ用とほぼ同じ内容であるが、内服薬を少し減らし外傷に対して包帯等を多くした。

重量約1.4kg

上部キャンプ用

中部キャンプ用の内服薬を減らし、外傷用の包帯等はそのままにした。

重量約0.7kg

キャラバン用

外傷用消毒薬、軟膏類、目薬、バンドエイド、包帯、胃腸薬、湿布薬、等を主にした。

重量約2kg

すべての内容品のリスト、薬名、使用量、注意事項を書いて、箱の蓋の内側に取れぬように張り付けて、誰でもわかるようにした。

医薬品類の総重量は、約10kgになった。

4. については、ポーター・シェルパ以外は、現地人からの治療の依頼があっても、積極的には行わないこととした。

Ⅱ. 出　発　後

① キャラバン中

キャラバン中は、あまり医薬品を使うことなく過ぎた。

○ポーター：切り傷に軟膏を塗ったり、バンドエイドを張る程度であった。休養キャンプからBCへの荷上げの時は、頭痛を訴える者が多く鎮痛剤（ボルタレン）を与え結構、効果があった。

○村人：医者がいないので最小限に抑えた。勝手にやるわけにはいかないのである。症状を聞いて、風邪の場合は、ビタミン剤・感冒薬・トローチ等。腹痛の場合は、胃腸薬（SM散）を与えた。ポーター同様、裸足のためか切り傷が多かった。また回虫がいる人も多かったがそのための薬はなかった。動けないから来てくれという人や、肛門が塞がった幼児もいたけれど何もしてやれなかった。医者が全くいない谷なので、遠征隊に医者がいればもう少し役に立ったのではないかと思うと残念である。村人達は衛生観念に乏しく、ネパールの医療事情はよくない。

② 登山中

使用頻度の高かったのは、胃腸薬・ビタミン剤である。岡田バラサーブは最後まで下痢が続いたし、胃腸を壊す隊員は多かった。胃腸薬（SM散）は殆ど使ってしまった。シェルパは隊員より胃腸も強かった。次にビタミン剤、BCでは多少野菜を食べることができたが、C1以上では全くないので意識して飲んでいた。一日一錠程である。

○鎮痛剤（ボルタレン）：頭痛等の高度障害の時。

○感冒薬・トローチ：乾いた空気のせいか、風邪をひいたり、喉を痛めるものがいた。

○軟膏・バンドエイド：手のひび割れなど。

○日焼け止めクリームやリップクリームは毎日丁寧につけていた。

○紫外線が強くサングラスをしていても、涙がこぼれることがあった。

○湿布薬も少しだが使った。

以上が今回使用したものである。もっとあればよかったと思うのは、抗生物質くらいだろうか、病気や大怪我がなかったのは幸いである。精神安定剤や利尿剤は使わなかった。また、当初に計画した「健康・行動の記録」は殆どできなかった。余裕がなかったのだと思う。

トレーニング

村　口　徳　行

ヒマルチュリ南稜から頂上へ向うルートは1981年の経験から、質的にかなり高いレベルの登攀を必要とされることがわかっていた。タクティクスにおいてもポイントとなる部分は、7,200m から始まる頂上岩壁の突破に焦点が絞られた。その中でも特に7,600mから先、未踏の岩壁部には相当の困難が予想された。1981年のチームは登攀力において今回のチームの上をいく。同じ条件で同じルートへ向えば結果は目に見えている。最高到達点まで行くことすらできないだろう。どうしたら私達の目指すルートが登れるのだろうか。私達は1981年の登山を徹底的に分析した。1981年のチームより実力をアップすることにより、ある程度の問題は解決されてゆく。高所経験者の少ない今回のチームで最も必要なものは7,000mラインに全員が確実に適応することだ。今回の登山は7,200mから始まるといっても過言ではないからだ。

体力が無ければどんなに登攀技術が勝れていても何の役にもたたない。7,200mから岩登りをすることは体力があっての話だ。むずかしい登攀をするためには、それに見合った体力が必要だ。

岡田隊長の指導でフルマラソンをひとつのステップとし、'85年から'86年にかけてトレーニングを開始する。前回のヒマルチュリ後、トレーニングを始め、フルマラソンにかけては、ベテランの岡田隊長と、ここ数年フルマラソンに熱中している鈴木が走ることの重要性を説明する。

いい事を考えても行動が伴わなければ意味がない。ちょっと油断をすると日常のトレーニングを怠ってしまう。普段怠け者の私達は、自ら強い目的意識を持たなければならなかった。

「トレーニングをしているか！」は隊員の挨拶だ。ヒマラヤへ行こうとする人間がトレーニングもしないで隊に参加するなど無責任としか言いようのない事だ。

'86年3月、筑波学園で開催されたフルマラソンに全員で参加する。タイムは悪い、怠けている証拠だ。さらに強化し、自己の能力を最大限引き出せるように調整していく必要がある。

4月からは月間200Kmを走ることを目標にする。またゆっくり長時間走る方法とは別に、最大努力の早い速度で頻繁にトレーニングを行なうことを始める。

最大酸素摂取量を現在よりも増加させるには、強度の刺激を呼吸循環器系に与え、その刺激のくり返しが運動に対する適応を引き越こし、呼吸循環器系の機能を改善して組織の酸素運搬能力を高める。

私達は準備の忙しさの間をぬって走った。今回ヒマルチュリを目指した隊員は良く走った。その結果が順化への基礎となり、7,200mからの登攀活動が可能となった。

もう一つのトレーニングは山行だ。全員がトップで確実に登れる力が必要だ。全員が揃って山やゲレンデへ何度も通えれば一番良いのかもしれないが、社会人となって全員が揃って山に入れるわけがなかった。それぞれに制約がある。個人的な山行を充実させることにする。その中でも5月は比較的休みもとれるため、剣岳で定着山行を行なった。5月3日、中村・松野は六峰フェースから剣岳を越えて剣沢ベースへ。村口・大城は六峰フェースから八ッ峰ノ頭を通り長次郎谷を下降して剣沢ベースへ。石川・井本はⅠ・Ⅱのコルから八ッ峰を縦走し、剣岳を越えてベースへ帰る。翌日、中村・大城は、前剣東尾根～剣岳。村口・古野・向笠は、八ッ峰マイナーピークからⅠ・Ⅱのコルを経由してベースへ。石川・井本は、剣尾根を登るためにベースを移動する。5月6日、石川・井本は剣尾根主稜を登攀。

6月には、学生の初夏合宿に合わせて横尾をベースキャンプに屏風岩での登攀を行なった。6月12日、村口、井本は、東壁雲稜ルート。13日、同パーティーで右岩壁ダイレクト。13日、古野、石川は東壁東稜ルート。鈴木は単独で奥穂高を往復。15日、村口、鈴木、石川は右岩壁ルンゼ状スラブ、古野、井本は右岩壁大ジェードルルートを登り、それぞれ岩登りを楽しんだ。

その間にも、岡田、中村を中心に、富士山へ通った。ゲレンデは1ヶ月1,000m以上の登下降を目指した。こう書くと無味乾燥のように思えるが、山登りの楽しさを常に求めていた。山行は、登攀の楽しさ、生活の楽しさ、みずみずしい感動を受けながらトレーニングを楽しんだのである。もともと山登りはおもしろいから登る。何のためでもなく自分自身のために登るのだ。その延長線上にヒマルチュリがある。人それぞれに山登りの楽しみ方は違うが、もともと面白いからそこへ行く。

今回、トレーニングを振り返ってみると、チームのレベルアップという総合的な見方からすれば体力はかなりついたように思える。しかし登攀力がついたとは思えない。合宿と称して冬期の困難な登攀や、ルート開拓をしたわけではないからだ。その変わりに岩に慣れることと、確実に登ることを身につけた。うまくはないが、そこそこの岩壁は乗り越すことの可能なチームとなったはずだ。

「最高の登攀をするために最大の努力をしようじゃないか、来たるべき登攀に向けて」とトレーニングノートの初めに書いた。それぞれが頂上を目指し、そのためにトレーニングに励んだ。『努力しなければ登れないな』とヒマルチュリの写真を見るたびにそう思うのだった。

それでも私達のしてきたトレーニングはまだまだ甘かった。ヒルマチュリを南稜から登るには、もっとハードなトレーニングが必要だったのだろう。少なからずも事故を起こしてしまったのだから。そして全員が頂上に到達したわけでもなかったのだから。

ヒマルチュリ南西壁高度約7,000m上空より

日本大学ヒマルチュリ登山隊1986隊員への高所順応トレーニングの経緯

筑波大学体育科学系運動生理学研究室　浅　野　勝　己

― はじめに ―

昭和61年4月末に、故中村日出氏、井本重喜氏および石川一郎氏が来学され、8月上旬出発に先がけての低圧シュミレーターによる高所順応トレーニングの依頼を受けたのである。

そこで5月17日より7月6日にわたり、4,000mから6,500m 相当高度におよぶ計8回の、無酸素での順応トレーニングを行うことができた。

ここに故中村日出隊員のご冥福を祈りつつ、当時のトレーニング内容を回顧し、本高所順応トレーニングが高所障害予防の一助となる可能性を指摘したい。

― トレーニングの経緯 ―

第1回目の5月17日は、中村・井本・石川・古野および鈴木の5人の隊員で、身体計測の後に4,500m 相当高度で30分間の自転車ペダリング運動を行った。各隊員とも1.5kgで毎分50回転で運動を開始したが、中村・井本・石川の3隊員は20回目より2.0kgに負荷を上げ、30分目では心拍数は約170拍／分にまで高進した。

中村隊員はやや肥満傾向を示してはいるが、心電図などの所見では全く正常であり、4,500m 高度での無酸素で130～170拍／分の心拍水準に達していることは低圧耐性を向上し得る能力を保有されていたと考えられる。

第2回目の5月24日は、井本・石川および鈴木の3隊員で、6,000m 相当高度での20分間の1.0kg負荷のペダリングを行った。無酸素で130～160拍／分の心拍数の高進を示した。

第3回目の6月7日は、中村・井本および石川の3隊員で、6,000m 相当高度で30分間のペダリングを行った。中村隊員は1.0kg、井本および石川両隊員は1.5kgで運動を開始した。井本隊員は、1.5kgで30分間継続し、しかも心拍数は、155～157拍／分の水準を保持したが、石川隊員は運動開始後15分目で175拍／分まで上昇し不調を訴えた為に、1.0kgへ低減し30分目には157拍／分を示している。

一方中村隊員は、1.0kgで30分間持続され137拍／分より147拍／分まで次第に心拍を高進され、6,000m 高度での無酸素運動を初体験されたわけである。この時の主観的運動強度（RPE）も13～14を示され「ややきつい」程度であった。

井本隊員は1.5kgで常に13～14のRPEであったが、石川隊員は1.5kgで15～20分目には、15～

―― 当時の身体測定値 ――

氏　　名	年齢(才)	身 長(cm)	体 重(kg)	＜皮下脂肪厚＞	
				上腕背部(mm)	肩甲骨背部(mm)
中村日出	31	163.5	62.0	11.0	13.0
井本重喜	23	174.0	68.0	7.0	11.0
石川一郎	24	170.0	62.0	7.5	7.5
古野　淳	25	174.0	67.0	9.5	7.5
鈴木弘之	29	175.0	69.0	7.0	7.5

17の「かなりきつい」RPEを示していた。

第4回目の6月21日は、井本および石川の両隊員で、6,000m高度で30分間のペダリングを行った。井本隊員は1.75kg、石川隊員は1.5kgの負荷であった。井本隊員は30分間の運動中心拍数は132～143拍／分のほぼ一定値を示し、RPEも14～16の「きつい」の心理的状況であったが、石川隊員は20分目あたりで頭がボーっとする感じを訴え、16のRPEを示し、心拍数は153拍／分に高進している。

第5回目の6月22日は、古野隊員が5,500mで30分間のペダリングを実施している。1.5kg負荷であったが、145～175拍／分まで心拍高進を示しRPE：18「非常にきつい」に達し、頭部のボーっとする感じを強く訴えている。

第6回目の6月28日は、石川・鈴木の両隊員が、6,500m高度で30分間ペダリングした。石川隊員は1.0kg、鈴木隊員は0.5kgで実施した。石川隊員は165～186拍／分と運動継続に伴い心拍高進し、RPE：18に達している。しかし30分間持続し得たことは、今迄の順応トレーニングが低圧耐性を高めていることを示唆している。一方、鈴木隊員は0.5kgで30分間持続し、98拍／分、RPE：12を示し、軽負荷ながら低圧順応を獲得していることがわかる。

第7回目の7月5日は、井本・石川の両隊員は6,500m、中村・鈴木の両隊員は6,000mで各30分間ペダリングを行った。井本隊員は1.0kg、石川隊員は0.7kgで毎分50回転のペダリングを実施した。井本隊員は147～154拍／分を示し、RPE：14～15と、比較的軽い運動に順応して来ている。石川隊員も0.7kgながら135拍／分前後でRPE：12と楽な運動と知覚している。

両隊員とも、この数回のトレーニングにより低圧耐性の明らかな向上を示している。

中村・鈴木の両隊員は、6,000mでの30分間ペダリングで共に168拍／分（RPE：15）を示し、低圧耐性の向上傾向が示唆された。

第8回目の7月6日には、古野隊員が6,000mで40分間のペダリングに挑戦している。1.5kgで40分間持続し、135～156拍／分の軽度の心拍高進を示し、RPEは13～15の範囲であり、6月22日の初回の反応（145～175拍／分、RPE：18）に比較して明らかな順応を示している。

以上8回にわたる日大ヒマルチュリ登山隊員への高所順応トレーニングから、数回の30分間前後の低圧環境でのペダリング運動により、低圧耐性を向上する可能性が示唆される。とくに井本隊員の低圧耐性は、優れた反応を示しており、また石川・中村・鈴木さらに古野の各隊員も明らかな低圧耐性向上の傾向を示唆している。

さてヒマルチュリ登山時の生理応答を、帰還後拝聴すると、井本隊員は10月26日、C5を午前7時出発し、午後5時20分頂上に達し20分滞在後下山開始し、午後9時50分にC5に帰還され、この間、高山病症状はなく、また全般の登山活動を通しても問題はなかったとのことであった。一方、石川隊員は、C1で軽い頭痛、C3で浮腫、C5の上部7,750mで嘔吐を経験されているが、さほど重篤な症状ではなかったとのことである。

井本隊員の高山病症状の訴えがなかった点は、本高所順応トレーニング中の生理的、心理的応答とよく符号するものである。

それにつけても井本隊員と共に、頂上を極められた中村隊員が、下山中滑落され不帰の人となってしまったことは、誠に残念のきわみである。

頂上アタック出発時期を可及的に早朝にし、下山時刻を早めること、さらに疲労蓄積を極力避けることなど、人間の生理的心理的限界以内での登山行動に留意され、今後二度と悲劇を起さぬよう努めることが故中村隊員のご遺志に報いる道ではないかと思われる。

ここに高所順応トレーニングの経緯とその効果およびその必要性を指摘すると共に、故中村日出隊員の御冥福を心よりお祈りする次第である。

合掌

（昭和62年3月10日）

学　術

ネパールの教育事情

鈴　木　弘　之

鶴見良行氏は「田舎を歩きまわらないと、アジアのことはわからない」と言っている。私はこの意見に共鳴し、カトマンズの学校を見学するよりもキャラバンをし、ヒマラヤの麓の村、つまり、ネパールの典型的な村に滞在した方がネパールのことが理解できるだろうと思っていた。「神は細部に宿り給う」という格言もあるくらいである。

また教育の問題を学校教育だけに限るのではなく、生活を共にすることにより、家庭教育や社会教育も合せて見てみようと計画していた。場所はヒマルチュリの麓、タジェかシミ、あるいはラブシボットを予定した。

しかし、残念なことに遭難事故の発生によって、これらの計画は断念せざるを得なかった。そこで以下の報告は、文献、キャラバン中の見聞、ネパール人へのインタビューなどを基にして行ったものである。

1.　成長期（1951～71年）

1951年の開国当時の小学校就学率が1％に達してないことからもわかるように、1951年以前の教育はごく一部の者に限られていた。この点は寺子屋などによって開国以前に国民の多くが読み書きができた日本とはかなり事情が異なる。見るべきものとしては、ブラーマン、チェットリー・カーストの上層部を中核とする、支配階層再生産のための高等教育機関の整備であろう。

1951年2月18日、トリブバン国王による新政体が発足し、国民には政治的、社会的、経済的な権利が与えられ教育も国民の権利として認められた。

1962年－新憲法26条における教育の法的裏付け

26条－1　何人も教育を受ける権利を持つ。少なくとも小学校やその他基礎的段階においては教育は無償でなされるべきである。小学校教育は義務とし技術的専門的教育は容易になされ、高等教育も平等に機会が与えられるべきである。

26条－2　教育は人格の伸長と基本的人権の尊重を目指すものであり、すべての国家、人種、宗教間に寛容と友情と理解を促進し、平和維持をめざす国家を建設する。

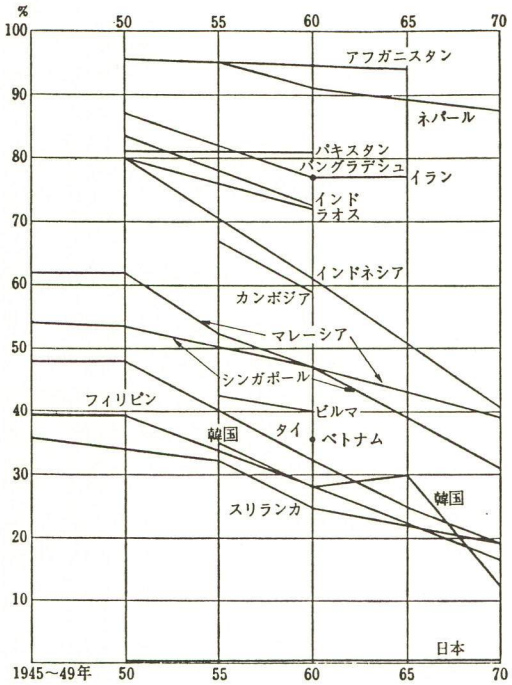
歴代の政府も、諸外国の援助も、近代国家形成の基盤を作るものとして、教育に力を注いだ。民間においても、最初はまず都市近郊の村が、次いで地方の村々が、有力者に呼びかけたり、国に陳情したりして、競って自分達の力で学校の建物を建てては、文部省所轄の機関とし、教師の赴任を仰ぎ、各集落の誇りとした。国全体に夢があり、希望があった。

こうした努力の結果としての開国後の20年間における教育の普及は著しい。小学校の数は20倍になり、就学児童数は9000から45万に伸び、就学年齢人口の32％に及んだ。中学校の数は100倍、生徒数も1680人から10万人を越えた。文盲率もわずかながら低下しており、90％を切っている。アフガニスタンと並んでかなりの高率であることには変わりはないが、一応の進歩と言える。（アジアの統計は、教育の場合もきわめて信頼性に乏しい。ネパールも同様で、戸籍の整備も始まったばかり、正確な人口すらわかっていない状況にある。）

しかし、他の途上国同様、ネパールも教育の急激な膨張のうらには様々な問題を積み残す。

その第一は、初等教育における落伍率の異常に高いことである。第二は、就学中の女子の比率の著しく低いことである。1978年の小学校男女比は、男76.5％、女23.5％となっている。第三は、正規の訓練を受けた教員が余りに少なく、また教材、教育内容の貧困も著しかった。第四に、職業

表 1.　アジアにおける文盲率の推移



教育の無視がある。第五は、初等中等教育に比べて、大学教育が過度に肥大していたことである。

2.　反省期（1971～1983年）

1971年、以上の反省をふまえて、「新教育計画（通称NESP）」が実施された。その骨子は次の如くである。第一、教育制度を複線化し、各段階に応じて就職を容易にする。第二、初等中学ならびに、高等中学に職業教育を導入する。政府は新教育計画の遂行に非常な力を注いだが、それにつれて幾つかの問題点もあらわになってきた。最大の問題は、職業教育こそ新教育計画の目玉であったのだが、卒業後、学校で習った技術を生かすべき雇用の機会が乏しかったため、計画倒れとならざるをえなかったことにある。

3.　現状（1983年～）

1983年には、この様な「新教育計画」の反省の上に立ち、更に新しいカリキュラムが実施された。この枠組みは1986年現在において表3に示す

表 2.　学校教育の発達

		1951*	1961*	1970*	1975**	1980	1983
小学校	学校数	321	4,001	7,256	8,314	10,130	10,912(1982)
	生徒数	8,505	182,533	449,141	458,516	1,607,912	2,145,000
	教師数	—	—	18,250	18,874	27,805	53,919
	就学率(%)	0.9	15.8	32	43.2		
初等中学校	学校数	11	156	1,065	1,893	3,501	
	生徒数	1,680	21,115	102,704	174,143	391,427	199,678(1982)
	教師数	—	—	5,407	6,496	11,693	10,820(1982)
	小学校からの進学率(%)	19	12	23	37.9		
高等中学校	学校数	2	33	49	479	785	918(1981)
	生徒数	250	5,143	17,200	67,214	121,007	198,000
	教師数	—	417	1,070	3,451	4,683	5,764
	初等中学校からの進学率(%)	20.5	24.4	16.0	38.6		

					1975	1982	1983
大学	学生数				20,658	47,882	34,558
	大学院生数				801	3,474	17,512

*　Ministy of Education, *National Education System Plan for 1971～76*, 1971.

**　Kasaju, P. & Pradhan, G. S., *Education and Development*, 1979.

無印　Majupuria, T.C. & Majupuria, I., Youth of Nepal, 1985.

通りである。小学校児童数は、1970年には約45万人であったが、1983年には215万人に増加した。政府も小学校教育を奨励し、義務教育化への道は、遅いながらも辿っているようである。たとえば、小学校（１～５年）は、授業料無料。そして１～３年は、教科書貸与。

新教育改革の時は職業教育に重点が置かれたが、今はそれ程でもない。高等中学校最後の年にＳＬＣ（School Leaving Certificate）＝全国統一高校卒業試験を受けるが、これは多くの若者にとって出世街道へのふるいわけの第一関門である。たとえばＳＬＣにおいて上位成績をえられないものは、理科系への進学を断念せざるをえない。

○ＳＬＣについて（本田ひろみ氏の報告より）

ネパールの高校生の最大の悩みは、ＳＬＣにパスすること。高校卒業後約２～３カ月で、全国一斉に都にいくつかの会場を設け、ＳＬＣの試験が約２週間にわたり行なわれる（一日一科目）。これは、競争試験ではなく、資格試験。各教科32％以上の得点であったら合格。一科目でも落とすと不合格。翌年また、その科目を受けなければならない。合格率は芳しくなく、40～50％前後である。問題がそんなに難しいのかというと、数学に関しては、殆ど教科書の練習問題や例題・定理で、教育課程もほぼ日本の教育課程と同じレベルである。最終学年の10年生は、日本の高一にあたるが、高一までの内容はだいたい網羅している。けれども、全体的に学力は低い傾向にある。

理由として、①教師不足、授業時数不足（教師側・生徒側のストや、ネパールの慣習等による休みが多い。一年の半分以上が休み。）のため、各学年で、教科書をまともに終えずに進級している。
②生徒も貴重な労働力のため、家庭学習ができず、ドリル不足。
③教科書を手に入れにくい。教科書の編成が系統的でない。
等が考えられる。

全国一斉の統一試験のため、自分が全国で何番かも分り、もちろん一番はどこの学校で、誰かも分かる。平均点が60点以上をfirst division、59点から45点をsecond divisionと分ける。生徒は自分の行きたいキャンパスに申し込みを出し、キャンパスは定員やＳＬＣの結果を考慮して、入学者を決定する。

○キャンパスへ

ＳＬＣの結果で、行けるキャンパスが決ってくるため、成績もよく、経済的にもゆとりのある生徒は、卒業後、ＳＬＣの試験までの間、カトマンズの補習校で受験勉強をする。

生徒たちの第一志望は、サイエンスかエンジニアコースの理工系で、医系への登龍門でもある。特にサイエンスコースは、外国への奨学金による

表3. ネパールの教育制度（1986年現在）

学　校	通　年	科　目	就学率
小学校	1～5年生 （6～10才）	国語、算数、社会、理科、体育、図画工作。 4年から古文（サンスクリット）と英語。	子供全体の64％
中学校 （初等中学校）	6～7年生 （11・12才）	国語、英語、保健、算数、古文（サンスクリット）、理科、社会、道徳、職業。	小学校からの 進学率　50％
高校 （高等中学校）	8～10年生 （13.14.15才）	国語、英語、数学は必修。 社会、科学、外国語、商業、芸術、古文（サンスクリット）、保健、家庭科より2科目を選択。職業教育1科目。	中学校からの 進学率　40％

〔授業時間〕　10時～16時45分授業／日曜～金曜、（金）は半日／土曜（全休）
初等教育；小学校、中等教育；中学校・高校、高等教育；大学・大学院

留学のチャンスが多いらしい。

初めの二年間のキャンパスは、日本で言えば教養課程のようなものであろうか。その後、再び二年間キャンパスに行く。初めの二年間と、次の二年間との間に、現場での経験が必要なコースもあるようだ。コースにより、年限や、経験年数の必要性も様々のようである。その後、ネパールで唯一のユニバーシティ・トリブバン大学に進学できるらしい。大学には、社会学、理学、経済学、国文学、医学、工学、農学、林学、教育学、法学の10学部がある。以前は「カレジ」と呼ばれ、今は「キャンパス」となっているものを含む大学関係施設は1983年現在103あるが、そのうち65は、直接国立トリブバン大学の傘下にあり、残りの38は私立である。

○留学

医師や司書など諸々の学位や資格は、ネパールではとれないため外国に留学しなくてはならない。インドが最も多く、イギリスやソビエト、アメリカ、フランスと各国の授助であちこちに留学している。1973年の場合、インドへ1105人(82.5%)、アメリカ84人(6.8%)、イギリス57人(4.6%)、西ドイツ13人(1.1%)、日本12人(1.0%)合計1230人となっている。裕福な人は、小中学生の頃からインドの全寮制の私立の学校へ出している。余談になるが、OBの青木重雄氏はユニークな教育をされていて、娘さんを中学卒業と同時にカトマンズのアメリカンスクールへ。ここで一年間勉強した後、インドのウッタルプラデシュにある英国系のウッドストックスクールに転じて同校を卒業した。さらにアメリカ・カルフォルニア州のオクシデンタル・カレッジへと進み、南カリフォルニア大学を卒業している。

ネパール山間部の子供たち

ネパール人の夢は、外国で生活すること(ネパールではどんなに地位がありお金があっても、先進国のような文化生活は味わえない)。そのためにも、外国留学は、高い地位を目指す人達の切符のようなものである。

○貧富の差

カトマンズに、ブタニールカンタといって、王様の子供もいる全寮制のモデル校のような学校がある。殆どが、お金もあり、頭脳も優秀な生徒達だ。SLCの合格率は100%、しかもfirst divisionが60%以上、残りが、second divisionでthird divisionは無し、という結果である。高い授業料を払い、一日中英語をしゃべり、夜は家庭教師に学び、外国に留学し、将来のエリート高官をめざし、ひたすら勉強に励んでいるのだ。

私が会ったビノットシュレスタ氏は、現在IBMに勤めコンピューター関係の研究に取り組んでいる。カトマンズの小中高一環の私立高校Adarsha Vidya Mandir(サンスクリット語で、一番優れている教育の家という意味)を卒業した。英語の教科書を使い、英語で授業を受けてきたという。これもブタニールカンタと同様、エリート作りのための学校である。シュレスタ氏はその後、アムリット大(Amrit Univ.)理工学部に2年生まで学んだ後、ネパール政府の留学生となり、電気通信大学で4年、東大の大学院で5年勉強を続けた。IBMに入社して一年目ということだ。外国に行かないと専門的な勉強はできないとも言っていた。シュレスタ氏の流暢な日本語を聞いていると、キャラバンの途中で見た農民の姿とのあまりの違いに驚きを禁じえなかった。

一方には、貧しさのため、まったく学校へ行けず、明日の糧を得るため、一生懸命働いている子がいる。我々の登山隊にも13〜14才の子供がポー

タジェの小学校での朝礼風景

ターとして参加していた。30キロの荷物をかつぎ毎日がんばっていた。先生がいなかったから、前学年の分はほとんど習わないまま進級してきた生徒もいる。まさに、草の根の人々（ネパールの多くの人々）にまで、行政の手がのびず、貧富の差の大きい発展途上国の縮図をそのまま見るような感じがする。

4. 問題点

① 卒業生の雇用の機会に乏しいこと

農業以外の産業に乏しいネパールは、教育を受けた若者に雇用の機会を提供することが難しい。我々の遠征隊にも、キッチンスタッフやメイルランナーとして字も読め能力のありそうな若者が参加していた。もったいない気がしたものである。教育の普及によって学生数は増大したが、卒業者数の増大が失業者の増加をもたらし、社会不安を増大させている。

② カトマンズと地方の間の較差の増大

都市の近代化が進めば進む程、交通に必要な時間のみならず、教授陣容、教育内容、両親等周囲の者の教育への熱意、カースト制の強さ、情報量の多寡など、首都と地方との教育環境の較差が拡大していく。

③ 就学後の落伍者の増大

キャラバンの途中、子供達が家畜の世話、水汲み、薪集めなどをしている姿をよく見掛けた。農村では、子供であっても欠くことのできない重要な労働力である。したがって、5才・6才の頃は「流行」としての通学を許してみても、いつまでも「遊ばせて」おける程、余裕のある家庭は少ない。わけても女子の場合は、「勉強して何になるのか」と考えられる傾向にある。

④ 教育者の不在

教育学部等で訓練を受けたプロとしての教師の数が絶対的に不足している。高卒で小学校教諭。SLCにパスしたら中学校教諭。キャンパスに二年以上行くと高校教諭。教員養成所を出て、経験を何年か積むと校長になれる。年功序列ではなく、学歴主義である。

けれども、教員の地位は低く公務員化されていないため、給料は少なく、諸々の保障制度も確立されていない。そのため教師にはなりたがらず、他の仕事が見付かるまでの腰掛け程度の人が多い。特に、食べ物に不自由する山間部にはなお行きたがらず、政府は各国の援助にすがる。日本の青年海外協力隊も昭和61年現在20人程の理数科教師を派遣している。

特に英語や理科関係の得意な生徒は、他にいい仕事があるので、なお教師になりたがらない。都市部には優秀な教師も多くいるようだが、山間部では教師の能力も低い。

⑤　学校間較差の増大

最近の風潮として、特にカトマンズでは私立学校の増加が目覚しい。経済的に余裕のある階層の子供達を対象にした新しいエリート作りのための学校が続々と建てられている。これらの学校は授業内容において、多くの努力が注がれており、公立学校との較差は広がる一方である。

⑥　頭脳流出

両親が経済的に豊かな者か、とび抜けて優秀な者は、奨学金等を手にして、高等教育を受けるため外国へ留学する。彼等は、無事に医師や技術者の資格をとっても、母国においてはそれを有効に活かす場が極めて乏しいので、帰るに帰れず、そのまま異国に住み着いてしまう場合も少なくない。

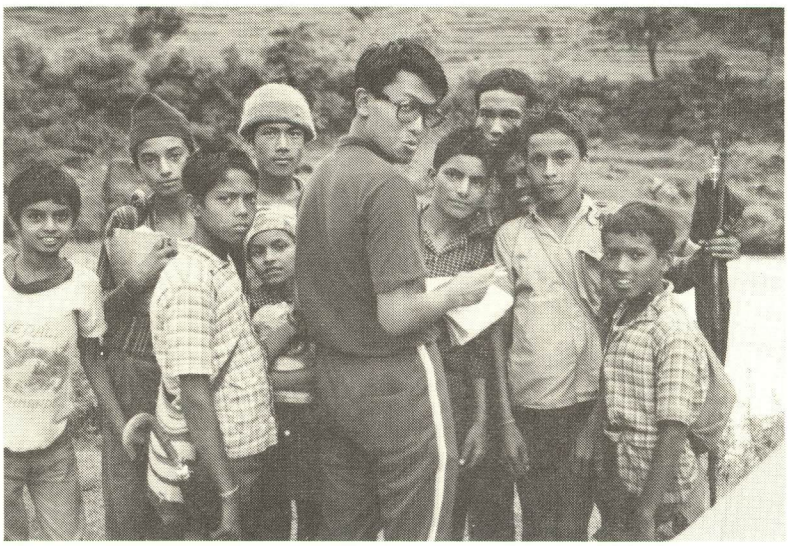
シュレスタ氏も、ネパールでは自分のやりたい研究、仕事ができない。国へ帰って仕事がないより、外国にいて自分のやりたい仕事をした方がよいと言っていた。

5.　今後の方向性

国民の90％以上が今だに原始的な農業に従事している以上、農業の生産性を高めることがネパール発展の鍵となるのではないだろうか。ネパールにあった教育を行う。文盲率を減らすため小学校教育を充実させる。勉強すればそれだけ報いられるような社会の基盤整備もあわせてやっていく必要があるだろう。社会の変革なしに、教育のみが前進することはあり得ないが、教育なくして社会の変革もない。近代化の機関車として着実な前進を期待したい。

＜参考文献＞

- 「ネパールの教育事情」　山内ゆかり・高屋弘子（シンポジウムネパール、第1回ネパール研究学会1973年）
- 「ネパールの学校教育」　高橋定昌（シンポジウムネパール、第4回ネパール研究学会1975年）
- 「アジアの教育」　豊田俊雄著　アジア経済研究所1978年
- クロスロード3月号、1984年　本田ひろみ「ドラカ村から受験をみれば」
- 「もっと知りたいネパール」1986年の「近代学校教育」　伊藤邦幸・入江拓
- 「730日の青春・ネパール」　小松征司1986年　三修社



宿題を教える石川隊員

ヒマルチュリを終えて

ヒマラヤへ

石　川　一　郎

“ヒマラヤ”それは、彼が登山、いや登山とも呼べない日帰りのハイキングを始めた12才頃から漠然とではあるが、頭の中に芽生えていた言葉であった。

“ヒマラヤ”それは、彼にとって夢であり、憧憬であった。その頃の彼には、ヒマラヤへ行けるとは思ってもみなかった。ヒマラヤとは簡単に行ける所とは思っていなかったし、そこへ行けるのは、選ばれた少数の人間のみであって、自分には無理だ、自分には関係することのできない世界なのだ、という消極的な諦めにも似たものを胸に抱いていた。ましてハイキングを楽しむ日々がヒマラヤへと通じるなどとは思いもよらず（結果としてはヒマラヤへ行くキッカケには、なっていた様だが……）夢と現実との間をフラフラとしていた。そんなことを感じながら、18才頃まで日帰り、1～2泊の山行を続けていた。そしてヒマラヤも忘れかけていた。

そんな彼が、もしかしたらヒマラヤに行けるのではないか、行動すればヒマラヤに行くことができる。と思い始める様になったのは、彼が大学で山岳部に入った頃であった。

その頃、山岳部では、ヒマラヤ＝ヒマルチュリ遠征に向けての準備に入っており、現役部員2名も参加することになっていた。その手伝いも何回か行なった。このことが、影響を与え、“もしかしたら”が“行くことができる”という思いを、彼の胸に起こさせた。

山岳部にいる彼にとっては、つらく苦しい事も多かった。何度もやめようと思ったが、しだいに山へのめり込み、続ければヒマラヤへの道も開けるのではないかという期待もあって、最終的にはやめることはできなかった。

しかしそのチャンスは、割合早くやってきた。彼が入った頃に遠征したヒマルチュリに再度、挑戦しようという計画だ。しかも前回と同じ未踏のルートからだ。

1986年、彼の漠然としたヒマラヤへの夢は、ここにヒマルチュリとして現実のものとなる。

準備から出発へと忙しく過し、とうとう出発の日を迎える。“はじめてのヒマラヤ”技術、体力、高度など不安も多かったが、8月9日、成田を飛びたった。海外へ出るのも初めてなら、飛行機に乗るのも初めてだった。最近、飛行機の墜落なんて事もあったし、ネパールに、ヒマラヤに着く前にそんな事になったら…などと変なことも考えていた。カトマンズ入りした彼は、少々緊張していたが、そんな彼をリラックスさせたのは、隊にとっては不都合きわまりない事だが隊荷の遅れだったらしい。その間、彼はカトマンズをあちこち見てまわった。それが良かったらしい。

初めてのヒマラヤ＝ヒマルチュリへのキャラバンは想像以上に楽しいものであった。

雨に降られることも多かったし、ズカにも食われるし、ジメジメとした感じの中ではあったが、その空気、その景色、そこでの人々、すべてがヒマラヤへと続く道であると感じる事ができたからだろうか、いままで想像していたものがそこにあったという喜びだったろうか!!そして初めてヒマルチュリが顔を見せた時には、それ以上の感概、言葉では表わせないが、「ああ、ついにここまで来たんだ」という様なものがそこにあった。

キャラバンを終えてのBCへの順化に苦しんだこともあったが、いよいよ登山活動に入る。太陽、氷河、雪、岩、ナイフリッジ、ラッセル、その一部分をとれば、日本での登山とそう違わないという感じ、しかし日本とは比べものにはならないその雄大さ、その全てが新鮮で、ウキウキとした感じ、何をしても今、自分はヒマラヤにいるのだという実感。

工作、キャンプ設営、荷上げ、最終段階での頂上岩壁の工作、10月26日の彼自身の登頂断念、そしてC3への下降、隊員3名とシェルパ1名の登頂、アタック隊との連絡がつかない緊迫した寝れぬ夜、そして事故、良き先輩一仲間を失ったという何か実感として湧いてこない当惑した悲しみ。これも彼にとっては、初めての経験である。

そして再びキャラバン。カトマンズへ、そして日本への…、"ヒマルチュリ"を＝"ヒマラヤ"を振り返りつつ下る。「終った」、「終ってしまった」という感情。彼自身が登頂できなかったくやしさ、先輩を失った悲しみ、などの感情の一方、ヒマルチュリ、ヒマラヤへ登ったのだ、自分は精一杯やったのだといったある種の満足感の様なものもあり、何かこう判然としない感情の交りあった感のキャラバンだった。

今、ひとつのヒマラヤ～ヒマルチュリ～が終った。これから先、"次のヒマラヤ"があるかどうか彼自身にも、はっきりとはわからない。ただ彼には、再度ヒマラヤへ行きたいと思う気持ちがある。初めてのヒマラヤで、やり残してしまった事がいくつかあるような気がするからだろうか…。

今、冷静さをとりもどした彼は、「再びヒマラヤでの登山を」という夢を持ち始めているらしい。それは少年の頃の彼の様に、もはや漠然としたものではなくなっている。

回　想

井本重喜

いくつもの場面を積み重ねて、2ヶ月に渡り、ヒマルチュリ峰で展開されたドラマの幕は降りた。

数えきれない程の場面を見てきた。しかしその殆んどは消え去り、ある限られた場面のみが、私の記憶の中に残っている。さらにその場面は、私が忘れ去ろうとしても、決して忘れられるものではない。

私は、ヒマルチュリの頂に立った。誰もがそのチャンスを持っていた中で、私はたまたま、頂上に至ったと言うにすぎない。しかし私が頂上に立っている写真は無い。私のパートナーの姿も無い。忘れてはいけない事は、誰にでもあると思う。私には忘れられない。忘れてはいけない。

頂上で交した握手と、抱き合った肩、カメラを通して私の眼に残るパートナーの登頂の姿、烈風にさらされた笑顔。最後に聞いた、「井本」という呼び声。

私は最終キャンプにたどり着いた。午後の9時50分、月の光も無く、真っ暗だった。遅れて帰ってくるものだと信じていた。ロウソクの炎を灯し続け、暖かいジュースを用意していた。時間は過ぎてゆく。私には登り返す力が無かった。本当に疲れきっていた。時間は過ぎる。朝まで灯りはたやさずに待ち続けた。空が明るくなる。その時、私はすべてに祈っていた。信じなかった。「ダイ！」。平然と言うシェルパの顔を見れない。私は祈っていた。

涙が出て来た。悲しくてこらえられなかった。涙がどんどん出て来る。信じられない。祈った。昨日の事を想い返した。そしてまた涙が出た。

想いは、めぐる。いくつもの場面があって、ヒマルチュリは終った。ある限られた場面が鮮明に残る私にとって、その場面は何度も何度も回想され、時が過ぎてゆく。

机の上に小さな仏像がある。カトマンズで買った物で安い。私は、本来このような物を持ち歩く人ではなかった。ただいくら小さくても、安物でも、捨てたり置き去りにする訳にはいかない。なぜならばこの仏像が、パートナーと、あの場面の記憶であるから。

想いはめぐる。忘れ去る事のできない場面は、何度も何度も回想され、忘れ去れないままに、時は過ぎてゆく。

1987年4月

今思うこと

鈴木　弘之

森村誠一の「青春の証明」という本にこのような一文がある。「青春の証明とは、自分の生命力の燃焼の最もさかんな時に何を為そうとしたかを証明することである。」と。

学生時代、山岳部へ入り、趣味として山へ登った。卒業後も細々と登り続けてきた。私はただ単純に大きな山に登りたかった。富士山よりも高く、できれば世界の屋根とも言われるヒマラヤの高峰7,000 m～8,000 m級の山へ登ってみたかった。それも若い間にだ。そしてヒマルチュリがあった。とにかく行こうと思ったし、いろいろな人達にささえられて参加することができた。感謝している。

私自身の戦いは7,740で終った。あと少しがんばっていれば登れたのに、と、くやしい気持ちだが、あれが限界だった。10月25日の判断、10月26日行動、これは29年間生きてきた自分が決めたことだ。決して後悔はしていない。

いろいろな事が思い出される。夕焼けに輝くヒマルチュリ、C4まで登ってやっと見ることができたチベット高原、昔の日本を感じさせるキャラバン、階段上に広がる水田、マカイの畑、わらぶきの家々、ヒマラヤの高峰達、とにかくこの遠征に参加できて幸福だった。

ヒマラヤへ行くチャンスがあと何回あるだろうか。今は、日常生活の中に次なるヒマルチュリを求めそれに向ってはりきって生活していこうという気持ちだ。一日一日が充実していればもうこれ以上言うことはない。課題を求めるにしても、いろいろ浮かんでくるが、何でもいいように思う。山の方はこれからもボソボソとずっと登り続けるつもりだ。やりたいことはかなりやったなあと言えるような生活をしたいものだ。

力の限りを尽して

古野　淳

この遠征は僕にとって2度目のネパールヒマラヤである。1984年、JACカンチェンジュンガ隊報道のアルバイトとして参加した。今後のステップとも思い、意気揚る思いで出発したが、実際には煮え切れず、歯痒い思いのみが残り、後悔の念が尽きなかった。ステップというよりは、その思いが今回ヒマルチュリへの自分の源動力となっていった感が強い。

ヒマルチュリの情報は充分すぎる程であった。トレーニング、準備、渉外など、1981年の豊富な情報の中から最も適切で有利な条件だけを拾い集めていった。山岳部の先輩、その他多くの登山団体の山の先輩方からも強力なアドバイスをいただく事ができ、隊として、また一隊員として大変恵まれていたと思う。

今回、僕が個人的に最も神経を使った事は、高度障害の影響である。前回の経験では5,000 mの高度で痛い思いをしている。頭痛、耳の痛み、はき気、これらを克服しない限り頂上に立てない。知識はできる限り頭に詰め込んだつもりであったが経験の少ない自分にとって最大の不安材量であった。しかし、順化は非常にうまくいったようだ。

ヒマラヤの楽しみのひとつにシェルパや現地人達との交流がある。ヒンズーや、ラマの文化の違いは、日本人のだれもが興味を持つ事であるが、ドルディ・コーラはトレッキング許可では入れない地域であり、真のオリジナルの文化に触れる事ができた気がする。

キャラバン中や登山中においても雇用関係におけるトラブルはほとんど無く、互いに紳士的に接

するやり方が功を奏した結果となった。シェルパの選択に関しては、前回のヒマルチュリでの反省も聞いており、力を入れた仕事でもあった。高所ポーター、コックなど、彼らの働きぶりには、目を見張るものがあった。

あの事故さえなければ…と僕はここで言葉を失ってしまう。10月27日はとても穏やかな天気だった。C5から再び登り返し、中村さんを捜しに行くが、姿はどこにも見当らない。遭難が現実となるにつれて虚脱感が襲ってくる。不思議な事に疲労感はまるでない。フィックスロープから離れ、第三雪田へ入って行くと後ろから「もうそれ以上行くと危険だから帰ってこい」とシェルパがさかんに止めようとする。危険の感覚はすでに麻痺しているらしい。ここで引き返すともう二度と中村さんに会えない。そう思うとなかなか引き返すことができない。「中村さん、もう帰りましょう。すべて終りました。いっしょに日本に帰りましょう」大気は冷たくもなく熱くもなく温度というものを感じさせない。

重い足をひきずるようにして下降した。大雪に見舞われ、ルート工作に苦労していた頃に比べると明らかに季節は移り変わっていた。雪の状態は変わり、C2、C3間のナイフリッジはさらに細く、下降はかつてない恐怖感に悩ませられた。もうルートは振り返らない。C2、C1、BCまではあと何ピッチ。自分の手と足で作ったルートである。目をつぶっていても次のピッチが浮んでくる。BCにはみんながいる。中村さんを心の中で何度も呼びかけながらBCへの下降をつづけた。

ヒマルチュリ

村口　徳行

二度目のヒマルチュリに私自身は可能性を見つめていた。自然との対話の中で、もう一度試みる必要があると思っていた。登れるか登れないかという問題はどうでもよかった。もう一度自分の手で試みてみたかった。それだけの価値と可能性とが、充分にあった。

1981年、私達のチームは60日間に及ぶ苦闘の末、頂上まで300mを残して断念した。ルートが複雑で、しかもむずかしい部分が非常に多く、長い距離にわたって緊張させられる細い稜線を行かなければならなかった。7,200mから始まる巨大な岩壁に取付く頃には、強い風が吹き出し、冬が真近に迫っていた。もう少しの幸運があったら、おそらくその頂上は踏まれていただろう。

この経験は、多くのことを残した。1981年のチームは成功しなかったとはいえ最高の登攀内容だった。全員ががんばり続けた結果断念した。ところが、最前線でのがんばりと私のがんばりとは少し違っていた。ある時点で自分自身の登高ではなくなっていた。荷上げなど何の苦にもならなかったが、すべてを通り越して自分自身が情けなかった。最前線に一度も立つことなく、考えていた登攀のひとかけらもなく終ってしまっていた。苦闘を重ね、全力を振りしぼって、それでも手が届かないで終わるのとはわけがちがう。そういう登攀がやりたかった。

1986年に再び困難だが魅力的な同ルートからヒマルチュリへ向かった。そして3人の仲間とシェルパ1人が頂上に到達した。しかし、私はまた頂上に立てなかった。そのことは今後の課題として考えよう。二度目のヒマルチュリは私自身を確かめることで納得ができた。一瞬一瞬を全力でぶつかっていた。みんなが力強く輝いていた。今、山を考える時、一人のとても大切な仲間を失い、複雑な気持ちが交錯する。これから先、自分自身の中で確実にわかっていることは、再び激しい衝動に駆られて行動を起こすということだ。それが山であるのか、何であるのかはわからないが、少なくとも日向ぼっこをして静かに過ごす幸せとは違った幸福を求めるだろう。それは力強くたくましい生き方をしたいと思うからだ。

1987年5月

第II部　事故報告

中村君の御冥福をお祈りします

桜門山岳会　会長　戸　村　貞　男

私は今、ヒマルチュリ登山隊の報告をお聞きして、よくもこれまで頑張ったものだと感心してやってよいものか、なぜ、どうして、中村君を死なせてしまったのか、言葉を荒らげて叱責しなければいけないのか全く戸惑いました。

日大山岳部にとってヒマルチュリ登頂は、1958年以来の部の宿願であり、サウスリッジよりの登攀は1981年にあと一歩という所で敗退したが、この目的のために研究や訓練に努力を重ねてきた次第です。

日本の登山者の間では、日大隊のサウスリッジよりの登頂が知れ渡ってくるにつれて、非常に高い評価をしておる様です。

今回の登頂が日頃の研究や訓練の成果であり、全力を尽した苦闘の結果であり、且つ世間でどれだけ高く評価されたとしても、中村君を失ったことに日大山岳部は最大の失敗を犯したことになります。

由来、日大山岳部の部則に『事故の防止は、すべてに優先するものとする』とあります。これは鉄則です。

ただ僅かでも、私達の気を休めるものがあるとするならば、それは同行の隊員始め部員各位挙げて誠意を尽して、御夫人始め御遺族様の御理解を得、御寛容に接し得たことであります。

私達は中村君の御冥福をお祈りすると共に、冷静に検討、反省して、遭難の絶無を期することを誓います。

1．登頂及び事故発生までの経過

事故発生までの経過は第Ⅰ部の行動報告で記した通りだが、アタック前後の詳しい報告は以下の通り。

— アタック日前後の行動 —

ＢＣで２日間の休養後、登攀活動を再開し、10月20日、中村隊３名とシェルパ５名がスタートする。翌21日、村口隊３名がＢＣを出発する。23日中村隊とニマ・ドルジェは、予定通りＣ５入りをする。

≪10月24日≫ 晴れ。中村隊ルート工作、村口隊Ｃ５入り。中村隊は第二雪田までフィックスを辿り、そこから中央ルンゼを突破して７ピッチの工作でプラトーまで到達した。そこからはそれ程時間を要さずに頂上岩壁を抜けることが可能であろうとの見解から、翌日の予定は、村口隊が先行して最終岩壁の工作を完了させる。中村隊はアタック。中村隊を送り出して余力がある限り村口隊も続いてアタックする。ということに決定する。Ｃ５に入ってからは、睡眠用として毎分0.5ℓの酸素を使用する。

≪10月25日≫ 晴れ。アタック失敗。

＊アタック隊（中村・井本・石川・ニマ・ドルジェ）

＊工作隊（村口・鈴木・古野）

中村隊に先立ち、村口隊３名は頂上岩壁工作のため、AM４：００にＣ５をスタートする。約１時間遅れて、中村隊４名がスタートする。昨日中村隊の工作した最高到達点からさらにルートを伸ばし、最終岩壁の工作を開始するが、7,800ｍ付近は全体的に大きくオーバーハングしており、ルートが見つからず、予想外に困難な登攀を強いられた。そのために時間がかかり頂上稜線へ抜けるまでにもまだしばらくの時間が必要と思われたため、今日のアタックを中止し、体力を消耗させないためにも、中村・鈴木・井本・石川、ニマ・ドルジェには先に下降してもらう。村口・古野は、再び工作を開始、稜線へ抜けるルートと、明日のアタックの見通しがついた段階で17：00頃下降を開始した。

交信……ＢＣ岡田－Ｃ５村口（18：30）

岡田「なぜ、交信を入れない」

村口「トランシーバーの入ったザックは岩壁基部にデポして工作していたため、連絡できなかった」

岡田「下降する時に連絡をなぜ入れない」

村口「申し訳ない」

岡田「そんなことでは明日のアタックを出すわけにはいかない」

岡田「ルートはどんな状況か」

村口「なんとか稜線に出るルートを見つけた」

岡村「あとどのくらいの距離か」

村口「ほんの30ｍ、いや25ｍぐらいかもしれない。５ｍの垂壁を人工で越せばあとはそれ程問題なく稜線に出ることができる」

岡田「最終工作地点からＣ５まで下降時間はどのくらいか」

村口「２時間あれば充分だ」

食糧・燃料・酸素などの確認と体調を話した段階で、明日もう一日のアタックを決定した。明日の予定は村口隊が先行し、工作完了後頂上へ、続いて中村隊が頂上へ向かう、以上を確認し交信を終了する。

≪10月26日≫ 晴れ。アタック、事故発生。

＜予定＞村口・鈴木・古野による最終岩壁の残り30ｍを工作後、頂上へ向かう。時間差をおいて、中村・井本・石川、ニマ・ドルジェの４名が頂上へ。前日と同様、村口隊は３時出発、中村隊は４時出発と決める。登頂リミットは、15：00とする。

＜行動＞AM1：00。村口隊は出発準備を開始したが、村口は昨日の工作で足の凍傷が悪化し歩けない。早朝の行動を避け、太陽が射して気温が上がった段階で最終的な結論を出すことにする。

鈴木は、やはり昨日の寒さと高度によるためか、体の調子が悪く、本人の意志で登頂を断念する。

村口－古野の会話。（C5、3：00頃）

村口「あの垂壁登れるか」

古野「たぶん、登れると思う」

村口「いいクラックが走ってるから、厚刃のハーケンを叩き込んで、階段を作ってしまえばいい……」

古野「なんとかなると思う」

村口「その先は、見えたと思うけどスベリ台を目指して行けば間違いなく稜線に出る。ニマ・ドルジェと組んで先行しろ、オレはもうしばらく様子をみる」

古野が朝食後、中村テントを訪れ、中村と打ち合わせを行う。中村テントにいた石川も調子が悪く、登頂を断念する。

この時点では、昨夜の打ち合わせでBCの岡田とトランシーバーの開局の約束をしておらず、C5にいる村口・中村の判断でアタックメンバーを決定する。

5：15古野が先行し、続いて6：00ニマ・ドルジェがC5をスタートした。中村・井本は7:00前後でスタートする。

8：00BCの岡田と行動概要の確認を行う。中村は「疲労はあるが確実に登る」という交信と共に、「村口が登ってきたら下降させる」と気合の入った口調で交信を続けた。村口は、なんとか出発したいと考えていたが、登頂を断念する。

古野、ニマ・ドルジェは、最後の工作を完了させ、13：00にヒマルチェリの頂上に到達する。（第Ⅰ部の登攀記録参照）

中村・井本は15：20の交信で7,800mの最終フィックスロープを抜け出た場所から登頂時間の延長を求め、17:20に頂上に到達した。

交信……18:10　・最終フィックス地点に戻った時点

中村「現在登頂を終え、最終フィックス地点に到着。既に井本は下降中、自分もすぐに確実にゆっくりと下降します。ヘッドランプもありますし、大丈夫です」

というしっかりした口調の交信が入る。

岡田「ゆっくりで構いません。確実に降りて下さい。途中1～2回でかまわないので連絡をいれて下さい。こちらはオープンにしています。フィックスには必ずダブルでセフティーをとって下降して下さい」

その夜、BC・C3とも中村の交信を待ち続けるが、中村からの交信は無く、BC・C3では、故障あるいは落として連絡できないものと考えるが、一晩中トランシーバーをオープンのまま翌朝を迎える。

— 第1次アタック隊 —

5：15	古野出発
6：00	ニマ・ドルジェ出発
13：00	登頂
16：20	C5帰幕

— 第2次アタック隊 —

6：30～7：00	中村・井本出発
15：20	トランシーバーにて帰幕時間の延長を求める。（7800mより）
17：20	登頂
18：10	最後の交信（7800mより）
21：50	井本、C5帰幕

≪キャンプ配置≫

BC…岡田

C3…村口・鈴木・石川

C5…古野・井本、ニマ・ドルジェ

— 井本の行動報告 —

『3:00　起きると古野さんがテントに入っており、シュラフに入って背を起こした中村さんと話している。

5:30　朝食を終えて出発準備にかかる。（古野さんは5：15頃出発）

6:00　ニマ・ドルジェ出発。

6:30　中村さん出発。

6:45　アイゼンの調子が悪いらしくC5に戻って来る。

7:00　中村さんは7：00前に出発。井本がテントを出て、アイゼンをつけてルートを見ると1P目を登高中。

8:00　第一雪田終了点でトランシーバー交信中の中村さんを追い越す。
中央ルンゼ入口で休んでいたところ、中村さんが追い越して先行する。

12:00頃　直上ルンゼ入口で交信中の中村さんを見る。井本が入口に着いた頃に交信を終える。レーションを食べて休む。中村さんは「先に行く」と言ってルンゼに入る。井本がザックを背負いルンゼを見ると、まだ1P目中間を登高中。

14:00　井本は腹の具合が悪く、ルンゼ中間部で休む。中村さんはルンゼを終わり、最終岩壁に取りつく。（コールがかなり聞こえた）

14:30　井本がルンゼを終わり岩壁に取りついた頃、中村さんは岩壁2P目へ。井本は20mほど登ったところで2P目のチムニーに落ちた中村さんを見る。古野さんが下降点から懸垂中。中村さんからは古野さんが見えず、古野さんに助けを求める。この時、古野・井本で言葉を交わす。登頂の時刻、頂上までの所要時間、旗、井本のアイスバイル、確保点のハンマーの回収。中村さんが自力脱出する間に井本は1P50mを登りきり、確保点でハンマー、コンテュニアスで使う赤ザイル（50m）をザックにしまい、2P目に向かう。

14:50頃　2P目を終えた所で中村さんと合流。3P目の出だしが難しく、先に中村さんが取り付いて登れず、井本に代わる。井本も登れず、再度中村さんが取り付いて先行する。

15:20　頂上雪稜着。「ここまで来たんだからな」という言葉に、井本は「そうですね」と答える。トランシーバー交信の間に井本がザイルをほぐす。交信を終えて5分とたたない内に出発。間隔は20m程。古野、ニマ・ドルジェのトレースに従い頂稜づたいに歩く。かなりの西風に中間のザイルは飛ばされ、中村さんは若干遅れがちで、先行する井本が時々立ち止まる。

17:20　頂上着。中村さんは30m程後から登って来る。井本は旗を取り出し、バイルに結ぶ。中村さんと握手。肩をたたき合い「やったな」と言う。中村さんのカメラで写真を撮り合う。井本がザイルを直している間に、中村さんは頂上の雪の中に写真を埋める。

17:45　頂上を後にする。登りのトレースとは違い、トラバースのトレースに従って下降点を目指す。暗くなると下降点が判断できないと思い、かなり急ぐ。

18:10　下降点着。井本はザイルをたぐり寄せ、中村さんは交信の為ザックを開く。
井本は「先に行きます」と言い、中村さんは「気をつけろよ」と答える。井本は交信が始まる前に下降を始め、途中でザイルをつなぎ、約80m真下に下って直上ルンゼに降りる。余っていたザイルを直上ルンゼのFixの支点に結び、Fixにつかまって下る。1P程下った所で「井本」と呼ぶ声を聞き、井本は「中村さん、中村さん、いいですよ」と答えて下る。（返事はなかった）井本は直上ルンゼ、中央ルンゼの確保点でザックをおろし、リヒトを取り出してリヒト行動にはいるが、途中でリヒトを落としてしまい真暗の中をFixロープをたぐりながら下る。

21:50　C5着。テントに入るなり横になり、ジュースを飲み、ローソクの炎を灯し続けて朝を迎える。』

C5に残っていた村口・鈴木・石川は、アタック隊を送り出した後、しばらく休養を取り、午後

からC３へ向け行動を開始した。C５用のトランシーバーは、中村が携帯していたために、先に戻った古野と連絡が取れず、C５の状況はBC、C３に伝わらなった。BCの岡田は、26日から双眼鏡を食い入るように見つめ続けていたが、C５に全員が帰幕したかどうか確認できていない。

— 古野の報告 —

『16:20、C５に帰幕する。ニマ・ドルジェの作ったお茶を飲み、お粥を食べて、中村・井本の帰りを待つ。井本が21:50帰幕。井本の疲労は激しく、一度横になったまま動けない。話すのもつらそうである。中村テントで23:00まで中村を待つ。もし中村が帰幕しない場合、古野・井本、ニマ・ドルジェの３名で早朝中村の捜索に出発する事を井本、ニマ・ドルジェの２名に告げて、村ロテントに戻って就寝。村ロ・鈴木・石川は本日C３に下降している。』

≪10月27日≫晴れ

古野、ニマ・ドルジェの２名は早朝よりフィックス・ロープをたどり、中村の救助に向かったが、7,500m付近で発見したものは、中村の所持品数点と、彼のものと思われる滑落の跡だけだった。BCでは早朝から３台の双眼鏡で捜索を開始する。

— 古野の捜索報告 —

昨日と同様、穏やかな天気である。中村が帰幕していない事を知り早々に準備をする。凍傷か怪我で動けなくなり、ビバークを強いられている事を考え、古野は薬品、テントシューズを持ち、ニマ・ドルジェには酸素、ツェルト、テルモス、コンロ、コッフェル、若干の食料を持たせる。井本には「シュラフを持って上がるように」と指示する。酸素器材のセッティングに時間がかかり、捜索の出発が少々遅れてしまう。井本は足が痛むという事で出発が遅れるとの事。

6:45 古野、ニマ・ドルジェ出発。（井本は調子が悪く、捜索には参加できなかった）

9:00 第二雪田からロックバンドに入る所で、先行のニマ・ドルジェが様々な中村の所持品を発見。目出帽、カラビナ付シュリンゲ、トランシーバーの破片、ヘッドランプの破片、ラジカセの破片を次々に発見する。そしてほぼロックバンドへの入口のルート上で、中村のものと思われるブルーの衣服の繊維が岩角にこびりついているのを発見。（手ではがして持ち帰ろうと思ったが、とてもはがせなかった）中村がこの上部で動けなくなっている……あるいはザックだけ落としてしまったとも考え、ニマ・ドルジェに上部（中央ルンゼの入口）まで行かせるが、中村を発見できない。フィックス・ロープも異常無いとの報告を聞く。古野は第三雪田を捜索。ロックバンドのルートの下の雪面で、中村のものと思われる滑落の跡を発見。直径1m、深さ50cmほどの大きな穴が20mおきにあいている。その左の方でシャフトの折れたピッケル、止め金が壊れ、一部歯の曲がったアイゼン片方、カセットテープ（テープのみ）、トランシーバーの破片、ラジカセの破片を発見し、回収。この時点でほぼ絶望と判断し、捜索は打ち切る事にした。

13:30 捜索を打ち切り、下山開始。

14:15 帰幕。C５にはトランシーバーは無く、C４かC３に本日下山と判断する。

15:00 C５のテントを１つ回収し、１つは万一中村が帰った事を考えて食料、コンロ、コッフェル、酸素を残して３名で下山。

16:00 C４到着。井本は１時間遅れてC４到着。鈴木はC３から我々のサポートのためにC４へ登り返す。

16:30 C４でトランシーバー交信を済ませ、古野、ニマ・ドルジェはC４出発。

17:00 鈴木は井本のC４到着を待って、井本をサポートしながらC４を下山。

18:00 古野、ニマ・ドルジェはC３到着。我々が到着後、石川がサポートに出発。

20:00 鈴木・石川・井本、C３に到着。

— BCの岡田の報告 —

BCでは27日早朝より3台の双眼鏡で捜索を始める。

7:00 2名がC５を出発し、上部へ登り始めるのを確認。彼等２名の姿を中心に周辺を捜すが他の人影は見えず、時折C５より下部およびBC付近までも見回すが、それらしき姿は発見できない。ここ数日の内では比較的気温が高く、南西壁正面岩壁より大きな雪崩が既に数回発生し、標高約5,000ｍの岩壁基部にデブリとなって堆積していく。

10:53 1人（ニマ・ドルジェ）が中央ルンゼへ入っていく。もう1人（古野）は、何かを探している。

11:40 2人が第二雪田と第三雪田を分けるリッジを越えたところで何かを探している。

11:45 1人（古野）が第三雪田へ向かっている。しばらく止まっていたが、何かを発見したらしい。

12:00 まだ何かを探している様子だ。

13:30 捜索をしていた2名がC５へ下降を始める。

15:00 C５より３名のみが下降を開始し、事故が現実のものと解る。C３の鈴木にトランシーバーを持たせ、上部へ向けて行動開始。

16:00 C4にて古野・鈴木が会い、古野より26・27両日の行動を知る。BCでは捜索者が下部（BC方向）を覗きこむような行動をとっていたことから、捜索の中心をデブリ周辺に移す。岩壁・懸垂氷河・ルンゼ等広範囲を見渡すが中村を発見できず。一日中雪崩が岩壁基部にデブリとなって集中している。

古野・井本、ニマ・ドルジェの３名は15:00にC５から下降を開始する。16:00、C３から登り返した鈴木とC４で合流し、ここで初めて上部で起こった内容が確認された。

古野「昨日、中村・井本が17:20に登頂したが、中村は戻らなかった。朝になって古野とニマ・ドルジェが捜索に向かったが、第二雪田の上部で滑落の跡を発見した。中央から折れたピッケルや、曲がったアイゼンなどを回収した。おそらく滑落、生存の見込みはない。BCからの捜索をおねがいする。」

岡田「下から双眼鏡で探し続けているが、何も発見できず。」

古野「C５から下降する時も下を見たが、何も発見できず。滑落と思われる跡は、20ｍおきぐらいに直径１ｍぐらいの穴があいて真下に消えていた。おそらく一番下の氷河まで落ちた可能性が強い。」

岡田「滑落と思って下部氷河もよく見たが、何も発見できず。」

古野「フィックス・ロープに破損は無し、セルフビレー用のカラビナ付シュリンゲを岩の上に置いてあるような状況で回収した。（疑問とされた件だったが、後日、写真や隊員の記憶から、そのシュリンゲは予備のものと判明した）岩角にはブルーの繊維がこびりついていた。（中村はブルーのヤッケを着用していた）」

岡田「ニマ・ドルジェよりシェルパへ説明させよ。」

岡田「C３聞こえたか。」

村口「すべて聞いた。」

古野からの捜索報告は、わずかな望みすらも打ち砕くものだった。ヒマルチュリの南西壁を滑落したら、途中で止まる可能性はほとんど無く、BCと同じ高さの氷河のどんずまりまで一気に2,000ｍ以上転落し、生存の望みは打ち砕かれ、現状況の中での救助活動は二重遭難の危険性のため、不可能であった。C３に集結後、再び交信内容の確認と、捜索のことについて話し合った結果、全員BCへ下降することに決定する。

≪10月28日≫ 晴れ

村口・鈴木・古野・石川・井本はBCへ下降しながら肉眼にて捜す。特にC2からの下降では滑落経路（推定）がよく解るが、発見できずBCへ帰幕。古野・井本より26・27両日の詳しい説明を受け、折れたピッケル、アイゼン等を見せられ、約7,550mの高さよりBCと同じ標高の岩壁基部付近まで滑落したのは、ほぼ間違いないものと思われた。

ただ結論を出すにはまだ早いと考え、29日の終日、30日午前中と捜索を続けるが、遂に中村の姿を発見できずBCを撤収する。

行動概要

10月10日～11月5日までの行動

月／日	中村パーティー（中村・井本・石川、ニマ・ドルジェ）	村口パーティー（村口・鈴木・古野）
10／10 晴	C4→C3	C3休養
11 晴～雪	C3休養	C3→C4入り
12 晴・強風	〃	C4→C5荷上げ、工作
13 晴	C4入り	C5建設　キャンプ入り
14 晴～雪	C5荷上げ／岡田C2へ下降	岩壁下部、第一雪田まで工作4P
15 晴・風	C4滞在　／〃　C1へ下降	岩壁下部、第二雪田まで工作5P
16 雪・強風	〃　／〃　BCへ下降	C5滞在
17 晴・強風	深夜、C4を潰されBCへ下降	C5→C3　潰されたC3の堀りおこし
18 晴・強風	BC休養	C3→BC
19 晴	〃	BC休養
20 晴	BC→C2／シェルパ5名出発	〃
21 晴	C2→C3	BC→C2
22 晴	C3→C4	C2→C3
23 晴	C4→C5	C3→C4
24 晴	岩壁中央ルンゼプラトーまで工作7P	C4→C5
25 晴	アタック隊（含シェルパ1名）7,785mで引き返す。	最終岩壁工作　7,790mまで
26 晴	◎古野、ニマ・ドルジェ先行、工作後登頂。 ◎中村・井本アタック　登頂後中村C5に戻らず。 ◎村口・鈴木・石川は昼過ぎC5を発ちC3に向かう。	
27 晴	古野、ニマ・ドルジェ捜索、その後C3へ。BCからは3台の双眼鏡で捜索。	
28 晴	全員BCへ下降	
29 晴	岡田・村口BC出発	
30 晴	BC撤収　本隊キャラバン出発	
11／1	岡田・村口カトマンズ着　日本へ連絡	
2	日本大使館へ報告	
3		
4		
5	本隊キャラバン、カトマンズ着	

事故発生予想地点図

7,800mフィックスロープ最終地点
Himal Chuli 7,893m
直上ルンゼ
中央ルンゼプラトー
滑落予想地点
所持品発見地点
第三雪田
第一雪田
C5 (7,250m)
第三雪田
南　稜
ヒマルチュリ南西壁

2．検討と反省

現場の状況から、遭難の直接原因は滑落であろう、と思われる。滑落地点は、第二雪田と中央ルンゼの中間点、約7,550 m付近と推定される。最終岩壁7,800 m付近からの転落は、回収品の位置からみて考えにくい。

7,550 m付近は部分的に垂直な壁があり、ブルーアイスが詰まってアイゼンの効かない所がある。しかし、全体的にはしっかりした岩で構成される3級程度のルートである。ハーケンも多いため、掛け替えは多くなるが、それほど問題となる部分はない。

滑落した原因と、それを引き出した要因が問題となるが、中村からの最後の交信や井本からの報告で、高度障害に原因があるとは考えにくい。しかし、連日の行動による疲労はかなりあったはずであり、高所の影響が加わったことも少なからず考えられる。

また、フィックスロープ及び支点に損傷や異常が確認されないことから、なんらかの理由によりセルフビレーを外す（外れる）結果となり、ロープから離れたものとも推測される。たとえば、小さなスリップにより気が動転した中で体勢を立て直そうとしているうちに、単純な操作ミスでロープから離れてしまったのではないか。あるいは、支点での掛け替えミスといった可能性もあるが、そういった基本的な技術のミスは考えにくい。なぜなら、中村の性格からみて、そのような場所は特に注意をしていたと思われるからである。また、面倒だからセルフビレーを取らずにロープを摑んで下降してしまうと、いうことも考えにくいことである。

何れにしてもその直接的な原因は推測の域を脱し得ない。

≪タクティクス上の諸問題について≫

— ミスを引き起こすような重大な欠隔が隊の内部に存在していたかどうか —

私達の目標は南稜からの登頂であった。それぞれがヒマルチュリの南稜から頂上へ立とうという強い意志を持ち、チームとしてまとまっていた。隊員間の人間関係もトラブルはなく、非常にうまくいっていた。

(1) フィックスロープについて

出発前、国内で立案した基本計画案は、最終岩壁部までのフィックス工作を終了させ頂上からの帰路を確保した後でしか、アタック隊をスタートさせないというものであった。これは5,000 mの高所とは比較できない正常な状況下での判断であり、この方針は現場においても変わりはなかった。

高所という状況の中で、ワンピッチのフィックスを伸ばす事に、全員がどれほど苦労したか……。にもかかわらず、6,000 mものフィックスをルート上に張りおおせたのは、仮にザイルパーティーが別々の行動を取らざるを得ない状態におかれた場合でも、確実に安全な行動を可能とする必要があることを全員が確認していたからである。

こうして、やっとの思いで張り終えたフィックスにより、C5から頂上への往復は、体調の許すかぎり全員が可能になった。我々は、極めて慎重にそして安全に行動していた。しかし、安全と思われていたフィックスロープの中で事故が発生した事に対し、私達は改めてその捉え方について考えさせられた。フィックスロープがあるために、安易にアタックを考えていた部分があったのではないか。フィックスロープがあるからあとはもう大丈夫だ、という考え方に問題があったのではないか。こうしたフィックスロープへの信頼を裏返して考えてみると、そこにはロープに対する過信があったかもしれず、そこに判断の落とし穴があったような気がする。

(2) C5スタートの時間について

私達は、アタックに関して常に話し合っていたことがある。それは、早い時間帯でスタートをす

るということである。たとえば、夜間といえども天候が良くチャンスがあればアタックをかける。可能性がある限りアタックを試みるということである。

しかし、当日の出発予定が4:00であったにもかかわらず、中村がスタートしたのは7:00であった。その3時間は、疲労のための遅れといってよいだろう。

だからといってアタックを中止させなかったのは、計算で割り出した限りにおいて、その時間帯でも登頂の可能性があったからである。ルートに関しても、夜間行動の可能な工作状況であった。

15:20、中村に登頂リミットの延長を許した時点で、夜間の下降になるということは充分考えられた。しかし、問題となるのは、登頂を果たし、明るいうちに最終フィックス地点まで往復してこられるだろうかということだった。下降が夜にかかったとしても、フィックスロープが張ってあるので、それ程問題はないと思っていた。

(3) 時間延長について

中村・井本は3日間連続して高所で行動をしていたため、疲労があったのは間違いない。しかしながら、高みを目指せるだけの思考能力と気力は、充分に感じられた。そしてフィックスロープも一次隊により完成されており、待ちに待ったモンスーン明けの安定した天候でもあり、一時間のタイムリミットの延長によって、中村・井本の登頂の可能性が開かれるものと考えられた。

また、7名の登頂者を確信していた私にとって、当日の朝になり頂上を諦めざるを得なくなった3名のためにも、といった浪花節的お粗末な考え方も、前夜の打ち合わせの基本を簡単に変更して時間延長を認めてしまった一因であったと思う。

加えて、人間関係を考えた時、決断をくだせなかったことは、隊長岡田の責任である。

(4) 基本的なパーティーについて

26日、井本は7,800mのフィックス地点よりロープを辿りC5に帰幕し、中村は戻らなかった。

本来ならば、パーティーを組んでスタートした場合、2人で帰ってくることが当たり前だが、安全圏に入ったと思い込んだ途端、パーティーのメンバーは行動を共にする、という鉄則を崩している。ここにひとつの問題がある。これは井本個人の問題ではなく。隊全体の問題として受け止めなければいけない。それは先にも述べたように、皆がフィックスロープをひとつの“安全な存在”と捉えていたが故に、このような判断の緩みが引き出されたと考えられる。後から下降してくるリーダー中村に対し井本は絶対的な信頼を持っており、ロープもあるのだし確実に下降してくるだろう、と考えフィックスロープを伝って下降してしまった。

常に基本的なザイルパーティーで行動せよ、とは指示していないが、少なくとも最後のアタックに関しては、ザイルパーティーの鉄則を守るべきであった。

(5) 判断の落とし穴について

今回の事故の決定的な原因を断定することはできない。もちろん、タクティクス上の問題や判断のミスが、幾重にも重なって起こった事故には違いない。我々の気づかなかった部分に原因は潜んでいたことも確かであろう。それは、ヒマラヤ経験の少なさから来るものなのか……。

＊　　＊

以上が、現段階における直接的、間接的な原因探求への正直な答えであり、検討と反省を重ねてはきたが、未だに明確なひとつの結論は出せないでいる。

しかし、今回の登山に対する多くの批判を受けることの中で原因究明への手掛かりを見つけ、反省を続け、その結果を未来へと繋げていくことが我々の責任であると、肝に銘じている。

第二次捜索報告

神崎　忠男

山登りに危険、登山者に遭難がつきまとうものとは知りながら、『まさか身近なところで起こるはずはない』と、楽観的に構えている山男の悪い癖がある。そして、どの遭難事故もそうであるように、事故が起こって初めて『あいつが……』とその重大さ、意外性に驚く。

10月10日、ミュンヘンで開かれた世界山岳連盟（ＵＩＡＡ）の会議に出席し、その後オーストリア、スイスの山仲間と歩いた美しいアルプスの思い出もさめやらない11月1日、私は高緑監督から電話をもらった。

「今、遭難の連絡が入った……」

「ウチ（日大）の隊のことですか？」

「ヒマルチュリで滑落したらしい」

「一人ですか？」

お互いに事故の重大さをそれなりに意識していたのだろう、会話はなかなか核心に触れない。

「カトマンズから岡田の連絡だから間違いない」

高緑監督のいつにもない真剣な話し方に、生命に関わる重大事故と察し得た。受話器の向こうの声を聞きながら隊員ひとりひとりの顔を思い浮かべていたが、みんな笑顔である。意識と無意識の錯乱の中で少しでも良い方に考えようとする。自分が想像するような重大事故であってたまるかーーという思いが働き、最後の一言 ― 生死の問題と、誰が事故を起こしたか ― 、ということが聞き出せない。

「誰ですか……」

「日出だ……」

誰であってもそうだったと思うが、ガンと頭をなぐられた思いであった。実名を聞き、『困った！』と思うすべての感情を含め、「日出ですか……」とオウム返しをしたが、この短い言葉の中にいろいろな思いが錯綜していた。

その夜、高橋・神崎は高緑監督宅に集まり、今後の対策を話し合っていた。高緑ー岡田のあいだには定期連絡が取られることになっており、午後11時頃、カトマンズの岡田から電話が入る。東京からの連絡は、土曜日のために山などに出掛けて連絡のとれないＯＢが多く、対策に何らの動きがないことの報告のみで、岡田からの詳細な事故説明と遭難の確認に止まったに過ぎない内容であった。

登山隊は、再度中村の確認を行ったが、地形的な問題と隊の規模、隊員の疲労などから捜索活動が無理な状態であると判断し、取り敢えず東京連絡所と御家族への報告のために岡田、村口が本隊より一足先にカトマンズに出た。

東京では、休日明けの11月4日火曜日、主だったＯＢに連絡をとり緊急対策会議を開く。日大山岳部・桜門山岳会でも、これまでに富士山・奥穂高での遭難、その他小さな事故もいくつか起こしてはいるものの、近年に大きな事故はなく、それも学生や若いＯＢで独身者のみの遭難であった。今回のように海外での、また妻帯者の事故は初めてである。このようなことから、海外登山の経験、特にマナスル山域に詳しく登山界での活動経験が豊富な松田雄一氏に事故対策委員長となっていただき、この緊急事態の収拾に当たる態勢を整えた。冷静な判断の中で現状を把握し、最も有効な今後の行動予定を考えなければならない。厳粛な気持ちの中にＯＢの面々が集まる。

御家族への連絡は現地からの岡田隊長の報告と合わせ、桜門山岳会として高緑監督からも一報を入れていただく。信じ難い突然の出来事に御家族の方もネパール行きを望まれ、今後の捜索活動に強い期待を寄せられた。御家族の心中察する中、ＯＢ会としても早速遭難対策を検討し準備に入ったが、何分、事故後の状況や現場の状態、また、隊員の健康問題などの把握が充分でなく、現地の状況がわからないため、具体策に進展を見出せず焦りを感じ始めた。このような状況にあっては正確な現地情報の入手を急務とし、取急ぎ村口隊員を東京に呼び戻し、善後策を練ることに決定する。

11月5日、村口隊員が帰国、彼自身は元気ではあるが強度の凍傷を負い、手当てが必要であった。状況によっては、村口に御家族と再度カトマンズへ戻ってもらおうとも考えていたが、無理な状態であることを知った。

村口の帰国でかなりの状況を知ることが出来、捜索活動の可否、事故現場の状況、隊員の疲労度など今後の行動についての検討がなされたが、具体策が立てられない。取り敢えず御家族の同行者として神崎を現地へ向かわせ、東京と連絡をとりながら今後の方針を決めることにした。

11月7日、中村日出君の妻実栄さん、実母の初江さん、同行する神崎の三人は新橋第一ホテルに集り、昼の時間ではあったが数人のOBと村口隊員が見送る中、成田へと向かった。御家族の方々も飛行機は初めてではないとのことに心配することもなくバンコックに着き、エアポートホテルで一泊、翌日のタイ航空機でカトマンズへ向かう。

カトマンズへの機内は思ったよりも乗客が多く、昼食の頃、右側の丸窓にヒマラヤの高峰が見え始めた。複雑な気持ちと共に「ヒマラヤです」と説明する。早くも飛行機はカトマンズ盆地の上空に達して高度を下げ始め、燦々と陽を浴びて眩しいボトナード寺院をかすめるようにして着陸した。実栄夫人もお母さんも心穏やかならずも元気な御様子でタラップを降りられた。我々を、圧倒するようなヒマラヤの景観は、いやが上にもネパールに着いた実感を覚えさせる。岡田隊長をはじめとした隊員、OB宮原氏の出迎えを受け、宿泊先のホテルソルティオベロイへ向った。テレビこそないがカトマンズでは超一流、質素な落ち着けるホテルで御家族の方にも良いホテルに泊まっていただけたことと思っている。

チェックインの後、お二人には少し休んでいただくこととし、その間、儂の部屋で隊員とのミーティングを開く。今後の捜索について岡田隊長を中心に検討を進める。事故の状況、地形的な問題、シェルパを雇ったりしての再度の組織立ての難しさなどを話し合う。再度の入山もいとわないという隊員の意向はあったものの、彼らの疲労度はかなりのものと推察した。ここカトマンズでは何とか元気でも再び6,000 m の高度へ向かうことの難しさを考えると、これ以上に悪い状況の起こることは避けなくてはならない。こういった状況を検討し、今後の捜索行動を考えることにはかなりの時間を要した。そして、まず中村君の消息をつかまなくては方策が立てにくいという状況から、思い切って飛行機又はヘリコプターによる空からの捜索を行うことにした。もし空からの偵察で中村君の姿が確認出来れば、その時点で次の行動を考えるということで捜索フライトの準備を進める。

我々は中村君の発見時のことを考えヘリを使うことを提案したが、現場にヘリが降りることは地形的にとうてい無理であることや、ヘリでは飛行高度も4,000 m が限界ということで、エージェント側はピラタスポーター機を勧めてきた。検討の結果、取り敢えずピラタスポーター機を飛ばし中村君の消息を探り、もし発見出来た時点で次の計画を立てることで早急にチャーターフライトをした。途中でヘリに変更する考え方も捨ててはいなかったが、チャーター出来なくなることも考えて、三回のピラタスポーター機のフライトを予約する。この計画を夜の定期連絡で東京に打診し「現地の判断に任す。最善の策を講じよ」との返信に捜索飛行の態勢を整えた。

御家族にも今回の事故説明、経過報告とともに今後の予定についての御了承を得た。

11月9日、まず御家族の方にヒマルチュリと事故現場を見ていただくため、岡田隊長と古野を同乗させて第一回のフライトを行う。カメラ、双眼鏡と中村君発見へのあらゆる対策を施し、雄大なヒマラヤの峰々に向かってトンボのように小さなピラタスポーター機は飛び立っていった。

一応、御家族と相談はしたものの、いきなりの高度飛行や、生々しい事故現場をご覧いただくことに一抹の不安と戸惑いは感じながらも、御家族に現実を知っていただくために無情を承知の上での強引なフライトでした。

第二回フライトは11月10日、神崎・鈴木・井

本・石川がフライト。背のスラッとしたインド人のパイロットだった。三回とも我々のために飛んでくれたわけだが、飛び立ったときに、
「危ないことをさせて申し訳ない。我々の友を思う心を理解して下さい」
と、謙虚な気持ちでお礼を言う。
彼は、「危ないことが大好きでパイロットになったんだ。黙ってオレの飛行機に乗っていろ！」と言わんばかりの剣幕で飛びたった。

当初の話では、飛べても7,000 mまでが限度とのことだったが、かなり手荒な操縦でマナスル三山を一周、更にマナスルとP２９のコルをかすめての通過には、恐怖感すら感じさせられ、スリルと緊張の中でいやが上にも捜索に気合いが入る。コルを通過すると左に旋回してヒマルチュリの壁すれすれの飛行、捜索にはもってこいのアングルで飛んでくれるものの危険も大きい。そんな中でカメラと双眼鏡を交互に覗き、事故現場付近に目と心を集中する。右旋回、左旋回と何回となく壁に近づいてはくれるが、中村君の姿は確認出来ない。雪壁についた雪溝が中村君の滑落の流れた跡と錯覚したりもしながら、上部岩壁から下部岩壁へと目を移す。じっくり見れば見る程、状態の悪さ、地形の複雑さを知らされる。いつの間にかヒマルチュリの頂上と同じ高さとなり、すぐそこに頂上が見え、手が届くほどだ。二回ばかりの右旋回で更に高く、ヒマルチュリの頂きははるか下に見えた。「オイ、大丈夫かい……」思わず日本語で声を出す。

飛び立つときの儂の一言に刺激されたわけでもあるまい。半ばヤケ気味で飛んでいるのかな、とも思ったそうだがそうでもないらしい。計器では高度10,000 m を示している。しかし、ヒマルチュリはもちろんマナスルまで手に取るように見える。こんなアングルでマナスル三山を見たのは我々ぐらいではないだろうか、と思っていると急に気分がムカムカしてきた。軽度の高山病であろう。酸素マスクを着けてはいるものの、このマスクに酸素が本当に流れているのだろうか、とこの時初めて疑問を感じた。かなり古く消耗も激しい酸素

上空よりヒマルチュリ南西壁（神崎撮影）

機器に併せ、飛行機そのものがオンボロに感じられ、高度10,000mの不安は募るばかり。そうこうしているうちに、高度を下げての再度の偵察をお願いするが、パイロットは心よく引き受けてくれた。痛くなるほど壁とニラメッコしたものの、捜索の成果は実らずカトマンズへと引き返した。

その夜は御家族をも含めてのミーティングを開き、今後の対策を話し合う。これ以上危険があってはならないから明日のフライトは取り止めては、との御家族の御意向もあったが、ここで中止しては一つのチャンスを失う気もして、予定通り明日再度の偵察飛行を行うことにした。

第三回フライト、11月11日、古野と井本の二人で飛ぶことになった。残った隊員は、観光局（ツーリズム）へ出掛け、今回の事故証明を取りに行ったり、御家族と日本大使館へ挨拶に出掛ける。午後、フライト組と合流した。三回のフライトも思った成果が上がらず、次の行動についてのミーティングをもった。

中村君の消息が確認出来なかった今、次の行動をいろいろと検討したが、取り敢えず、全員一緒に日本に帰ることが次へのステップとも考え、この旨を御家族の方に話した。緊迫した空気を感じながらも御家族の方の御理解を得て、今回の捜索活動の一応の区切りとした。

次の日、御家族と隊員全員はヒマルチュリが見える『カカニの丘』へ出掛けた。出発時には霧が立ち込めていたが、天気も何とかもちそうだとマイクロバスで出発。2時間くらいかかって、何軒かの人家が建つ『カカニの丘』に着く。ヒマルチュリは雲が垂れ込めて見ることが出来ない。ケルンを建てようと思っていたが適地が見つからず、小さな穴を掘って、カトマンズで手に入れた中村君の身代わりの仏像を埋め、その上に石を積んでこじんまりとしたケルンを作った。見えないが、ヒマルチュリの方向に向かって全員で部歌を斉唱。“明日の旅路が気にかかる……”と、歌い終わる頃、われわれの心が天にとどいたのか大粒の涙雨が降り出した。

カトマンズに帰り、帰国の準備をするかたがた、カトマンズで滞在中にお世話になったクマールカドカ殿下、テク・ポカレルネパール山岳協会副会長、観光局のシャルマ氏、そして、日本大使館の皆さん、宮原先輩、トリブバン大学教授でＪＡＣ会員でもある丸尾先生、大河原御夫妻など多くの方々に御挨拶をし帰途につく。

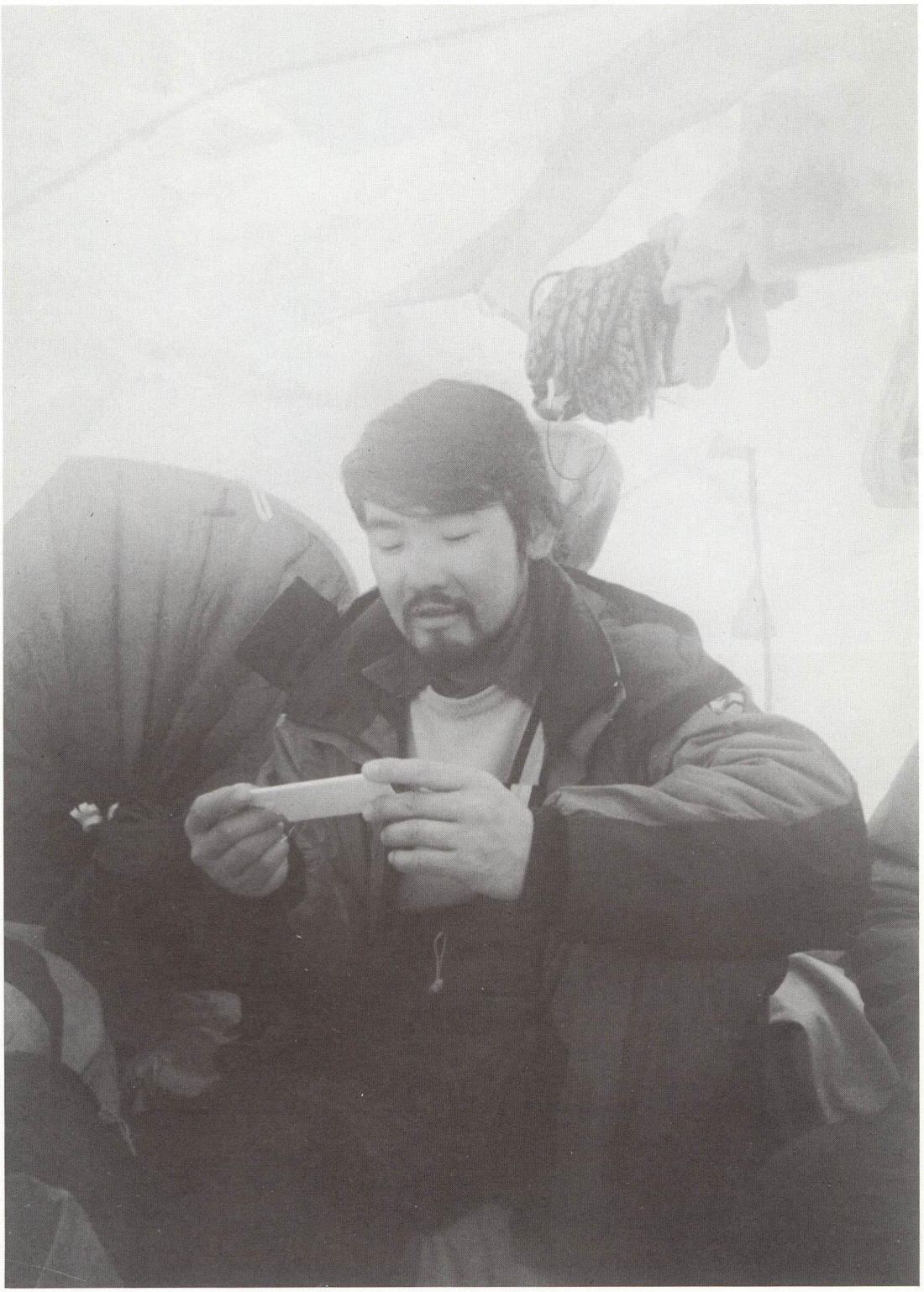
東京では沼尻部長をはじめ、多くのＯＢの出迎えをいただき、本当に有り難うございました。

最後に中村日出君の御冥福をお祈りしつつ、捜索報告を終わります。

合掌

11月 7日(金)	新橋第一ホテル集合（12:30） 成田発　TG741便（17:50） バンコック着（22:30） エアーポート・ホテル泊
11月 8日(土)	バンコック発　TG311便（11:30） カトマンズ着（13:15） ホテル・ソルティオベロイ泊 ミーティング（事故報告今後の行動）
11月 9日(日)	家族飛行　ご家族・岡田・古野 4名にて約2時間飛行 観光局（ツーリズム）・登山資料等の提出と報告 リエゾン・シェルパと会食また情報収拾依頼 ヒマラヤンジャーニー（大河原氏）にてヘリの情報収拾
11月10日(月)	捜索飛行　神崎・鈴木・石川・井本 ご家族に中村隊員の個人装備を点検してもらう。 三井物産へご挨拶 ミーティング（今後の捜索と隊員の帰国について）
11月11日(火)	捜索飛行　古野・井本 日本大使館へ挨拶、ご家族・神崎・岡田・石川。 仏像三体入手 現地滞在ＪＡＣ会員、丸尾氏（北大山岳部ＯＢ）挨拶
11月12日(水)	カカニの丘へケルンハイク 登山局にて登頂及び事故証明受理 ネパール山岳協会・クマールカドカ殿下、シャルマ氏に挨拶 宮原氏、THT関係者と夕食会
11月13日(木)	カトマンズ発　TG312便（14:15） バンコック着（18:30） エアーポートホテル泊 ミーティング（帰国時及び帰国後の打合せ）
11月14日(金)	バンコック発　TG740便（10:30） 成田着（帰国）（18:00） 箱崎シティターミナル（20:30） 解散（21:30）

追　　悼



追　悼

岡田　貞夫

私達7名は、けして秀でた隊員ではなかった。しかしながら、世界に冠たるあの難壁に、初登攀なしえたのは、我々の努力とチームワークの結晶に他ならない。ヒマルチュリへ向かう事、2度目とはいえ、心をひとつにし粘り抜けたのは、81年の第一次登山隊の貴重な体験から受継いだ夢をもてたからである。

しかしながら、その夢を現実のものにするために、長い歳月にわたり、己をとり囲む環境に多大なる犠牲を払うことを承知の上での行動は、特に君のようなやさしい心を持つ人間にとっては、本当に辛かったと思う。

「無」からひとつの登山隊を造りだしていく行程は、暗中模索の厳しい経験を積み重ねる日々でしたね。『日出』君の選んだ道は、まさにその通りの行動でした。「家族」か、「山登り」か、ずいぶん悩みましたね。

君が家族にあてた手紙の中で『家族の平和とは、平凡な暮らしの中にあるものなのですね。もう、このような勝手なことは二度としません。』あの言葉が忘れられません。しかし君の払った犠牲がより大きかった程、君の頂への執念は素晴らしいものでした。

私は、君をパートナーとして選べたことを、誇りに思っています。君の卓越したマネージメントにより、我々の行動がどれほどスムーズに運べたか、感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、君とあれ程の素晴らしい体験をし、正直、どんなに胸を張って一緒に帰ってきたかったか。あの時の体験を、今後の実生活の中に生かしていけない君に、お詫びすると共に残念でなりません。

今、『日出』君は、一人で我々のヒマルチュリを護っていてくれます。私達6名は、『日出』と共に、次なるヒマルチュリに向かう心です。

日出さんへ…

鈴　木　弘　之

人の生とは？　死とは何だろうか？　といった判るようで判らない問いをつらつらと考えている。いったい日出さんはどこへ行ってしまったのだろうか。

10月26日、３人の隊員が登頂した日、残った村口・石川と私の３人は、一足早くＣ５よりＣ３に下降した。途中、日出さんからの交信により、古野とニマ・ドルジェが１時20分に登頂したことを知る。３時20分にもう一度交信があり、「あと１時間で頂上へ着くので行かせて下さい」と言っていた。その次は６時過ぎだった。今思えばこれが最後の交信になってしまったのだ。「５時20分に登頂に成功し、現在、フイックスロープのところまで下降した」と言う。Ｃ５に戻るのは９時頃かなと計算した。夜になるのは確実だが何も心配しなかった。安全に降りてくれるだろうと信じていた。しかし、以後ついに中村さんからの声を聞くことはできなかった。その日、12時過ぎまで待っていたが、連絡はなかった。ウツラウツラ半分眠ったような意識の中で、蠟燭の明りに照らされじっと交信を待っている村口の姿が印象に残っている。まさか遭難するなんて露ほども考えなかったのだ。

翌27日、ＢＣの岡田さんから、Ｃ５より二人登って行くとの交信が入る。登って行く？　上へ？……上へ行くなんておかしいではないか。この時初めて遭難の疑いを持った。そして夕方、上部と連絡を取る為、Ｃ３よりＣ４まで登り返した時、恐れていた事実を知った。Ｃ４で古野とニマ・ドルジェの顔を見た時、すべてを理解した。「話ができるか」と聞くと、「ええ」と古野が答えた。トランシーバーを握った古野の口から、ＢＣへ、そしてＣ３へ、「最悪の事態が発生しました…」という言葉が流れ始めた。こんなことがあるのであろうか。一番死んではならない人が死んでしまうなんて、信じられなかった。今でも信じられない思いである。

10年以上も前、法学部１号館の１階だった。一人で山岳部の部員勧誘をやっていたのが日出さんだった。あれが出会いだった。あの時から、思えば随分長い時間を一緒に過させてもらった。北ノ丸公園でのトレーニング、合宿前の準備会、一緒に見に行った映画 ― 確か『カッコウの巣の上で』という題だったな。学部が一緒だったこともあって、授業の話もよくした。日出さんは政治学のゼミに入っており熱心に活動していた。山岳部にあっては珍しいことである。我々１年にとって、２年生は一番親しい存在であり、日出さんにはいろいろなことを教えてもらった。

5月の谷川岳、6月の穂高での初夏合宿、7月から8月の立山での夏山合宿、10月には鳳凰三山を縦走した。中央線の穴山駅から登山口まで延々と走り続ける強行軍で、結局3日行程を1日余りで駆け抜けてしまった。「山では走るに限る」などと恐ろしいことをのたまう人であった。あの年は春山合宿の南アルプス全山縦走をもって無事終了した。3年生の松野さんがリーダーで、2年は中村さん一人、あとは1年ばかりでいろいろ神経を使ったことと思う。

1977年(昭和52年)、日出さんはサブリーダーとなる。山岳部の大幹部だ。北鎌尾根から奥穂高縦走の5月山行に始まり、奥多摩海沢への新人歓迎山行、初夏、夏山合宿と続く。この間にも、富士山での中原万次郎先生の捜索、北極のトレーニングとしての丹沢主脈縦走、9月の初めには二人で九十九里浜を歩いたこともあった。夜、東京を出発したが、千葉まで来ると電車がなくなってしまい、公園のベンチで蚊に食われながらビバークした。翌朝一番の列車を銚子の近くで下車、それから夜8時まで13時間も歩き続けなんと60㎞を完歩した。山ばかり登っていた中にあって楽しい思い出として残っている。以後、中村さんと今野、私の三人は北極の準備に没頭した。学生部のマラソン大会にも出場し、3位か4位になった。11月の富士山へも一緒に行った。

年が明けて1978年(昭和53年)1月から5月まで北極へ遠征した。そこでは無線係として実によく活動し、極点到達が近付いた頃は、殆ど眠らずに無線機にはりついていた。自分の責任に関しては徹底的にやる人だった。

帰国した日出さんは4年生、山岳部ではチーフリーダーとなったが、総指令官としての気苦労も多かったことと思う。特に1年生の面倒をよく見ていたことが印象に残っている。そして又、いつ就職活動をしたのだろうと思うくらい、山岳部の生活にどっぷり浸っていたが、冬の後立山、八ケ岳縦走を最後に卒業を迎えた。充実した学生生活だったと思う。

北極への遠征、数々の山行、そして今回のヒマルチュリ……。日出さんと沢山の思い出を共有することができ幸福だった。しかし今、その思い出を共に語るかけがえのない人を失ってしまったことが残念でならない。

10月30日、日出さんのケルンで長い時間を過した後、部歌を斉唱しBCを後にした。シェルパ達も祈りを捧げ、一足早く下って行った。濃い青空の中、天を突くヒマルチュリと日大旗が鮮やかであった。

これでさようならです。また会いに行きます。待っていて下さい。

忘れえぬ日々

日本大学ヒマルチュリ登山隊1981年登攀メンバー
松　野　　豊

黒と白の岩肌、紺碧の空、天空に大きく肩をいからせながら聳えるヒマルチュリ。

10月26日、君は残照の中、未踏の岩稜から、僕らの憧れとともにその絶頂に立った。

帰路、君は登頂成功の交信をし、「確実にゆっくりと下降します。大丈夫です。」というしっかりした交信を最後に、帰らぬ人となってしまった。君は暮れゆくヒマルチュリの空の下で何を想い、考えていたのだろうか。君のことだから家族のこと、そして仲間のことを時の経つのも惜しむように思い浮かべていたに違いない。

澄んだ空気の中、これから始まる登攀に胸をときめかせながら、見るもの見るものに新鮮さを感じながらキャラバンし、期待と不安とが交錯する中、エーデルワイスの咲く草付に一瞬の安らぎを覚えたであろうに。しかしそれから上は妥協を許さない山の厳しさが待ち受けていた。

でも君は、心を許し合える仲間の友情と協力のもとで、見事に頂に自らの足跡を残した。

でも敢えて言おう。山で死んではならない。どんな事をしても無事に帰って来なければ。愛する家族と仲間が待っているのだから。

君が残していった僕との山での思い出、都会での生活。冬山で、レスリングをやっていた君は、狭いシュラフの中でその身軽な体を利して得意になって回転していたっけ。

知床の流氷の上でピッケルを振っていた君。

合宿という合宿には、自分の体よりも大きな荷物を歯をくいしばって担いでいた君。

春の南アルプス縦走では、毎日、トップを歩き、リーダーだった僕からルートを間違えた時、えらく怒られたっけ。

厳しかったトレーニングに汗を流し、山岳部の生活に、誰もが何度か疑問を感じ、君も悩んでいた。四年間の学生生活。

至らぬ先輩だったがクラブ活動、山での生活の中で、一年下だった君とは、なんと多くの貴重で充実した日々を過した事だろう。

君が登ったヒマルチュリの頂への一歩一歩が僕にとっては、君との忘れえぬ日々です。

中村君、どうぞ安らかに眠ってください。

合掌

おねがい　INFORMATION

"日本大学ヒマルチェリ登山隊1986"の隊員、中村日出君は、ヒマルチュリ東峰(7,893m)、の南西壁7,550m付近にて、1986年10月26日、滑落し行方がわかりません。ドルディ・コーラ氷河上部で、次の図のような、上顎又は下顎のある人間の骨を、発見した人は、日本大使館、又はネパール国観光省登山局へ、連絡してくださるようお願い致します。

Mr. HIZURU NAKAMURA, a member of Nihon University Himal chuli Expedition 1986 was slipped at South West Face of Mt. Himalchuli East (7893m), on October 26 in 1986, up glacier of Dordi Khola. But he was not discovered. The next chart is the upper jaw and lower jaw of his bones. Please discoverer reports it to the Japanese Embassy or His Majesty's Goverment of Nepal, Ministry of Tourism, Mountaineering Section.

upper

porcelain fused metal crown bridge 5 4 3

amalgam (occlusal) 6

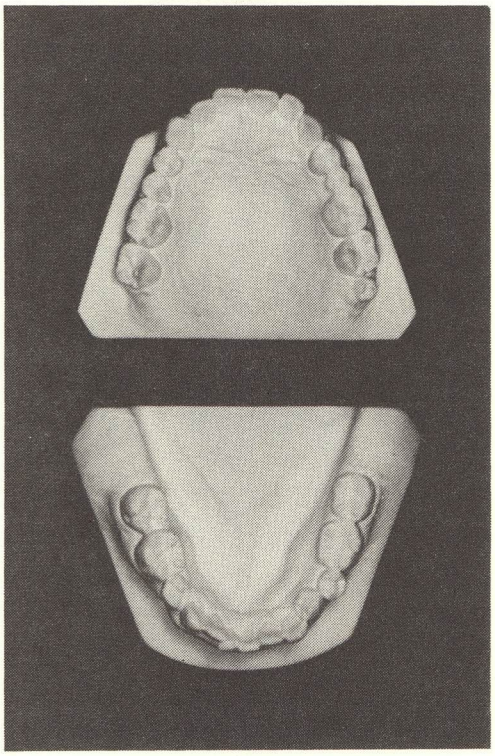
amalgam (occlusal) 7

amalgam (occlusal, buccal) 7

amalgam (occlusal bucclul) 6

amalgam (occlusal) 5

missing by extracted 4



4 5 6 metal crown bridge

7 amalgam (occlusal)

8 undersized tooth

7 amalgam (occlusal, buccal)

6 amalgam (occlusal mesial, buccal)

5 amalgam (occlusal)

4 amalgam (occlusal distal)

lower

国　籍　日本；人種　黄色人種；　死亡年月日　1986年10月26日；
Nationality Japan; Race Yellow; Date of death 1986, October 26;

氏名　中村　日出；年令 31；性別　男；身長 163cm；
Name Nakamura Hizuru; Age 31; Sex Male; Height 163cm;

滑落地点　ヒマルチュリ東峰，南西面，高さ 約7550m，ドルディコーラ氷河上部；
Slipped place Mt. Himalchuli East, South West Face, about 7550m height, up glacier of Dordi Khola;

日本大学ヒマルチュリ登山隊1986　日　誌

Ⅰ. 準備日誌

1984年

6.15　ヒマルチュリ南稜（プレモンスーン期）の仮申請をネパール観光省へ提出する

7. 7　1981年のメンバーによるヒマルチュリの登山計画検討

9.16　有志によるヒマルチュリ登山計画検討

10. 1　仮申請をポストモンスーン期に変更

12.25　今後の準備計画、予算などの検討

1985年

1.11　日本山岳会理事会にてヒマルチュリ計画の承認と都岳連への推薦状を得る

2.　都岳連、日山協の推薦状を得る

2.　外務省を経てネパール政府観光省へ正式申請書提出

7.24　日本大学ヒマルチュリ登山隊1981の反省と1986の計画を検討する

10. 3　ネパール政府観光省より正式許可証取得

11. 1　月2回の参加希望者による集会を定例化し、具体的な進行と勉強会を開く

11.15　ネパール政府観光省へ登山料を振込む

11.24　河口湖フルマラソン参加

1986年

1.2〜4　八ケ岳山行

2. 7　桜門山岳会新年会にて計画概要の説明と隊員の紹介を行なう

2.23　日山協海外技術研究会に出席する

2.25　桜門山岳会ヒマルチュリ検討会にて予算案、その他組織的取組みを検討。月1回の実行委員会発足

3. 4　桜門山岳会理事会において日本大学ヒマルチュリ登山隊1986の正式承認を得、組織委員の検討を行う

3. 9　都岳連高所順応研究会に出席する

3.12　登山隊事務所開設

3.15　仮計画書作成

3.20　物品寄贈依頼開始

4.23　桜門山岳会募金委員会の発足、目標額、方法などの検討が行なわれる

5.1〜7　剣岳、八ツ峰山行

5.10　正式計画書発送

6.12〜16　穂高山行、大城、怪我のためヒマルチュリ登山隊への参加は不可能となる

6.15　日本大学両国研修所の一室で集荷、梱包作業を開始する

7.10　梱包作業終了

7.16　隊荷を輸送業者に引き渡す

7.25　現役とＯＢの親睦会を兼ね、日大山岳部、桜門山岳会主催の登山隊壮行会開催

8. 2　先発隊3名出発

8. 9　本隊4名出発

Ⅱ. 登山日誌

8. 3　先発隊3名カトマンズ入り

8.10　本隊4名カトマンズ入り

8.21　本隊キャラバン、カトマンズ出発

8.23　後発キャラバン、カトマンズ出発

8.31　休養キャンプに全員集結、ＢＣまでのルート工作

9. 5　ＢＣ建設、3名ＢＣ入り

9. 6　隊員4名と現地スタッフ全員ＢＣ入り

9. 7　ＢＣ開き
9. 8　登山活動開始、Ｃ１予定地到達、新ルートの偵察
9. 9　トリプルピーク直下まで工作
9.10　洞穴ピーク直下まで工作
9.11　洞穴ピーク到達
9.16　Ｃ１（5,550ｍ）建設
9.17　洞穴ピークまでのルート整備
9.18　スーパークーロワールまで工作
9.19　Ｃ２予定地モロゾフピークまで工作
9.20　Ｃ２（5,920ｍ）建設
9.21　工作６ピッチ
9.22　羅生門まで工作
9.23　Ｃ３予定地到達
9.25　Ｃ３（ABC、6,370ｍ）建設
9.27　6,700ｍまで工作
9.29　ルート整備
10. 4　6,800ｍまで工作
10. 5　Ｃ４予定地到達
10. 7　Ｃ４（6,950ｍ）建設
10. 8　南稜10ピッチ工作
10. 9　さらに12ピッチ工作
10.12　Ｃ５予定地到達
10.13　Ｃ５（7,250ｍ）建設
10.14　下部岩壁４ピッチ第一雪田まで工作
10.15　下部岩壁５ピッチ第二雪田まで工作
10.18　全員ＢＣに下降集結する
10.20　登攀活動再開、アタック隊３名出発する
10.21　アタック隊３名出発する
10.24　岩壁中央ルンゼプラトー（7,700ｍ）まで７ピッチ工作
10.25　最終岩壁（7,790ｍ）まで4ピッチ工作
10.26　隊員３名、及びシェルパ１名が頂上に到達する。隊員１名、Ｃ５に帰らず
10.27　捜索
10.28　全員ＢＣへ下降
10.29　２名カトマンズに
10.30　ＢＣ撤収
11. 1　２名カトマンズに帰着
11. 5　本隊キャラバン、カトマンズに帰着

Ⅲ. 事後処理日誌

11. 1　留守本部にカトマンズより事故の第一報が入り、早急に対策集会が開かれる
11. 2　留守本部を中心に対策集会が聞かれる
11. 4　事故対策委員会が設置される
11. 6　隊員１名が帰国し、事故対策委員会にて状況の説明と検討が行なわれる
11. 7　中村実栄さん、実母の初江さん、ＯＢ神崎の３名がカトマンズへ出発する
11.9〜11　３回のフライトで空から捜索を行なう
11.14　全員帰国
11.15　中村家訪問
11.17　中村家、精糖工業会、日大体育会へ挨拶
11.18　集会
11.19　帰国報告会を開く
11.20　集会
11.22　集会
11.25　仮報告書発送
11.28　中村家通夜
11.29　中村家葬儀
11.30　登山隊事務所を閉める
12. 1　日大総長へ帰国の挨拶
12. 5　集会
12.12　事故対策委員会
12.14　中村家四十九日
12.15　募金報告書、仮決算発送
12.27　日本大学ヒマルチュリ登山隊1986、反省及び検討会

1987年

1. 7　反省会
1. 9　報告会準備
1.26　日大理事会、報告会準備
2. 1　中村家百ケ日
2. 6　私学会館にて報告会開催
3. 5　事故対策委員会解任式

会計報告

日本大学ヒマルチュリ登山隊1986

（昭和62年3月31日）

―― 収　入 ――

個人負担金	8,816,520円
桜門山岳会	5,148,930円
一　般	200,000円
日本大学	300,000円
日本大学文理学部	300,000円
雑収入	60,433円
合　計	14,825,883円

―― 支　出 ――

＜国　内＞

渡航費	2,149,431円
装備費	1,880,475円
食糧費	127,570円
事務通信費	587,624円
輸送梱包費	1,698,650円
医療費	34,769円
保険費	265,592円
酸素費	1,065,922円
登山費	479,200円
雑費	370,762円
小　計	8,659,995円

（捜索隊費用として）

国内	769,560円
国外	1,046,960円
合　計	1,816,520円
	（上記に含む）

＜国　外＞

滞在費	881,740円
食糧費	1,114,897円
装備費	107,632円
シェルパ装備費	819,000円
シェルパ賃金	512,050円
ポーター費	849,142円
事務通信費	54,642円
通関費	639,520円
保険費	181,650円
チャーターフライト	720,000円
雑費	152,836円
小　計	6,033,109円

合　計	14,693,104円
残高	132,779円

A Summary of the Expedition in Himal Chuli

— Nihon University Himal Chuli Expedition 1986 —

by Hiroyuki Suzuki

1. The members of the party were as follows

Leader	: Sadao Okada	(Age : 36)
Member	: Hizuru Nakamura	(〃 31)
	Noriyuki Muraguchi	(〃 30)
	Hiroyuki Suzuki	(〃 29)
	Kiyoshi Furuno	(〃 25)
	Ichiro Ishikawa	(〃 24)
	Shigeki Imoto	(〃 23)
Sirdar	: Nima Temba	(〃 30)
High-altitude	: Dawa Gyaltsen	(〃 40)
porter	Nima Dorje	(〃 31)
	Ang Dorje	(〃 36)
	Thingy Dorje	(〃 21)
Chief Cook	: Ang Norbu	(〃 31)
Kitchen Boy	: Bihendra Lama	(〃 28)
	Tek Bahdur	(〃 24)
Mail Runner	: Dawa Tenzing	(〃 24)
	Chonba	(〃 25).
Kitchen Staff	: Dorje Tamang	(〃 26)
	Gonbu Sherpa	(〃 14)
Liaison Officer	: Tage Nath Podel	(〃 27)

2. Route

Marsyandi Khola～Dordi Khola, Himal Chuli South Ridge～South west Face.

3. The records for the climbing in 1981.

The climbing party of "The Nihon University Himal Chuli Expedition 1981" have climbed up to the altitude of 7,600m on the day of October 24.

4. Summary of the Expedition

In advance, an advance party left Japan for Nepal on August 2. They cleared custom's procedures of the cargoes sent from Japan and prepared for equipment, food.

On August 9, the others of the party left for Nepal.

(Starting Caravan)

The first Caravan started to the Rest Camp on August 21.
The second Caravan started on August 23.
The party reached the Rest Camp at an altitude of 3820m where was a ruin of the Base Camp by Nihon University Himal Chuli Expedition 1981 on August 31.

(Building of the Base Camp)

On September 6, the Base Camp was built at 4,950m after Spending several days on loading and acclimation to altitudes.

(Beginning to climb)

On September 8, our climbing starts. On September 16, the party made Camp 1 at 5,920m. On September, Camp 2 was established at 5,920m on the snow ridge. There is a sharp knife ridge 1 kilometer in the upper part of Camp 2.
But route making goes on smoothly. On September 25, Camp 3 was built at the end of snow plateau coming gently down from the south ridge. It was an altitude of 6,370m. Camp 3 was suitable for an advance base camp, because there were no wind, rather safety and adequate altitude.
Route making in the upper part of C3 did not go on smoothly because of deep snow. We had a heavy snow every day. We are still in the monsoon.
On October 7, Camp 4 on a wind ridge was constructed at 6,950m. Tibet was able to be seen from Camp 4. On Octorber 13, C5 was pitched at the very foot of the south ridge. It was at 7,250m. The next day they began an assault to summit. Ascent is at a snail's pace due to the difficult route. The cold gets into the body through the double boots and feather-stuffed coats.
On October 17, the monsoon was over.
On October 26, the weather is fine and the wind blows very hard. We had made our fixed rope to 7,800m. Eventually The first party, Kiyoshi Furuno, Nepalese Sherpa, Nima Dorje climbed Himal Chuli 7,893m at 1:00PM.
The second party, Hizuru Nakamura, Shigeki Imoto, climbed the mountain at 5:20PM, too.
But one the summitter Hizuru Nakamura did not came back to C5.
On October 27, We looked for him upper C5, but we could not find him.
Un fortunately we thought that He slipped at 7,550m while desending.
On October 28, all members of the party came back to the Base Camp.
On October 29, two members, Sadao Okada, Noriyuki Muraguchi started to go down to Dumre. Four members left for Dumre in the next morning.

御協力者

日本大学ヒマルチュリ登山隊1986

（敬称略、順不同）

）

三信製織株式会社
十條キンバリー株式会社
イワタニ・プリムス株式会社
資生堂刷子工業株式会社
リーベルマンウェルシュリー株式会社

日本アラジン
インターナショナル株式会社
ヤマモリ食品工業株式会社
リプトン・ジャパン株式会社
精糖工業会

株式会社ゴールドウィン
三洋デュラセル
シイベル機械株式会社
株式会社寺岡製作所
株式会社ソニー・エナジー・テック
ソニー株式会社
東洋水産株式会社
株式会社永谷園本舗
宮坂醸造株式会社
東京団子

株式会社アックス
株式会社サンクレスト
株式会社キャラバン
株式会社ダンロップ
スポーツ東京
小西六写真工業株式会社
明治製菓株式会社
明治製糖株式会社
雪印乳業株式会社
味の素株式会社

日本大学
マウンテントラベル株式会社
東京農業大学山岳部
山形クライミングクラフト

群馬県山岳連盟
ヒマラヤ観光開発株式会社
カモシカ同人
株式会社 Product'80

筑波大学体育科学系
運動生理学研究室
エアー・インディア
化学工業日報社

日本大使館
S・R・シャルマ（観光局）
大津二三子（コスモトレック）

クマールカドカ殿下
シュレスタ（登山局長）
ランジャン（エクスプレスハウス）

テク・ボカレル
（ネパール山岳協会副会長）
大河原夫妻

東真利子　小松幸三　岡村治明　丸尾祐治　浅野勝己
㈲魚熊商店　本間桂子　田村賢二　金坂陽子　広瀬俊雄
白倉精　安田ツヤコ　小田島正幸　直井利之　福嶋茂
寺元清　田村稔　上野喜清　長田啓司　野中精二
武谷昌之　新井一夫　遠藤崇浩　福島幸之助

沼尻正隆　清田清　関西桜門山岳会
戸村貞男　河内邦介　置塩光　遠藤二郎　秋庭鉄之
平野弘毅　鈴木克己　鞍田昌彦　坂省三　横沢利武
窪田宗英　武田哲男　笹本正剛　三谷英夫　素木喬三
水野依信　鷲頭正美　菊池典男　田中昇　佐藤幸雄
秋保実　千谷壮之助　佐藤耕三　本片山数雄　落合晋
土肥信義　津村利男　真島恒雄　新田業　岡本如矢
米沢直治　前田一二　野田福五郎　松井正　丸山精一

小島八郎
芝田稔
北村二郎
松田雄一
山口靖二
高松雄万
守屋喜久夫
山本晃弘
堀口章宣
桜井昭
中川勝次
志水進
石井達男
小金井清治
鈴木基之
安田善康
木村勝久
川久保芳彦
安田敬三
榎並洋三
平山善吉
熊谷義信
森泉寿夫
西田勇一

三井英夫
宮原巍
深瀬一男
青木重雄
村石幸彦
中嶋啓
村上智一
青木繁
高山公明
下崎雄二
福島繁雄
大城泰
徳田昌久
斎藤隆
中里修
飯島正敏
赤井一隆
川崎吉光
谷口元
池田錦重
片柳実
小島藤司
菅原省司
今村文彦

高橋正彦
高緑繁伸
鈴木馨
神崎忠男
関孝治
大澤弘明
山平靖
松本陸雄
柄沢洋城
広田亮
川口洋之介
尾上昇
長島宏
笠原宏文
池田新三
黒川紀男
嵯峨野宏
多和田忠
戸倉正博
猪爪宗雄
中村進
平戸伸之
古畑勇
平野隆司

樋山規夫
半谷伸俊
中山昌之
川上伸生
望月重昭
和田政司
山本芳雄
中塚功康
高沢誠
小川郁夫
宗方慎二
玉置吉久
岸田達明
村木冨士
磯川忠男
羽賀正一郎
植木博章
橋本健
真鍋政道
渡辺将則
前田猪佐雄
松野豊
木津直人
榎本匡伸

今野善郎
森和彦
伊藤豪
川那辺一
阿部正則
野中有美子
中田二照
矢崎裕巳
向笠茂雄
茂呂嘉之
大谷直弘
塚越稔
沢野新一朗
山本修
鈴木雅博
原田雅子
太田毅
西川正雄
福島佑二
旭岡寛二
渡辺良夫

おわりに

日本大学ヒマルチュリ登山隊1986に対しましては、物心両面に於いて多大なる御協力を賜りましたおかげで充分なる登山活動が行なえましたことに、隊員一同深く感謝しております。

また、中村日出君遭難に関しましては、御心痛、御迷惑をおかけし、その後の整理、捜索隊募金、報告会と、滞りなく済ますことが出来ましたのも、御理解を下さいました多くの皆様のおかげと重ねて御礼申し上げます。今後は、この様な事故を二度と起こさぬ為にも努力を重ねていく所存でございます。

現在、私達6名は、おちつきを取り戻し、日本大学ヒマルチュリ登山隊1986の活動にピリオドが打てる迄の整理、検討を済ませ、ここに報告書を発刊いたします。

中村日出君のご冥福をお祈りするとともに日本大学、桜門山岳会会員をはじめ、日本、ネパール両国の多くの皆様より賜りました御厚情を深く感謝し、心より御礼申し上げます。

1987年8月　岡田貞夫

――― 編　集　後　記 ―――

ヒマルチュリ南稜は、各国数隊の挑戦を退け、5度目にしてその域を明け渡しました。これは、7人が持てる力を存分に出し尽くし、苦闘と努力の末、難攻不落のルートから頂上へ到達した記録です。

しかし、ついに帰らなかった一人の登頂者・中村日出君のことを考え続けなければなりません。希薄な空気の中で己と闘いながら、力強く踏みしめていったその一歩一歩が、日本で待つ家族や仲間に向かっての登高だったはずです。広がる未来に向けてのヒマルチュリであったはずです。最も輝いている中で、彼は我々の前から姿を消してしまいました。あの優しい男の炎のような情熱と輝きに満ちた笑顔は、今も鮮明に生き続け、これから何年先でも変わることはないでしょう。彼の残した素晴らしい思い出と、行動をともにした仲間として、彼の分まで、力強く精一杯生きて行かなければなりません。

この報告書は1986ヒマルチュリで行われた登山の記録です。状況や行動のありのままを、率直に書くことによって正確に伝えようとしたつもりですが、どこまで意図が達成できたかわかりません。私達は一人の大切な仲間を失い、二度とこのような悲劇を繰り返さないためにも、さらに検討と反省を続けなくてはなりません。

この報告書が、これからの登山に少しでも役に立つことを念じています。そして、なんとしても未来へ夢を繋いでゆきたいと思っています。

日本大学ヒマルチュリ登山隊1986に、御協力くださった多くの方々と、報告書の編集に御力添えをいただいた皆様に、心からお礼申し上げます。

1987年8月
編集担当　村　口　徳　行

HIMAL CHULI 1986

発行日　1987年8月
発行所　日本大学ヒマルチュリ登山隊　1986
日本大学山岳部
桜門山岳会
〒102　東京都千代田区九段南4−8−24
電話 03(329)5725
発行責任者　岡田　貞夫
印刷所　化学工業日報社
東京都中央区日本橋浜町3−16−8(〒103)
TEL　(03)633−7931　(大代表)

本書に関する連絡所　〒101　東京都千代田区神田佐久間町4−16
岡田　貞夫　電話 03(866)2473

NIHON UNIVERSITY
MOUNTAINEERING CLUB.